

宇都宮市教育委員会埋蔵文化財報告書第4集

宇都宮市瑞穂野団地遺跡

昭和53年3月

宇都宮市瑞穂野地区画整理組合

宇都宮市教育委員会

序

開発ブームのピークとされた、昭和48年宇都宮市の都市計画の施策の一つとして、各方面から待望されておりました、市の南東部にある広大な平地林を聞いての工業住宅団地の造成にあたり、当委員会では、この開発に先立って埋蔵文化財の保護の立場から事前協議を行い、開発予定区内の遺跡について予備調査を実施、予定地が広大な面積に亘るため破壊の著しい地域について、緊急調査の必要があるるとし、当委員会において発掘調査を実施しました。

多くの困難を克服しての調査でありましたが、古代人の生活の場であった古代住居址の全貌が明らかにされ、貴重な数多くの資料が得られ、ここに瑞穂野団地発掘調査報告書を発刊することができましたことは誠に喜びにたえません。

この調査にあたり、終始御指導と御協力を賜りました、宇都宮大学名誉教授辰巳四郎先生をはじめ、宇都宮大学考古学研究会員の方々および、この調査について全面的に御理解と御協力をいただきました、宇都宮市瑞穂野土地地区画整理組合と地元の方々に対しまして本書刊行に際しあらためてお礼申しあげる次第であります。

昭和53年

宇都宮市教育長 後藤一雄

発刊に寄せて

瑞穂野遺跡は、宇都宮市市街地の南東方、段丘上に立地する先土器時代から奈良・平安時代に至る迄の規模の大きな遺跡である。昭和48年8月から10月にかけて、事務局宇都宮市教育委員会のもとに、宇都宮大学考古学研究会の諸君とともに発掘調査を行った。

瑞穂野遺跡の名は、遺跡周辺の旧村名によったものである。昭和初期大日本地名辞書を著わされた古田東伍博士は旧瑞穂野村に刑部の大字が遺るとして、一帯を古代の下野国河内郡刑部郷に比定された。今回の発掘調査の結果最も多く検出されたのは奈良・平安時代の住居址群であった。この意味するところは、先の大字名と併せて、無視するわけにはいかない。更に南地区より検出された先土器時代剣片・弥生時代住居址等は、本県では数少ない貴重な資料として意義のあるものと信ずる次第である。

瑞穂野遺跡は、今も周辺に残る緑濃い豊かな自然の中で、先土器時代のある時期から、奈良・平安時代まで連綿として活動してきた人間の足跡である。そして今、工業住宅団地として再び息吹きはじめた遺跡に立つとき、それが一部遺跡破壊につながるとはいえ、ふと感慨無量なるを得るのは私だけではあるまい。

発掘調査、遺物等の整理から報告書の作成に至るまで五年の月日を数えるという。これは決して速やかなものとはいえない。しかし、この五年の間、報告書作成のため払ってくれた宇都宮大学考古学研究会の諸君の努力と情熱には敬服のほかない。

ここに調査報告書を刊行できることは誠に喜ばしいことである。また、調査が順調に進められたことも、その成果について報告書を刊行できることも、宇都宮市瑞穂野土地区画整理組合、宇都宮市教育委員会をはじめ、地元の方々の御指導・御協力、更には先輩諸氏の多大な援助があってはじめてなし得たことである。

本発掘調査に、御指導御協力を賜わりました関係者の皆様に謝意を表する次第であります。

昭和53年

辰巳四郎

例 言

1. 本書は栃木県宇都宮市西荆部町瑞穂野地内にある瑞穂野遺跡緊急掘調査の報告である。
2. 本調査は宇都宮市瑞穂野土地区画整理組合が費用を負担し、宇都宮市教育委員会が主体となって、昭和48年8月から10月にわたって実施した。
3. 本調査は、瑞穂野工業住宅団地の一部について行なった。
4. 図面整理・写真撮影は全て宇都宮大学考古学研究会員が主として行ない、編集は、岩上照朗・石橋知明が担当した。
5. 原則として、造構の実測図は60分の1、遺物の実測図は3分の1に縮尺して掲載した。写真図版の土器等に記されている数字は、例えば1-3は北地区1号住居址の遺物番号3を示し、南3-1は南地区的3号住居址の遺物番号1を意味する。
6. 執筆者は文責を明らかにするため目次の各項に明記した。
7. 本調査の発掘関係者は次の通りである。

事務局 宇都宮市教育委員会社会教育課

社会教育課長 檜原貞國

文化振興係長 吉田利幸

同主任主事 南雄次郎

文化財調査員 増瀬藤四郎

同 坂寄悦男

調査者 担当者 辰巳四郎 (日本考古学協会員)
(宇都宮大学名誉教授)

調査員 宇都宮大学考古学研究会員

岩上照朗 尾花源司 斎藤一男

島田豊金堀保 金田隆

瓦井哲夫 相沢みどり 苗木陽子

石橋知明 高橋文子 大島あや子

阿部文子 大森孝子 高山ハツエ

水品信男 斎藤実 押田繁信

小山純 増永保彦 溝石力也

関シズ恵 浜田利子 岩瀬孝子

増瀬美智子

このほか、発掘調査にあたり、お世話をになりました地元・青年団員ならびに関係者の方々に厚くお礼申しあげます。

本文目次

・ 発刊に寄せて	宇都宮市教育長
・ 発刊に寄せて	辰巳四郎
・ 例 言	
I 調査の経過	岩上照朗
発掘調査に至る経緯	1
発掘調査の概要	1
II 遺跡の環境	岩上照朗
遺跡の立地	3
周辺の遺跡について	4
III 発掘調査	岩上照朗 石橋知明
北地区の発掘調査	9
南地区の発掘調査	47
IV 遺構・遺物の検討	
遺物について	岩上照朗
1. 先土器時代	58
2. 綱文時代	58
3. 古墳時代後期前半	58
4. 古墳時代後期後半以降	60
・ 土器の分類	
・ 時期区分	
遺構について	石橋知明
V あとがき	183

I 調査の経過

発掘に至る経緯

瑞穂野工業住宅団地内遺跡（栃木県宇都宮市刑部町）は、栃木県遺跡目録には未掲載の遺跡であった。遺跡が埋蔵されている台地上は、一部は從前より畠地として利用されていたが、大半は雜木林となっており、遺跡の有無についての調査を実施したことはなかった。これは逆に考えれば、遺構等の保存は極めて良好であったといえる。しかし、本遺跡中の相当な範囲を買収し、一帯を工業住宅団地の造成地として決定した。

昭和48年5月、工事着工が決定され、工事に先がけ宇都宮市瑞穂野土地区画整理組合から遺跡の存在の有無について宇都宮市教育委員会に照会があった。

宇都宮市教育委員会では直ちに当該地区的踏査を行ない一部先行工事の土石中から、多数の土器片の散布が認められ遺跡の存在が確認された。その他にも、濃密に遺構が存在するらしいことも判明したので、遺跡の全面的な現状保存を強調したが、他に造成適地が無いこと、宇都宮市における工業、住宅用地の不足と、用地買収が大方完了していること等から、造成地の変更の不可能であるとの回答があったので、宇都宮市教育委員会は、事前調査の上記記録保存の方法よりないことを確認、宇都宮大学名誉教授辰巳四郎先生に依頼、宇都宮大学考古学研究会に、事前調査の可否について照会をなし、その結果緊急調査を実施することになったものである。

このような経緯の後、昭和48年8月から10月の間の35日間、宇都宮大学考古学研究会員、（別記）地元有志を中心メンバーとして調査がすすめられた。

但し本調査は、予算、期限、人員動員等の制限があり、破壊が甚大と考えられる地区（現、終末汚水処理場、高層アパート建設予定地）を中心に実施した。

発掘調査の概要

瑞穂野工業住宅団地内遺跡の発掘調査は、昭和48（1973）年8月20日から9月11日（うち3日間を除く）と10月6日から10月20日の計35日間に亘って実施した。この団地造成地は段丘東側にあたり、遺構の分布はそのほぼ全面にあるものと考えられたが、調査期間・費用等に制限があり、発掘調査は部分的な範囲でしか実施し得なかった。

7月27日～29日、造成地内の三地点（それぞれA～C地点とした）を試掘し、その結果A地点（図上）からは何等の検出物はなく、B地点において竪穴遺構一基（現北地区1号址）、C地点において同じく一基（現南地区1号址）が検出された。B地点は本報告文中においては北地区（住宅団地予定地）に含まれ、C地点は南地区内（工業団地予定地）に含まれる。発掘調査は両地区とも前述の諸制約のため、機械力を導入しての表土排除から始めなくてはならないので、検出される遺構の性格と遺跡全体の大まかな性格を把握することを主旨として行なった。最終的に調査し得た面積は北地区で約9,600m²、南地区で約2,800m²であった。

北地区的調査は8月20日～9月11日（うち3日間を除く）及び10月6日～10月11日の26日間に亘った。表土排除の段階で、総計26址の竪穴遺構を確認したが、竪穴の平面形が長方形と正方形を呈するものの2種あり、また散布する土器片（土師器・須恵器）から少なくとも二時期に亘る住居址群であると判断された。更にこの住居址群には相互に重複するものがなかったので、床土排除にあ

たっては、後々の住居址の時期判断のため、検出遺物がそれぞれに伴うか否かの区別、各々の造構に属する諸特徴等を明確に把むことを重要視した。その結果は後述した通りである。

南地区の調査は10月10日～10月20日の11日間実施し、総計10址の造構を検出した。南地区には北地区と異なり、相互に重複するものが数個所あったので、それらの造構間には少なくとも一本の断面図用畔を残しながら調査した。また南地区には性格不明の円形造構が確認されたが、これらの埋積土は非常に厚いため造構を二分割して調査した。結果は後述の通りである。

再記するが、発掘調査し得た区域は両地区とも段丘の縁辺に近い部分でしかない。発掘調査終了後しばらくして現地を踏査したところ、造成予定地内には数多くの豊穴の分布が見られた。その正確な数値は示すことはできないが、この数多くの豊穴の存在と、それに対して調査し得た造構数の少なさを思う時、今悔悟の念を生じて止まない。この造成地は現在瑞穂野工業住宅団地と命名され、種々の建造物が進出しつつあるが、場所によっては比較的保存の良い地区がある。これらが何らかの形で再度の調査がなされることを期待するものである。

II 遺跡の環境

遺跡の立地（図-1、4）

瑞穂野工業団地内遺跡は、宇都宮市西刑部町市営瑞穂住宅団地内に所在し、宇都宮市市街より南東方向 約10kmに位置する。

宇都宮市市街の南東及び南部は北南東平野の一部に属し、低平な台地（段丘）及び低地が幾筋か南北に細長く続いている。これらは主として①宝積寺段丘（鬼怒川東岸に、流路に沿って南北に分布し、南端は真岡市西部に達する。）、②宝木段丘（宇都宮市徳次郎町付近より、宇都宮市宝木、西川田町に亘り、ほど南北に延びている。）、③岡本段丘（鬼怒川西岸に沿い、河内町岡本より上三川町に続く南北の細長い段丘。）、④田原段丘（上河内村今里付近から宇都宮市平松町を経て上三川町へ続く。本段丘の南部ではほとんど岡本段丘の西側に接している。）、⑤網島面（鬼怒川流路東西に沿って延びるものと、田川流路東西に沿って延び宇都宮市市街地の大半を載せるものの二箇所。）の五つに大別される。

本遺跡は、鬼怒川の一支流江川によって開拓を受けた岡本段丘東縁に立地する。遺跡付近の段丘上は東西幅約600mの比較的平坦な面となっている。後年、本遺跡の西方から北西方で、新国道四号線、住宅供給公社の工事に伴う事前調査で相当数の住居址群が検出されたが、その遺跡の範囲内に本遺跡が織入されるとするなら、本遺跡の周囲には相当大規模な集落址の存在が予想される。北調査区域での標高は約95m、南調査区域での標高は約85mを数え、双方の間隔は約1,400mをはかる。また付近の水田面との比高はともに2~3mである。本遺跡東方約2,500mには鬼怒川がほぼ南流し、また西方約3,000mには田川が南流している。鬼怒川、田川と本段丘の間には現在もなお広大な可耕地が開かれている。

次に遺跡を載せる段丘の被覆ローム層序であるが次の通りである。但し、ローム層序については南調査区域より検出された4号円形有段造構の壁面の観察によったものである。北調査区域の被覆ローム層序もほぼ同様である。

- ①表土層；発掘調査以前に削平されており不明確ではあるが層厚は約70cmをはかる。
- ②火山灰層；層厚約57cm、概ね黄褐色を呈しているが、厳密にみれば上位の漸移層的な部分、下位には比較的硬くひきしまった火山灰層に分けられ、砂粒の混入を観察することができる。
- ③黒色帶；層厚約31cm、上下の火山灰層に比べてやゝ黒味がかった層であったので、宇都宮近辺で観察される。宝木ローム層上位の所謂ブラックバンドに相当するものであろう。炭化物の小片が混入することがある。
- ④火山灰層；層厚48~58cm、②層に比して更に硬くひきしまった層であり、下位に鹿沼軽石粒を少々含むことがある。
- ⑤鹿沼軽石層；層厚76~100cm、黄味がかった粗い粒である軽石の層である。
- ⑥火山灰層；正確な層厚は示せない。水分を多量に含み、比較的粘土化の進んだ層であり、上位に鹿沼軽石粒を少量含んでいる。

以下更に掘り進めば、段丘疊層に達するものと考えられるが、それは観察し得なかった。なお②はその供給源が主として男体火山とされ、③~⑤は群馬県の赤城火山とされている。

検出された住居址の床面はいずれも、上記の②層中に構築されているが、南調査区域で検出され

た円形有段造は④層まで掘削されているものが多く、一例だけ⑥層にまで至るものがある。

文 献

- (1)阿久津純；『宇都宮周辺の関東火山灰層と河岸段丘』、宇都宮大学研究論集第4集、1955
『表層地質説明書「宇都宮」5万分の1』、経済企画庁、1960
(2)この遺跡は猿山遺跡と呼称されている。
(3)阿久津純；宇都宮付近の関東ローム（火山灰層）、地球化学、1957

周辺の遺跡（図-4、表-1、2）

遺跡を載せる岡本段丘を含めて、宇都宮市市街の南東及び南方段丘上には、比較的密な遺跡の存在が確認されている。図示したものは弥生式土器、土師器・須恵器散布地と古墳及び古墳群である。この範囲外にも周辺には多数の著名な遺跡が存在している。図示した遺跡のうち、比較的知見のあるものを整理しその概要を記したものが表-1、2である。

まず、図示した範囲内で遺跡の分布状態を見、特徴を箇条書的にまとめてみると、

①弥生時代の遺跡は主として田川西に沿って南北に続く段丘（宝木段丘）上に多く分布している。
②古墳及び古墳群は、2、3の例外はあるが、台地（段丘）の東縁もしくは西縁、或いは中央部にあっても小河川によって開拓を受けた台地（段丘）の縁辺に立地している。またその分布は一見すると土師器・須恵器の散布地と混在しているようであるが、集落址とは別のある一定の範囲内に集中している様相が見受けられる。（例えば、図中No.1～5周辺、No.8～11周辺、No.12～14周辺等である。）あたかも墓域の選定がなされたようであるが、これは集落址と古墳及び古墳群個々との時期的な関係、遺跡の後世における破壊・消滅等を伴せ考えなければ概要的に断定し得ないものであり、今後の精査が望まれるものである。

③土師時代集落址・散布地は、大略②と同様な立地状態を呈するが、その分布状態は前述のように古墳及び古墳群と重なり合わないような様相を呈している。またこれにもいくつかの集中した地域があるようである。（例えば、板木日産遺跡を中心とした地区、瑞穂野遺跡を中心とした地区等）

上述①～③とも遺跡の範囲や分布の調査を徹底しなければ断定しがたいものであり、今後より精密な調査が望まれる。

次に表に掲げた遺跡の中で、幾つかのものについて略述してみる。

弥生時代

d、二軒屋遺跡は、弥生後期の二軒屋式土器の標式遺跡となったところである。この遺跡は昭和14年「考古学」に調査概報が発表された。現在付近一帯は宅地化が進んでおり、消滅の惧れがある。報告された遺物は深鉢形、壺形の土器である。標高約93m、段丘東縁に立地する。

g、天狗原遺跡は、二軒屋遺跡の南東方約600mに位置し、雀宮と安塚とを結ぶ道路の南側にある。しかし、遺跡地は現在宅地化が急速に進んでおり、消滅の惧れがある。出土遺物は故野沢岩藏氏が一括保管されていたものがあり、破片が多く器形は判別し難いが、二軒屋式土器を知る上で重要ななものとされる。標高約90m、段丘東縁近くに立地する。

k、仏沼遺跡は、日産自動車板木工場敷地内に所在し、標高70～80m田原段丘の東側に立地する。昭和45年宇都宮市立教諭中村紀男氏等が発掘調査され、弥生時代から古墳時代にかけての遺構及び土壤が検出されたが、弥生時代の遺構からは粗痕の残る土器底部をはじめ、壺の口縁部、土器片等が出土している。これら全てが同一時期の所産であるとはいえないが、北関東弥生中期及びそれ以

隣の土器の文様や器形のバラエティーを想定できそうであるとされる。

古墳時代以降

石井古墳群（図4の1），栃木県遺跡地図での7・1796-1798・1943-1944を含み，近接して分布しているので便宜的にまとめたものである。この中に存在する古墳は確認されたものだけでも，前方後円墳2基，円墳7基があり，いずれも段丘東縁近くに立地している。宇都宮大学考古学研究会の手による上記古墳中の浅間山古墳⁽¹⁾測量調査報告によれば，該古墳は全長約32.5mの小形前方後円墳であり，その形態から古い様相が見受けられるとしている。

帷塚古墳（図4の9），田川の東低位の段丘上に立地し，全長約100mの中期型前方後円墳である。周溝は現在水田化されており判別は難しいが，逆盾形に回っていたと推定されている。本古墳の南西すぐには円墳1基，東に，主要地方道宇都宮結城線によって半壊した古墳1基が現存している。

瓢箪塚古墳（図4の12），鬼怒川西岸に近い水田中に存在する前方後円墳であり，全長約63mの後期型の古墳である。逆盾形の周溝が残り，葺石・埴輪片が検出されている。周辺には数基の円墳が現存する。

愛宕神社古墳（図4の13），瓢箪塚古墳の東方約1kmの山林中にある大形の円墳で周囲は日産自動車栃木工場の敷地になっている。径約40m，幅約15mの周溝が残り，かなり保存が良い。すぐ西側を機川が南流する。

神主古墳群（図4の16），栃木県遺跡地図1649-1650・2283をあわせたものである。付近一帯には比較的集中して古墳の分布が見られる。いずれも段丘の東縁近くに立地する。北方では浅間山と呼称される大形円墳（径約55m）を中心とし小円墳群が見られ，南方では小形の前方後円墳（全長約34m）を中心とし10数基程度の円墳がまとまっている。

大日塚古墳群（図4の17），標高は約80mの宝木段丘縁辺近くに築造されている。愛宕塚（前方後方墳），大日塚（帆立貝式古墳）円墳3基が愛宕塚に近接して現存している。愛宕塚は，昭和52年を通じて宇都宮大学考古学研究室により墳丘・周溝・内部主体の調査が実施され数々の成果を挙げられた。筆者も度々見学の機会を持つことができたが調査報告が待ち望まれるものである。また円墳の1基から，年代が4世紀後半から5世紀の所産と目される銅鏡が発見されており，これも本古墳群の古さを考える手掛りとなっている。

権現山古墳（図4の18），帷塚古墳の西方約1.8kmにあり，大日塚古墳のほど北方に近接した地点にある。形態から中期型の前方後円墳と考えられ，一部畑作により削られているが，周溝などは保存が良い。

牛塚古墳（図4の20），現在は消滅しているが，雀宮駅の南方約1.2kmの地点にあった。帆立貝式前方後円墳である。本古墳は知れるところ三度の発掘を受けている。そのうち明治10年には青銅鏡（船戦神獸鏡他三面）を含む遺物が検出され，現在一括して東京国立博物館に保管されている。昭和44年には墳形復原の目的で宇都宮市教委により発掘調査された。それによると内部主体は木棺直葬と考えられ，今迄出土した遺物等から5世紀末～6世紀初頭の古墳とされている。

大野遺跡（図4の22），昭和45年駒沢大学考古学研究によって発掘調査された遺跡で，段丘東端に近い緩斜面上に立地し，標高約70-72mを数える。住居址出土遺物は土師器であり，年代は中期Ⅱから後期に位置づけられる。集落址は自然環境・規模から考えておそらく農耕集落と考えられる。

順成寺遺跡（図4の23），大野遺跡と同様昭和45年駒沢大学考古学研究によって調査された。段丘西端部の田川の一支流無名瀬川左岸に立地する。標高約72m。遺構として住居址6基が検出され，年代としては前Ⅱ期，4世紀末～5世紀初頭とされている。

⁽¹⁶⁾ 上蒲生遺跡（図4の24）、日産自動車栃木工場建設に伴い、栃木県教委によって発掘調査された。その結果、鬼高期後半に位置づけられる2基の住居址が切り合い関係にあって検出された。この他経塚1基の調査がある。

⁽¹⁷⁾ 上神主庵寺（図4の25）、神主古墳群の北部に接しており、標高約80mの宝木段丘の縁辺にある。本庵寺には以前から人名瓦の出土があことことで知られており、このために盗掘や盜掘が略々で遭構はかなり痛められているという。伽藍配置は不明であるが、7世紀末の建立が考えられている。

⁽¹⁸⁾ 多功庵寺（図4の26）、国鉄石橋駅のすぐ東にあり、現在は天神社境内となっている。調査されていなかったため伽藍配置は全く不明であるが、出土する瓦は奈良後期を上限としているという。

図示した以外にも田原・岡本段丘上にはなお遺跡の存在が推測される。とくに瑞穂野遺跡周辺はまだ山林が多く、より高密な遺跡の分布が予想されるところである。

また本遺跡と時間的に関連の深いものとして下野薬師寺跡・下野国分寺・同尼寺・下野国府跡を挙げねばならない。これらの位置については付図の範囲上示せなかつた。下野薬師寺跡は本遺跡南調査区域の南方約12kmの南河内町安国寺境内に位置し、国分寺同尼寺は南調査区域の南西方約16.5kmの国分寺町国分寺内、国府跡は瑞穂野遺跡からすると南西方位の栃木市街地の東方に位置している。なお国府跡については現在調査続行中である。

「和名類聚抄」に載せられた下野国河内郡内の郷数は10を数える。そのうち刑部郷について吉田東伍博士は、瑞穂地区に刑部の大字が遺るとして瑞穂野村（現宇都宮市刑部・桑島・木代・平塚町を含む地区）、本郷村（現地名不詳）に比定されている。瑞穂野遺跡は現在宇都宮市西刑部町内に存在している。同様に三川郷は現三川町中部に、酒部郷は上三川町の南偏坂上に、また衣川駅は宇都宮市石井町の鬼怒川の岸辺に比定されている。

これら比定された地区は全て、田原乃至宝木段丘上に位置している。またそれぞれの地区に土師時代集落址及び古墳群の密な分布を見ることができる。もし古代の郷と現在の遺跡との位置関係が解明され得るとしたら、これはまた興味深いところである。

一方、衣川駅家を通った古代の交通路は、下野国内では足利駅家から三鶴駅家を経て国府・国分寺・薬師寺に続き、ついで田郡駅家、衣川駅家を経て新田・磐上・黒川駅家から白川関へとほど下野国を縦貫していた。全国的にはこれは畿内から陸奥に至る東山道の道筋にあたる。瑞穂野遺跡の位置はおそらくこの道筋であったと思われる。また瑞穂野遺跡を載せる段丘の東西にはそれぞれ広大な可耕地を控えている。このようなことから、古代における瑞穂野遺跡の盛況が推測される。周辺の数多くの古墳と濃密な遺跡の分布がこの証であろう。

文 献

- (1) 栃木県史編さん委員会：「栃木県史」資料編・考古一、1976
- (2) 倉田芳郎他：「栃木日産遺跡」、日産自動車株式会社、1971
- (3) 宇都宮大学考古学研究会：「峰考古」第一号、1977
- (4) 大和久辰平、塙静夫共著：「栃木県の考古学」、1972
- (5) 宇都宮市教育委員会：「雀宮牛塚古墳」、1969
- (6) 大和久辰平：「上蒲生遺跡」、日産自動車株式会社
- (7) 吉田東伍：「大日本地名辞書」、1937

上述の他、「栃木県遺跡地図」1975、河野守弘著・佐藤行成校訂「下野国誌」1969、田名網宏著「古代の交通」吉川公文館等を参照した。

表-1 弥生式土器散布地

図版番号	遺跡名	所在地	概要	備考
a	東川田	宇都宮市川田町東川田	弥生(二軒屋式)・土師	
b	東川田	"	"	
c	不詳	" 江首島本町	" 土師(五領)	
d	二軒屋	" 西川田町西原	縄文(中) 弥生(二軒屋式)・土師	昭和14年「考古学」に調査概報あり。
e	雀宮駅東	" 雀宮一丁目	弥生・土師・須恵	
f	裏山	" 雀宮町裏山	弥生(二軒屋式)・土師(四分)	
g	天狗原	" " 天狗原	" 土師	
h	北原	" 茂原町本郷	弥生・土師・須恵	
i	瑞穂部内	" 下桑島町飛地	弥生・土師	
j	磯岡B	河内郡上三川町磯岡	弥生(二軒屋式)	
k	仏沼	" 上蒲生	先土器? 縄文 弥生(中期) 土師	昭和45年宇都宮学園により発掘調査

表-2 古墳時代以降

(長及び径は墳丘のみの値である。)

図版番号	遺跡名	所在地	概要	備考
1	石井古墳群	宇都宮市石井町久部	前方後円墳2, 円墳7以上	昭和51年浅間山古墳宇大により調査
2	久保田古墳群	" 久保田	前方後円墳1(長24m)・円墳4	
3	上桑島古墳群	" 上桑島町	前方後円墳1(長46m)・円墳2	
4	天王塚	" 下栗町東原	円墳(径18m)	
5	猿山古墳群	" 下栗町猿山町	前方後円墳3, 円墳23	
6	飯塚古墳群	" 高田町	前方後円墳1(長37m)・円墳1	
7	琴平塚	" 西荆部町飛地	前方後円墳(長45m)	
8	双子塚	" 東谷町	円墳(径40m)	
9	筆塚	" " 筆塚	前方後円墳1(長100m)・円墳1	前方後円墳は県指定史跡
10	東谷古墳群	" 東谷町	前方後円墳1(長31m)・円墳13	
11	磯岡古墳群	河内郡上三川町	円墳3	朽木日縮遺跡報告書による

図版番号	遺跡名	所 在 地	概 要	備 考
12	瓢箪塚	河内郡上三川町上郷	前方後円墳(長63m)	
13	愛宕神社古墳	" "	円墳(径40m)	周辺に数基の円墳あり
14	橋本古墳群	" " 橋本	円墳 3 以上	
15	荒田古墳群	" " 荒田	不詳	
16	神主古墳群	" " 神主	前方後円墳, 円墳12以上	上神主, 下神主古墳群をあわせた。
17	大日塚古墳群	宇都宮市茂原町江面	前方後方墳1(長50m), 帆立貝式古墳1(長40m), 円墳 3	昭和52年愛宕塚(前方後方墳)字大発掘調査
18	權現山古墳	" " 御領山	前方後円墳(長73m)	
19	多功神冢古墳群	" "	円墳 2	
20	牛塚	" 雀宮町新宿	帆立貝式前方後円墳(52.3m)	昭和44年宇都宮市教委により発掘調査
21	上野古墳群	" 西原町	前方後方墳? (長35m), 円墳	
22	大野	河内郡上三川町大野	縄文, 土師(鬼高)住居址	昭和45年駒沢大により発掘調査。
23	願成寺	" " 願成寺	土師(和泉)住居址	
24	上蒲生	" " 蒲生	土師(鬼高)住居址, 経塚	昭和43年県教委により発掘調査
25	上神主廟寺	" " 上神主	7世紀末~9世紀	
26	多功廟寺	" " 多功	奈良後期以後	

III 発堀調査 北地区の発堀調査

1号住居址（図-5、図版-3）

本住居址は北区西北端に位置している。平面プランは東辺5m西辺4.5m南辺4.9m北辺5.1mの不整四丸方形を呈しており、床面積は約23.8m²である。主軸方位はN-9°-Eを指し、残存壁高は東壁で50cm西壁で60cmを計測した。主柱穴は4本確認したが、いわゆる棟持柱穴かもしれない。周溝は北壁を除き全周に認められた。カマドは北壁中央よりやや東寄りに北壁をかなり掘り込み粘土で構築されていた。

遺物（図-6、7）

土師器、須恵器、鉄鎌、紡錘車

土師環形土器（1～6）はいずれも口縁部から体部までの破片である。5以外は丸味を帯びた器形であり、口縁部は内湾しつつ開いている。それらのうち6を除いて比較的浅いが、とくに2は口縁径に比して低く盤状を呈する。いずれも口縁部外面と内面は模様で、体部外面は箆削りにより整形されている。斐形土器は7の4で胴下半を欠く。これはカマド袖の芯として利用されていた。胴部は筒形で口縁部は短く外反し、最大径は口縁部にある。器壁は薄く砂粒を多量に含む。

須恵環形土器は8、9の2個体であり、8は高台付の完形品、9は口縁部破片である。9のヘラ記号は外面に斜位に施されているが部分的にしか残らず不明瞭である。

鉄鎌はほぼ完形品で峰長約16.5cm、刃部長約12cmをはかる。紡錘車は土製で径約3.8cm、厚さ約2.3cmをはかり、径約9mmの孔が穿たれている。

北-1

遺物 番号	器形	(口径) 法(直径) 量(底径) cm(唇高)	縦 方 法				底 部	色 調 胎 土	備 考			
			内 面		外 面							
			L1 唇 部	脣 部	口 線 部	脣 部						
1	环	推定 14.5 — — 4.6	横顎で	横顎で一部剥離 き	横顎で	上半で横 位、下半 で斜位剥 離き		褐色 黒、赤褐色 砂粒混入	・土礫片 ・外面に3本接合痕			
2	"	推定 18.9 — — 残存 3.9	横顎で	横顎で	横顎で	横顎で		淡褐色 黒、赤褐色 砂粒微混入	・口縁、体部破片 ・外面口縁部に接合痕			
3	"	推定 15.5 — — 残存 3.4	横顎で	横顎で	横顎で	施跡き		赤褐色 黒色微砂粒 混入	・口縁部破片			
4	"	推定 14.0 — — 残存 4.0	横顎で	横顎で	横顎で	横顎でを 切って施 磨き		灰白色 黒色砂粒小 量混入	土礫片			
5	"	推定 14.5 — — 推定 8.2 残存 4.7	横顎で	横顎で	横顎で	←の施剤 り		褐色 砂粒少量混 入	・内面は黒色処理			
6	"	推定 14.1 — — 残存 4.7	横顎で	横顎で	横顎で	雄な施剤 り		淡褐色 砂粒混入	・口縁、体部破片 ・外面に2本の接合痕			
7	壺 土師	21.9 19.5 — 残存 21.0	横顎で	施跡で	横顎で	縱位の施 剤り		・黄褐色 一部赤褐色 ・粗砂粒多 量混入	・カマド袖より出土			
8	环 須恵	15.1 — 9.3 4.5 + 5				回転施剤り 整形の後、 高台を付け、 高台周辺を 施する。		・黒灰色 白色砂粒 混入	・ほゞ完形 ・右三輪ロクロ成形 ・一部に釉向着			
9	"	推定 12.0 — — 残存 3.6				施剤り?		・黒灰色 白色砂粒 混入	・口縁部破片 ・胎土0108に似る ・外面に施記符号有り			
10	壺 須恵	頭径 18.2 — — 残存 7.0		叩目		叩目(青)		・灰色 白色小藻 混入	・外面頭部に3本組の横 擦痕状文2本			

2号住居址（図-8、図版-5）

本住居址は発掘によって確認された住居址中最大の規模を有する。平面プランは東辺 8.5m 西辺 7.8m 南辺 7.9m 北辺 8m の不整隅丸方形を呈し、床面積は約64.8m²である。主軸の方向は N-20°-W を指し残存壁高は東壁にて52cm、西壁にて34cmである。主柱穴は4本確認され、ロード状に開く形状をしている。他に小ピットが数個検出されたが性格は不明である。周溝はカマドが構築されている北壁中央部分を除き全周認められた。カマドは北壁中央に2個確認された。中央より西側のカマドは袖の芯に變形土器を倒立させて補強したものであり、このカマドを廃棄した後に東側のカマドを構築したものと考えられる。この住居址から鉄鎌、金環3個体を検出した。

遺物（図-9、10）

土師器、須恵器（充填土より出土）、鉄鎌金環

1~12の土師塊形土器は、いずれも床面直上より検出されており、器体の大きさは異なるが、器形、調整、胎土に齊一性があり、本址を特徴づけるものである。北地区15号住居址に同巧の器形が存する。13~24は土師坏形土器であり、14、18~21は充填土より出土したものである。變形土器(25~27)のうち25、26はカマド芯として利用されていたものである。本址には新旧2つのカマドが検出されているが、この2個体は旧いカマドに利用していた。2個とも器壁は薄く、胎土に砂粒を多く含む。

金環(29~31)は金銅製で本址の東壁近くより出土した。いずれも扁円に近い形であり、番号順に径約2.4cm、2.25cm、2.1cmをはかる。鉄鎌ははゞ完形でカマド東横より出土した。峰長約14.5cm、刃部長12.0cmをはかり、着柄部に木質部を残す。

北-2

造物 番号	器形	(口径) 法(直径) 量(底径) cm(高さ)	整 形 方 法				底 部	色 膜 土	備 考			
			内 面		外 面							
			口 線 部	胸 部	口 線 部	胸 部						
1	瓶 土瓶	8.5 — 6.5 4.2	横撫での後、細い箋による調整	横撫での後、細い箋による調整	横撫で	指による圧痕		淡褐色 ・黒、白、褐色砂粒少量混入	• 外面1本の接合痕 • 内、外面ともかなりの部分に煤付着。			
2	"	10.5 — 7.0 4.3	横撫で	横撫で	横撫で	指による圧痕		淡褐色 黒、白、赤褐色砂粒混入	• 外面1本の接合痕 • 内面底部に煤付着			
3	"	9.8 — 6.7 4.3	横撫で	細い箋による調整の後横撫で	横撫で	指による圧力		• 褐色 • 黒色砂粒 多量赤褐色砂粒少量混入	• ほど完形 • 外面2本の接合痕			
4	"	10.8 — 7.3 4.8	横撫で	窓削り 細い箋による調整	横撫で	指による圧痕		• 淡褐色 • 黒、白色砂粒少量混入	• 難な仕上げ • 外面1本の接合痕			
5	"	10.1 — 7.0 4.0	窓で	窓削りの後複数の窓で、細い箋削き	横撫で			• 黒褐色 一部赤褐色 • 黒、白色砂粒少量混入	• 外面1本接合痕			
6	"	7.9 — 6.3R 2.9	横撫で	横撫で					• 01~05と比して小作りであるが、整形法は同じで同様である。 • 外面1本接合痕			
7	"	推定 11.9 — — 残存 3.7	横撫で	横撫で	横撫で	窓削り		• 淡褐色 • 黒色砂粒少量混入	• 口縁小片 • 外面に接合痕			
8	"	— 推定 6.8 残存 2.6	横撫で			指による圧痕		• 褐色 • 黒、白、赤褐色砂粒少量混入	• 底部小片 • 外面に接合痕			
9	"	— 推定 7.4 残存 2.3		横撫で		指による圧痕		内面淡褐色 外面淡褐色	• 底部小片			
10	"	— 推定 6.9 残存 2.4		細い窓削りの後、横位の横撫で		指による圧痕		• 黒褐色 • 黒、白、褐色砂粒混入	• 底部小片			
11	"	— — 7.4 残存 2.2		横撫で		指による圧痕		• 褐色 • 黑色砂粒混入				

北-2

器物番号	器形	法(口径) (胸径) cm(器高)	整 形 方 法				底 部	色 調 色 土	備 考			
			内 面		外 面							
			口縁 部	胸 部	口縁 部	胸 部						
12	塊	— 上部 残存	— 5.1 1.6	施削りの後撹壓で	—	指による 圧収	—	• 暗褐色 • 黒・白・ 暗褐色砂粒 少量混入	• 底部小片			
13	环	推定 上部 残存	9.5 — 3.7	横撹で	密な荒削 き	横撹で	施削り	—	• 内面黒褐色 • 外面淡褐色、黒、 白色砂粒少 量混入	• 小破片 • 外面1本の接合痕		
14	~	推定 残存	10.9 — 3.7	横撹で	—	横撹で	施削り	—	• 黑褐色 • 黒、白色 砂粒混入	• 小破片 • 一部縫付着		
15	~	推定 残存	10.3 — 4.0	横撹で	荒削き	横撹で	施削り	—	• 黑褐色 • 黒、白色 砂粒混入	• 口縁部破片 • 外面2本の接合痕		
16	~	推定 残存	9.7 — 3.1	横撹で	荒削き	横撹で	荒撹で	—	• 黑褐色 • 黑、白色 砂粒混入	小破片		
17	~	推定 残存	11.7 — 4.5	横撹で	荒削き	横撹で	難な施削 り	暗褐色	—	• 小破片 • 外面1本の接合痕		
18	~	推定 残存	12.8 — 3.2	—	横撹で	—	—	—	• 黑褐色 • 黑、白色 砂粒混入	• 小破片 • 光面上出土		
19	~	推定 残存	10.8 — 3.3	横撹で	横撹で	横撹で	斜板の施 削り	—	• 黑褐色 • 黑、白色 砂粒少 量混入	• 脱化芳しい • 光面上出土		
20	~	推定 残存	13.4 — 4.8	横撹で	施削り	横撹で	施削り	—	• 暗褐色 • 黑色砂粒 少 量混入	• 小破片 • 一部縫付着 • 光面上出土		
21	~	推定 残存	13.1 — 4.1	横撹で	横撹で	横撹で	施削りの 後荒削き	—	• 暗褐色 • 黑、白色 砂粒混入	• 小破片 • 光面上出土		
22	~	推定 残存	15.1 — 3.1	横撹で	—	横撹で	施削り	—	• 褐色 • 黑、暗褐色 砂粒混入	—		

北-2

遺物 番号	器形	(口径) 法(鋼筋) 底(底径) cm(壁高)	整 形		方 法		式 部	色 地 施 土	備 考			
			内 面		外 面							
			口 線 部	剥 部	口 線 部	剥 部						
23	环 土鉢	推定 14.1	横彫で	横彫で	横彫で	不定方向 の挽削り		<ul style="list-style-type: none"> ・淡褐色 ・黒、赤褐色 砂粒混入 	<ul style="list-style-type: none"> ・土成片 ・外面1本の接合痕 			
		—										
		残存 4.8										
24	—	14.2	横彫で	横彫で	横彫で	縦位の範 削り	黄褐色					
		—										
		3.7										
25	吏 土鉢	—	横彫で	上半横位 の挽削り 下半、縦位の剥落 き	横彫で	縦位の範 削り	窓による	<ul style="list-style-type: none"> ・淡褐色 ・一部赤褐色 ・砂粒多量 に混入 	<ul style="list-style-type: none"> ・カマド袖出土 ・口縁部欠損 ・内外面に輪型み痕 			
		17.6										
		6.8										
26	—	残存 27.4	横彫で	縦位の範 削り	横彫で	縦位の範 削り	窓削り	<ul style="list-style-type: none"> ・淡褐色 ・黒、白色 砂粒混入 	<ul style="list-style-type: none"> ・カマド袖出土 ・底部欠損 ・一部爆付着 ・輪型み痕 			
		18.2										
		17.0										
27	—	残存 23.7					窓削り	<ul style="list-style-type: none"> ・淡褐色 ・黒、白色 砂粒混入 	<ul style="list-style-type: none"> ・底部破片 ・一部爆付着 			
		—										
		6.6										
28	环 須恵	残存 3.3					窓削り	<ul style="list-style-type: none"> ・灰色 ・白色砂粒 混入 				
		—										
		10.4										

3号住居址（図-12・図版-8）

本住居址の平面プランは東辺、西辺ともに 6.9m 南辺、北辺ともに 7.3m のやや南北に長い長方形を呈する。床面積は50.4m²で主軸方位はN-21°-Wを指し残存壁高は東西壁で30cm北壁で40cm南壁で15cmである。この差はブルドーザーによる削平のための差であって床面が傾むいているわけではない。柱穴は対角線上の 4 本の他に図に示めされているようにカマドの前面を除き柱間にピットが確認された。対角線上の柱穴と比すと、深いものもあり、4 本が主柱穴で他は補助柱穴と考えてよいものかどうか明確ではない。周溝は認められず、貯藏穴と考えられるピットは東南コーナーより深27cm程のものが検出されたが形状も不整形であり断定はできない。カマドは北壁中央に構築されており、焚口より急傾斜をもつて煙道へと続いている。

遺物（図-11）

須恵器はいずれも充填土よりの出土であるので、本址の時期を判断する資料としては除外した。土師器は壺形土器のみであり、6 個とも床面より検出された。また 1-3 はこの順に重なって東壁近くより出土した。器形的には外縁の明確に残すもの（2-4, 6）と残さないもの（1）と全体的に丸味を帯びるもの（5）がある。整形的には、外面体部から底部にかけて蓖削りされているもの（1, 3-5）と丁寧に磨かれているもの（2, 6），内面は蓖磨きされているもの（1-3, 5）と撫でつけられているもの（4, 6）がある。なお 3 は壺というより甌とした方が適当であるかもしれない。

北-3

番号	器形	(口径) 法量(駆程) mm(深さ) mm(高さ)	整 形 方 法				底 部	色 調 胎 土	備 考			
			内 面		外 面							
			口縁部	駆部	口縁部	駆部						
1 土師	环	13.3 — 5.0	横 摺 で	範磨き 上半焼成 下半放射 状	横 摺 で	横位の範 磨り	範磨り	・淡褐色 ・黒・白砂 粒混入	・外面に接合痕			
		13.8 — 4.3	横 摺 で	放射状の 密な範磨 き	横 摺 で	丁寧な範 磨き		・淡褐色 ・黒・白色 砂粒混入	・外面に接合痕 ・外縁明瞭			
		15.4 — 7.5	横 摺 で	横位の密 な範磨き	横 摺 で	横位の範 磨り	不定方向の 雜な範磨り	・黒褐色 ・白色砂粒 混入	・外面3本の後合痕 ・外縁明瞭 ・01-03は03を下に この順に重なって出土。			
4 〃	〃	12.6 — 4.7	横 摺 で	焼成で上 部に指压 痕	横 摺 で	横位の範 磨り		・黒褐色 ・黒・白 ・赤褐色砂粒 混入	・外縁有り			
		推定 — 4.4	横 摺 で	横 摺 で放 射状の範 磨き	横 摺 で	不定方向 の範磨り		・淡褐色 ・黒・白色 砂粒混入	・口縁部片 ・一部煤付着			
		推定 — 残存 3.8	横 摺 で	横 摺 で	横 摺 で	範磨り		・淡灰色 ・白色砂粒 多量混入	・右側部クロ成形 ・充填土出土			
7 須恵	环 推定 7.6 4.0	12.3 —				底部付近 範磨り	範切りの後 周辺範磨形	・灰色 ・白色砂粒 多量混入	・底部破片 ・充填土出土			
		— 推定 8.9 残存 3.1				底部付近 範磨り	底部付近範 磨り	・灰绿色 ・白色砂粒 混入	・口縁部片 ・充填土出土			
9 須恵	环? 推定 3.7	17.5 —						・黒灰色 ・白色砂粒 混入	・内面〇付着 ・充填土出土			
		— 推定 4.1										
10 須恵	壺	13.5 — 残存 4.1										

4号住居址（図-13、図版-9）

本住居址は3号住居址の南方5mに位置し平面プランは東辺 3.1m 西辺 3.2m 南辺 4.8m 北辺4.5mの東辺と西辺がややふくらみのある東西に長い長方形を呈し床面積は14.6m²を計測する。主軸方位はほぼ真北を指す。残存壁高は40cmである。主柱穴は確認できなかったが南壁中央よりやや西寄りからピット2個を検出した。柱穴であるのか他の性格のものであるのか不明である。周溝はほぼ全周に認められたが、比較的小規模のものと言える。カマドは北壁の中央よりやや東寄りに構築されており、両袖は凝灰岩を芯とし補強されていた。支脚には凝灰岩を半分ほど埋めて使用しているものと考えられる。各コーナー部には浅いピットが検出されたが、貯蔵穴であるのかどうかは不明である。

遺物（図-15）

土師器、紡錘車、砥石

1は、口縁部が短く外反し、口唇部に一段を有し、内部にやや立ち上がりをみせる。肩の張った器形で、底部に木葉痕が残されていた。外面胴上半には籠撫で、下半部はその上に折り返しの籠磨が施されている。2、3は器壁の極めて薄く、赤褐色を呈するもので、口縁部は大きく「く」の字状に外反している。外面胴上半は横方向の籠削り、以下は斜位の籠削りが施されている。

砥石は現存長約7.0cm、幅約4.9cmをはかり、石質は泥岩と考えられる。紡錘車は土製である。

北-4

番号	器形	(口径) 法(腹径) 量(底径) cm (器高)	整 形 方 法				底 部	色 調 色 土	備 考			
			内 面		外 面							
			口縁部	胴 部	口縁部	胴 部						
1	甕 土瓶	22.2 26.3 9.4 32.0	籠撫で 上半横位 下半斜位	横 撫 で	籠撫で 上半籠 下半身の ような丁 寧な籠磨 き	横 撫 で	木葉痕	・黄褐色 ・白色砂粒 混入	・接合度・輪郭線有り。 ・外面胴下半かなりの部分に縦付着			
2	“	推定 20.0 “ 19.8 残存 14.4	口縁部籠 撫で後、 刷毛整形 後、横位 に籠削り	横 撫 で	口縁部横 撫での後、 横位・斜 位の籠削 り。	横 撫 で		赤褐色 ・黒・白色 砂粒混入	・眼下半欠損の半欠品 ・輪積み痕有り。 ・器肉薄い。			
3	“	推定 20.4 “ 21.6 残存 13.0	横 撫 で	窓撫で	横 撫 で	口縁部横 撫での後、 横位・斜 位の籠削 り。		・褐色 ・黑色・白 色砂粒混入	・輪積み痕あり。 ・器肉薄い。			

5号住居址（図-14、図版-10）

本住居址は2号住居址に次ぐ規模を有するもので平面プランは東辺 7.0m 西辺 7.3m 南辺 7.1m 北辺 6.9m の方形を呈する住居址である。床面積は51.1m²で主軸方位はN-6°-Wを指し残存壁高は20cmを計測した。主柱穴は4本、ロート状に開く形状で確認でき、更に南壁中央付近より棟持柱穴と考えられるピットを検出した。周溝は東方は良存していたが西方南方は明確にすることはできなかった。カマドは北壁中央に構築されていたが、残存しているものがわずかであるため、詳細については明確にできなかった。北東、北西隅コーナーよりピットを検出したが、貯蔵穴と考えてよいのかわからない。

遺物（図-16、17）

土師器

塊形土器（1）は、口縁部が内湾し上げ底である。壺形土器（2～6）は、3号と同様外稜を明確に残すもの（2、3）と残さないもの（4～6）がある。いずれも外面は笠削り、内面は笠磨きが施されている。壺形土器（7～10）はいずれも胴部がやゝ膨らむ器形である。1、2号址出土のものと比較するとより器壁が厚い。瓶は（11）のみで、口縁は短く外反し、底部にいくに従いすぼまる。

なお壺形土器4の器形は、次期に引き継がれるような形態である。

番号	器形	(口径) 径 量 cm (底径) (器高)	整 形 方 法			底 部 部	色 調 胎 土	備 考	
			内 面		外 面				
			口 線 部	削 制 部	口 線 部	削 制 部			
1	甌 土鉢	12.2 — 4.5 6.5	横 擊 で		横 擊 で 削 制 し や さ く 上 収		淡褐色 ・砂粒混入	・外面3本の接合痕 ・や さ く 上 底 ・内面底部に螺付着	
2	杯 土鉢	12.4 — 4.6	横 擊 で 密な範囲 き 上半球位 下半範囲	横 擊 で	横 擊 の 削 制 し		淡褐色 ・砂粒混入	・外面1本の接合痕 ・一端螺付着 ・外接明顯	
3	“ 推定	15.8 — 残存 3.7	横 擊 で 縦位の 範囲き	横 擊 で	削 制 し		・淡褐色 ・白色砂粒 混入	・口縁部片 ・外面1本の接合痕 ・外接明顯	
4	“ 推定	15.2 — 残存 3.5	横 擊 で 縦位の 範囲き	横 擊 で	削 制 し (下位、 縦位)		・内面淡褐色 ・外接淡褐色 ・白色砂粒 混入	・外面2本の接合痕	
5	“ 推定	14.9 — 残存 3.4	横 擊 で 縦位の 範囲き	横 擊 で	削 制 し		・淡褐色 ・赤色砂粒 混入	・外面2本の接合痕	
6	“ 推定	14.8 — 残存 3.7	横 擊 で 縦位の 範囲き	横 擊 で	削 制 し		・褐色 ・黒色、赤 褐色砂粒混入	・一端螺付着	
7	甌 土鉢	推定 20.8 19.2 — 残存 24.5	横 擊 で	削 制 で	横 擊 で	細い擦痕 ↓の 削 制 し	内面赤褐色 外接黄褐色 赤褐色砂粒 混入	・底部欠損 ・外面一端螺付着	
8	“ 推定	15.5 18.7 — 残存 23.5	横 擊 で 縦位の 範囲で	横 擊 で	上位斜位 の 削 制 し 以下縦位 削 制 し		褐色 砂粒混入	・底部欠損 ・短く外反する口縁を持つ。	
9	“ 推定	18.4 19.2 — 残存 16.6	横 擊 で — 高斜位の 削 制 し	横 擊 の 範 囲 で	横 擊 で 斜位の 削 制 し		黄褐色 砂粒混入	・底部欠損 ・輪積み底有り。 一部螺付着	
10	“ 残存	— 5.8 8.0			*	の 削 制 し ↓ 削 制 し	淡褐色 砂粒混入	・底部はや さ く 上 底 ・一端螺付着	
11	甌 土鉢	推定 24.1 “ 20.3 “ 10.6 27.4	横 擊 で 細い範 域による整形	縦位の 範 囲 き	横 擊 で	↓ 削 制 し 底部斜位 の 削 制 し	一孔 内面横位の 範囲き	褐色 砂粒混入	・半欠品 ・輪積底有り ・一端螺付着

北区 6号住居地（図-18、図版-11）

本住居址の平面プランは東辺 5m 西辺 5.3m 南辺 5.3m 北辺 5.2m の不整隅丸方形を呈する。床面積は 27.5m²で主軸方位は N-5°-E を指す。残存壁高は 35cm 程である。柱穴は 4 個確認されたが、住居址外より北西コーナー、南東コーナーに柱穴と思われるピットを検出した。他のコーナーも精査したが確認されなかった。周溝は東壁の一部に認められたにすぎなかった。西壁と南壁の西側半分のところに床面より若干低い所を検出した。さらに南西コーナーを除き他のコーナーには不整形のピットが、南壁中央付近より 3 個のピットを検出したが性格等は不明である。カマドは北壁中央やや東寄りに構築されていた。両袖の先端を土器で補強しているもので、カマド前面より多量の土器の出土をみた。住居址東半分より多量の炭化物を検出したこと、全体的に土器の出土が多いことなどから、火災を受け放棄された住居であろうと思われる。

遺物（図-19、20、21）

土師器、須恵器、鉄製品

1 は充填土中より出土したものである。

壺形土器（2～7）はいずれもカマド周辺より出土したものである。器形、整形法等共通性をもつ。つまり肩部に張りを持ち、口唇部に段、立ち上がりをみせる器形であり。胴外面下半には折り返しの箇磨き、内全面に横位の箇磨が認められる。また器壁は薄く、胎土に砂粒を多く含み、器面にザラザラした感触を持つ。4号址出土の物と同類だが、口唇内面の立ち上がりはより顕著である。瓶（8）は底部のみのものであるが、外面に密な箇磨き、内面は撫で孔付近は箇削りが認められる。

須恵環形土器（9～16）は高台付（15、16）を除いていずれも底部に箇切り痕が残されており、底部と体部との境がシャープに角ばるもの（9～12、13）となだらかなもの（12、14）がある。17、18. は宝珠状のつまみが紛失した須恵器蓋であるが、いずれの环とセットになるか分別できない。

鉄製品（21）は断面方形を呈し、長さ約 9cm、太さ約 0.6cm をはかるが用途は不明である。

北-6

遺物 番号	器形	法(口孫) 量(cm) (調査) (底盤) (器高)	整 形 方 法				底 部	色 調 胎土	備 考			
			内 面		外 面							
			口縁部	洞 部	口縁部	底 部						
1	坏 上部	推定 11.7 — 残存 3.2	横顎で	横顎で	横顎で			淡褐色 黑色砂粒混入	・口縁部破片 ・充填土より出土			
		— — 9.0 2.5										
2	壺 部	— — — — 9.0 2.5				木製版		・淡褐色 ・白色砂粒混入	・底部破片			
3	*	23.8 27.6 8.5 32.4	口縁と底 盤に模倣 の痕跡で が顕著	横顎で	横顎で	上半施形 形下半施 形き難い となどのも の、	木製版	・褐色 ・白赤褐色 砂粒混入	・ほゞ完形 ・輪替み痕有り ・カマド前出土			
4	*	推定 20.3 * 26.5 8.3 31.4	横顎で	模倣の施 形で	横顎で	の施形 き(下半)	木製版	・淡褐色 ・白色砂粒 混入	・★品 ・輪替み痕有り ・カマド前出土			
5	*	推定 20.0 — 残存 12.2	横顎で	施形で	横顎で			・褐色 ・白色砂粒 混入	1/4片 ・輪替み痕有り ・カマド近辺出土			
6	*	推定 23.8 — — 残存 15.2	横顎で	主として 模倣の施 形で	横顎で	施形の後、 継ぎの施形		・褐色 ・白色赤褐色 砂粒多級 混入	・輪替み痕有り			
7	*	22.0 25.5 — 残存 30.0	横顎で	施形で指 圧版	横顎で			・褐色 ・白色砂粒 混入	・底部欠損 ・輪替み痕有り ・外面に黄褐色粘土塗り つけられたような状態で 付着			
8	壺 上部	— — 孔径 9.7 5.3	孔付近 模倣の施 形		継ぎの施 形	一孔を空つ	褐色 白色砂粒混 入		・輪替み痕有り ・カマド近辺出土			
9	坏 頬窓	13.4 — 6.5 4.5				施切り	灰色 白色砂粒混 入		・右回転クロ成形 ・ほゞ完形			
10	*	13.3 — 6.5 4.3				施底り	灰色 白色砂粒混 入		・ほゞ完形 ・右回転クロ成形			
11	*	推定 14.0 * 8.2 4.4				施切り	灰色 白色砂粒混 入		・★品 ・右回転クロ成形			

北一5

遺物 番号	器形	法 量 cm (口径) (底径) (幅高)	整 形 方 法				底 部	色 著 地 上	備 考			
			内 面		外 面							
			口縁部	脚 部	口底部	脚 部						
12	坏	— 推定 残存	7.5 3.6				施切り、の ち周辺を薙 削り	青灰色 白色砂粒混 入	• 1/4片口縁部欠損 • 右回転ロクロ成形			
13	タ	— — 残存	8.7 2.8				施切り	灰色 黒。白色砂 粒少量混入	• 右回転ロクロ成形			
14	タ	— — 残存	8.7 1.5				施切り、の ち周辺を薙 削り	• 淡灰色 白色砂粒少 量混入	• 右回転ロクロ成形			
15	タ	— — 4.2+ 0.8	11.3 7.8				回転施削り	• 灰色 • 白色砂粒 混入	• はゞ完形 • 右回転ロクロ成形 • 一部剥付有			
16	タ	— — —	— — 8.5				回転施削り	• 灰色 • 白色薙削 砂粒混入	• 右回転ロクロ成形 • 壁部施記号有り。			
17	蓋	— — 残存	11.5 — 2.2			つまみ付 近施削り		• 黒灰色 • 白色砂粒 混入	• 右回転ロクロ成形 • 一溝薙付有 • つまみ底台部に剥離 有り。			
17	タ	— — 残存	20.3 — 3.8			つまみ付 近施削り		• 灰色 • 白色砂粒 混入	• 右回転ロクロ成形 • つまみ接合部に剥離 による左巻の剥離有り。			
18	壺	頬膨 — 残存	17.5 — 15.5					黒灰色 白色砂粒混 入	• 頬部内面に剥離有			
19	タ	— — 残存	— — 9.8			叩目 下部薙削 り	施削り	灰色 白色砂粒混 入	• 接合痕有り。			

7号住居址(図-22、図版-12)

本住居址は北区東北端に位置し、最も近い8号住居地から直線で12mを計測する。平面プランは東辺 2.6m 西辺 2.3m 南辺 2.6m 北辺 2.6m の西辺の短かい不整周丸方形を呈し、床面積は約 6.7 m²で主軸方位は N-20°-W を指す。残存壁高は 24cm であった。柱穴、周溝は確認できなかった。カマドは北壁中央に構築されており、両袖とも検出できた。カマド内より壺の出土を確認できた。貯蔵穴は確認されなかったが、カマドの右側より變形土器 3 個体が検出されたことから考えると、貯蔵穴という形態をとらずに床面をそのまま貯蔵の場としたのであろう。住居地中央より河原石が検出されたが性格等は不明である。

遺物(図-24)

土器

1は口縁部が内屈し、内面に密な擦磨きが施される。深い器形を呈するので腕といった方が適当かもしれない、器形的には3号址の1、5号址の1、5、6と同類と考える。

2は短胴の變形土器であり、底はやつ上げ底気味(施削りによって整形されている)である。口縁部と胴部との境に一段を残している。3は2をそのまま長胴にしたような器形であり底に木葉痕を残す。3の最大径は口縁にあるが、胴部がやや膨らみ胴最大径が下位にある。

4は、口縁部の外反がゆるい「く」の字状を呈し、口唇に至ってやや膨らみをみせる。

北-7

遺物 番号	器形	法 (口径) 量 (底径) cm (容積)	整 形 方 方				底 部	色 菓 胎 土	備 考			
			内 面		外 面							
			口縁部	胴 部	口縁部	胴 部						
1	壺 上部	11.0 — — 6.0	横腹で	不定方向 の擦磨き ・ 口縁部 にも及ぶ	横腹で	不定方向 の施削り	施削り	淡褐色、一 部 赤褐色 砂粒混入	・ ほど完形 ・ 外面に接合痕有り。 ・ 一部焼付着 ・ 口縁部と体部の境に沈 縮 ・ カマド上より出土			
2	壺 上部	18.5 20.2 8.5 18.0	横腹で	横位の基 準位で、 上位の基 準位で	横腹で	縱位の施 削り	施削り	淡褐色 白色砂粒混 入	・ ほど完形 ・ 細部み放有り ・ 一部焼付着 ・ 底はやや上底 ・ カマド右より出土			
3	々	19.5 19.8 7.0 30.0	横腹で	上位の基 準位で 下位の基 準位の裏 面	横腹で	縱位の施 削り	木漆灰	・ 褐色 ・ 砂粒混入	・ ほど完形 ・ 部分的に焼付着 ・ カマド右より出土 ・ 脇部に一段有り			
4	々	17.5 16.8 7.0 27.3	横腹で	横位の施 削りで	横腹で	縱位の施 削り		・ 淡褐色 ・ 黒・白色 砂粒多量混 入	・ ほど完形 ・ 横幅狭有り ・ カマド左より出土			
5	首 土瓶	22.8 21.0 10.2 27.0	横腹で	横位の施 削りで	横腹で	縱位の施 削り		・ 淡褐色 ・ 砂粒混入	・ 口唇部やや膨らむ ・ 一部焼付着			

8号住居址（図-23・図版-13）

本住居址の平面プランは東辺3.8m 西辺南辺北辺ともに3.9m の不整隅丸方形を呈し、床面積は14.4m²を計測する。主軸方位はN-21°-Eを指し残存壁高は20cmである。定形化した柱穴は確認できなかったが、床面より南北に2列ピットを検出した。柱穴の可能性もありうる。周溝は確認できなかった。カマドは北壁中央に構築されていた。左袖の先端部分は河原石により補強されていたが右袖は破壊が著しく検出できなかった。東南コーナーより河原石2個を検出したが性格等は不明である。

遺物（図-25）

土師器 須恵器

3, 5は充填土中より出土した。

いずれも破片である。が、2は整形法に違いはあるが器形的に2号址の22と類似する。

北-8

遺物 番号	器形	法 量 m ³ （容積）	整 形 方 法				底 部	色 調 胎 土	備 考			
			内 面		外 面							
			口縁部	胴 部	口縁部	胴 部						
1	壺 土師	推定17.9 — — 残存 4.3	横撫で		横撫で	箋削り		褐色 褐色砂粒混入	• 口縁部破片 • 一部縁付着			
2	"	推定18.7 — — 残存 3.2	横撫で	箋磨き	横撫で	箋削り 箋磨き		赤褐色 赤褐色砂粒混入	• 口縁部破片			
3	"	推定12.7 — — 残存 2.8	横撫で		横撫で			黒褐色 白色砂粒少量混入	• 口縁部片 • 外面1本の接合痕 • 充填土出土			
4	壺 土師	— 9.8 残存 4.2		不定方向 の箋磨き		箋位の箋 削り	一孔を穿つ	淡褐色 白砂粒混入				
5	壺 須恵	— — 8.0 残存 1.3					回転箋削り	灰色 白色砂粒混入	右回転ロクロ成形			

9号住居址（図-26、図版-13）

本住居址は5号住居址の南方19mの北区中央に位置している。平面プランは東辺2.4m 西辺2.3m 南辺2.5m 北辺2.7m のやや西辺の短かい不整隅丸方形を呈する。床面積は約5.8m²である。主軸方位はN-2°-Eを指し残存壁高は20cmを計測する。柱穴、周溝は確認できなかった。カマドは北壁中央に構築されているが、袖の部分は検出できず、北壁を深く堀りこんだ煙道の痕跡のみを残している。カマドの前面には半円状に床をやや掘りくぼめた火床を検出した。

10号住居址（図-27、図版-14）

本住居址の平面プランは東辺3.4m 西辺3.3m 南辺5m 北辺5m の東西に長い隅丸長方形を呈している。床面積は16.8m²で主軸方位はN-14°-Eを指す残存壁高は40cmであった。柱穴は12号住居址と同様に住居中央を東西に床面に2個、東壁、西壁を斜方に掘りこんで検出された。更に南壁中央付近にピットを認めたが柱穴かどうか不明である。周溝は認められずカマドは北壁中央に構築され、カマドの堀りこみも浅く、北壁よりやや奥に煙道を見ることができた。貯蔵穴は認められなかった。本住居址は12号住居址とともに住居址、上屋構造を考える時間題となる住居址であろう。

遺物（図-28）

土師器、須恵器

いずれも破片である。2、3は台付甕の部分と考えられ、1～3はいずれも赤褐色を呈する。4は切り離し技法は不明だが回転施削りによる整形がなされている。

北-10

遺物 番号	器形	法(口径) 量(断径) cm(都高)	整 形 方 法				底 部	色 調 胎 土	備 考			
			内 面		外 面							
			口縁部	脚 部	口縁部	脚 部						
1	甕 土師	— — 推定 4.7 残存 3.1			箒削り	箒削り	箒削り	赤褐色 黑。白色砂 粒混入	• 瓦片			
2	台部 土師	— — 推定 11.8 残存 3.3		横撫で	横撫で	横撫で		赤褐色 黑。白色砂 粒微量混入	• 瓦片 • 充填土出土			
3	台付甕 土師	— — — 残存 1.9		横撫で		横撫で		赤褐色 黑。白色砂 粒少量混入	• 瓦片 • 底面直上			
4	坏 須恵	— — — 推定 7.8					回転箒削り	灰色 白色砂粒混 入	• 右回転コクロ成形			

11号住居址（図-29、図版-14）

本住居址の平面プランは東辺3.4m 西辺3.3m 南辺4.4m 北辺3.9m の東西に長い不整隅丸長方形を呈する。床面積は12.6m²で主軸方位はN-2°Wを指す。残存壁高は45cmを計測する。柱穴、周溝は認められなかったが南壁中央付近より2個ビットを確認できたので、これらのビットを柱穴と考えればその可能性もありうる。カマドは北壁中央よりやや東寄りに構築されていた。貯蔵穴はカマドの左側に検出できた。

遺物（図-31）

土師器、須恵器、鉄製品

1の土師環形土器は充填土中より出土した2の小型の整形土器は、口縁部が「く」の字状に外反し、胴部上半との境に一稜を残す。色調と口縁部の形態に多少の相違があるが、整形法、胎土とも16号址3（台付甕）と類似する。

須恵環形土器（3-7）は、底部と体部との境がシャープに角ばるもの（3、4）となだらかなもの（5-7）に分けられる。3、5の底部は糸切りの周辺に回転窓削りを施したものであり、（4、7）は窓切りが残されている。6の底部は回転窓削りである。なお3は灰白色を呈しあまり良好な焼成ではない。

9は残存長約10.2cm、最大幅約1.9cmの用途不明の鉄器である。左に3個の右よりに4個の鋸留のような小孔があり、断面は図に示したように、一侧辺が刃部として使用したように鋭くなっている。なお神奈川県秦野市下大槻20C19区出土の不明鉄器と形態的に類似している。

北-11

遺物 番号	器形	法(口径) 量(底径) cm(高さ)	整 形 方 法				底 部	色 薄 胎 土	備 考			
			内 面		外 面							
			口縁部	腹 部	口縁部	腹 部						
1	环 土師	推定13.9 — — 残存 4.0	横撫で		横撫で	箆削り		褐色 黒、白色砂 粒混入	・口縁部破片 ・外面1本の接合痕 ・光埠土出土			
2	小甕 土師	推定12.6 “ 14.6 — 残存11.5	横撫で	箆削り	横撫で	箆削り		黒褐色 白色砂粒混 入	・底部欠損の半欠品 ・底部近くの器内は薄い			
3	环 須恵	15.8 — 9.6 4.4					糸切りのの ら、周辺を回 転箆削り。 その跡に円 形の沈線有 り。	灰白色 砂粒混入	・右回転クロ成形			
4	“	13.2 — 7.8 3.7			下位を箆 削り		糸切りのの ら周辺を回 転箆削り。	黒灰色 白色砂粒混 入	・右回転クロ成形			
5	“	— — — —					糸切りのの ら周辺を回 転箆削り	灰色 白色砂粒混 入	・底部破片			
6	“	— — 7.3 残存 1.5					箆削り	灰色 白色砂粒混 入	・底部破片			
7	“	— — 6.9 —					糸切りのの ら体部下位 より周縁を 箆削り	灰色 砂粒混入	・箆記号有り			
8	甕 須恵	推定20.0 “ 14.8 — 残存18.4	撫で		印目			灰白色 白色砂粒混 入	・底部欠損の半欠品			

12号住居址（図-30、図版-15）

本住居址の平面プランは東辺 3.8 m 西辺 3.8 m 南辺 4.8 m 北辺 4.6 m の東西に長い不整隅丸長方形を呈し床面積は17.9m²である。主軸方位はN-7°-Eを指し残存壁高は50cmで住穴は住居中央を東西に2個床面、更に東壁、西壁を斜方に掘りこみがみられた。周溝は認められず、カマドは北壁中央よりやや東寄りに構築されていた。東南と西南コーナーに掘りくぼめられた所が存したが時蔵穴かどうか不明である。

遺物（図-32）

土師器

變形土器は器壁が薄く赤褐色を呈するものであり、口縁は大きく「く」の字状に外反し、胴上半との境に一稜を残している。

北-12

遺物 番号	器形	(口径) 法(直径) 量(底径) cm(器高)	整 形 方 法				底 部	色 調 胎 土	備 考			
			内 面		外 面							
			口 縁 部	胴 部	口 縁 部	胴 部						
1	変 土器	推定21.8 ～ 21.1 — 残存22.7	横断で 横位の箇 所で	横断で 箇所で	無削り			赤褐色 黒、白色砂 粒 少量混入	・横積み痕有り ・器内が滑い カマド前出土			
2	不明 土鍋	— — 推定 4.5 残存 3.2	難な箇削 り		撫で			褐色 白色砂粒少 量混入				

13号住居址（図-33、図版-15）

本住居址の平面プランは東辺3.6m西辺3.6m南辺5.4m北辺5.5mの東西に長い不整長方形を呈しており、床面積は19.8m²であった。主軸方位はN-6°-Wを指し残存壁高は20cmを計測した。柱穴、周溝等は確認できなかった。カマドは瑞穂野遺跡の他の住居址と異なり北壁中央よりやや西側寄りに構築されている。東南コーナーより河原石3個体が検出されたがその性格は不明である。

14号住居址（図-34、図版-16）

本住居址の平面プランは東辺5.1m西辺5m南辺5.4m北辺5.3mで各辺がややふくらみを持つ隅丸形を呈する。床面積は約26.5m²で主軸方位はN-7°-Eを指す。本住居址は他の住居址に比すると良存しており、壁はほぼ垂直に立ちあがっていた。残存壁高は30cmであった。主柱穴は4本確認でき、他に南壁中央にピットを検出した。位置から考えて棟持柱穴の可能性がある。周溝は全周とも存しておらず東方ではその幅もかなり広くなっていた。床面は硬くよく踏みかためられていた。柱穴と周溝が溝によって東西に結ばれていたものが検出されたが、間使切りの痕跡である可能性もあると思われる。カマドは北壁中央に構築されており、床面をかなり掘りくぼめて火床とし煙道へと続く。住居址中央付近より、須恵器大甕の出土をみた。

遺物（図-35）

土師器、須恵器

土師環形土器2点と須恵壺形土器1点が遺物である。1は口縁部被損、2は口縁部被片の復原実測である。3は住居址の南西柱穴近くの床面より検出したものであり、内外面とも叩目によって器厚調整されている。

北-14

遺物番号	器形	法(口径) cm(脚径) cm(底径) cm(器高)	盤形方法				底部	色調 胎土	備考			
			内面		外面							
			口縁部	脚部	口縁部	脚部						
1 土師	环 土師 残存 4.4	横断面	横断面での のち、細い鉛削き	横断面	鉛削り			外面湖色 内面黒褐色 黒・白色砂 焼入	・接合痕り。 ・口縁部と体部との境に 1木の沈線が有る。			
2 *	推定13.3 — 残存 2.9	横断面	鉛削き	横断面	鉛削り			褐色 黒色砂粒少 量入	・外面1本接合痕 ・一部底付着 ・口縁統片			
3 須恵	16.3 32.9 — 31.6	ロクロ成 形	叩目(格子状) 上半7組 の横位の 叩目文	内面と同	叩目(青 海波文)			黒灰色 白色砂粒少 量入	・ほぼ完形			

15号住居址（図-36、図版-17）

本住居址は南西コーナー部が削平されていたがその平面プランは東辺 5.6 m 西辺 5.5 m 南辺 5.3 m 北辺 5.2 m のやや南北に長い両方長方形を呈する。床面積は 29.1 m² で主軸方位は N-15°E を指す。残存壁高は 25cm である。柱穴は主柱穴 4 本、他に南壁中央付近にピットを検出した。棟持柱穴であろう。周溝は北壁の東半分と東壁、西壁の一部に認められた。カマドは 13 号住居と同様に北壁中央や西寄りに構築されていた。床面を 15cm ほど掘りくぼめ火床とし、ゆるい傾斜をもつて煙道へと続く。貯蔵穴は認められなかった。

遺物（図-37）

土師器、須恵器

2, 9, 12 は充填土中より出土

土師壺形土器は口縁部と体部との境に明瞭に稜を残すもの（1, 2）と残さないもの（4, 5）と器形全体が丸味を帯び口縁部が内湾しつつ開くもの（3, 6）がある。壺形土器（8, 10）8 は最大径を強く外反する口縁部にもち、胴が直線的にすぼまつていくものと考えられる。9 は比較的小型の壺で胴部がやゝふくらむものと考えられる。瓶（11, 12）は二個体あるが 11 は口縁部が大きく開き、胴部との境に一稜を残している。胴部はやゝふくらみを持ちながら底部に続く。なお内外面とも底部を除き 3 ~ 5 mm の範磨きが施される。

13 は須恵瓶であるが頸部以上を欠く。体部上位に沈線で区画されており、それより上位には簾先による刺突文が施される。沈線以下は簾削りによる粗い整形がなされ、底は平底に近い丸底である。

遺物 番号	器形	(口径) (銅様) 量 (底径) cm (器高)	整 形 方 法				底 部	色 製 陶 土	備 考			
			内 面		外 面							
			口 線 部	調 部	口 線 部	調 部						
1	环 土師	16.9 — 5.5	横削で —	横削で —	横削で —	箆削り —		褐色 砂較多量混入	• 半欠品。 • 一部塗付有。 • 床面上出土。			
2	*	推定16.2 — 残存 5.2	— —	— —	— —	— —		黃褐色 黑色砂較混入	• 内外面とも器面の剥落著しい。 • 外面1本の接合痕。 • 光滑土出土。			
3	*	推定14.1 — 残存 5.4	横削での のち箆磨 き	箆磨き —	横削で —	箆削り —		• 淡褐色 • 黒。赤褐色砂較少量混入	• 口縁部破片。 • 外面1本の接合痕。 • 内面黒色処理。			
4	*	13.0 — 3.3	横削で —	— —	横削で —	箆削り —		• 褐色 • 黑。白色砂較少量混入	• ほぼ完形。内外面とも剥落著しい。 • 外面1本の接合痕。 • 床面上出土。			
5	*	13.5 — 4.0	横削で —	— —	横削で —	箆削りの 後箆磨で —		• 淡褐色 • 黑色砂較少量混入	• ほぼ完形。 • 口縁部と体部との境に1段有り。 • 外面3本の接合痕。			
6	*	推定13.7 — 残存 3.8	横削で —	横削での のち箆磨 き	横削で —	剥落著し い		• 淡褐色 • 黑色砂較混入	• 口縁部破片。			
7	瓶 土師	推定 8.7 — 残存 4.1	箆磨での のち箆磨 き	—	—	箆削り —		• 褐色 • 黑色砂較少量混入	• 口縁部破片。 • 内外面に接合痕。			
8	甌 土師	推定20.5 — 残存 6.3	横位箆磨 のち 横削で	横位の箆 削りのの ち箆磨き	横削で —	口縁部横 削でのの ち縦位置 削り		• 淡褐色 • 黑色砂較少量混入	• 口縁部破片。			
9	*	推定15.3 * 15.1 残存 8.0	横削で —	箆磨での のち箆磨 き	横削で —	箆削り —		• 褐色 • 黑色砂較少量混入	• 口縁部1/2破片。 • 光滑土出土。			
10	*	— — 9.3 残存 8.0	— —	箆磨で —	— —	箆削りの のち箆磨 で	箆削り —	• 褐色 • 黑色砂較少量混入	• 瓶底片。 • 床面上出土。			
11	瓶 土師	27.5 23.5 10.7 28.6	横削で 横位の箆 磨き	箆磨での のち縦位 の箆磨き	横削で 縦位の箆 磨き	斜位の箆 削りのの ち縦位の 箆磨き		• 褐色 • 黑色。白色砂較混入	• ほぼ完形。 • 一部塗付有。			

遺物 番号	器形	(口径) 法 (底径) 量 (底高) cm (厘米)	整 形 方 法				底 深	色 調 胎 土	備 考			
			内 面		外 面							
			口 線 部	洞 部	口 線 部	腹 部						
12	瓶 土師	— — 6.1 残存 3.1		燒塗で		燒塗で	燒磨き 中心に径20 cmの孔	褐色 黒色砂粒少 量混入	• 底部片。 • 充填土出土。 • 北-18出土土器片と接合する。			
13	瓶 須恵	— 肩径 9.5 孔径 1.5 残存 7.3		指による 圧痕有り		下位 窓削り	施削り	灰色 砂粒多量混 入	• 制縫上半端先による制 突式。 • 制縫と全体の縁に一本 の沈線あり。 • 施部分的に付着。			

16号住居址 (図-38, 39 図版-17, 18)

本住居址の平面プランは東辺3.6m 西辺3.8m 南辺4.4m 北辺4.3m の東辺にややふくらみのある東西に長い不整隅丸長方形を呈する。床面積は16.1m²で残存壁高は35cm程である。主軸方位はN-22°-Eを指す。柱穴と断定できるものは確認できなかったが南壁中央付近より深さ26cm程のピットを確認した。各コーナーより深さ15cmより23cm程のピットを検出したが性格等については不明である。カマドは北壁中央やや東寄りに構築されていた。カマドの袖はローム面を若干剥りくぼめ、ロームブロック混入の土をしき、その上に河原石を到立させて芯とし、まわりを焼土、炭化物、凝灰岩粒混入の粘土でかため、ブリッジ状に加工した凝灰岩を図-39のようにかけたものであった。南東コーナー部のピットより磁石を検出した。

遺物 (図-40)

土師器、須恵器、砥石

1は赤褐色に近い色調を呈し、破片を多く含み、器壁の薄い整形土器である。口縁部は大きく「く」の字状に外反し、横撫で胴部は外面とも箇撫でにより整形されている。3は台付甕で、赤褐色を呈し砂粒を多く含む。口縁は外反気味に立ち上がり口唇近くで更に外反する所謂「コ」の字状を呈する。2はやや大形であるが3と同様台付甕と考えられる。なお3はカマド内より検出された。

4は須恵高台付の环であるが高台部は欠損している。

砥石は残存長約9.5cm、最大幅約3.9cmとはかる。

北-16

遺物番号	器形	法(口径) 量(底径) cm(底径) (容積)	整 形 方 法				底 部	色 調 胎 土	備 考			
			内 面		外 面							
			口縁部	胴 部	口縁部	胴 部						
1 土師	推定21.4 — 横撫	横撫で 箇撫で 現存7.0	横撫で 箇撫で	横撫で 箇撫で	横撫で 箇撫で			赤褐色 黒色、白色 砂粒混入	•口縁部片 •一部焼付着 •器内赤い			
2 台付甕 土師	推定11.8 — 現存6.0	横撫で 箇削りの うち箇撫 で	箇削りの うち箇撫 で	横撫で 箇撫で	箇削り			黒褐色 黒色砂粒少 量混入	•口縁部破片			
3 台付甕 土師	9.6 12.0 — 現存10.5	横撫で 箇撫で 横撫で	横撫で 箇撫で	横撫で 箇撫で	箇削り	台盤内面箇 箇り。外面 要落との接 合部横撫で	台盤内面箇 箇り。外面 要落との接 合部横撫で	赤褐色 黒色、白色 砂粒混入	•台部欠損 •カマド内出土（支脚と して使用か？）			
4 環 須恵	11.3 7.4 — 現存4.5					箇削り	箇削り	灰白色 白色砂粒少 量混入	•高台部欠損 •高台は裏先によって3条 の線を入れ撫で接合する。			

17号住居址（図-41・図版-19）

本住居址の平面プランは東辺5.9m西辺6m南辺5.9m北辺6.1mの南辺と西辺にややふくらみを持つ隅丸方形を呈する。床面積は35.7m²で主軸方位はN-10°-Wを指す。残存壁高は30cmであった。主体穴は4本確認できた、他に南壁中央付近に横持柱穴と考えられるピットを検出した。周溝は確認できなかった。カマドは北壁中央東寄りに構築されていた。

遺物（図-42）

土師器

壺形土器1)は口縁が内湾し全体的に丸味をもつ器形である。口縁部内外には横撫で、体部外面には範削りによる整形が施される。甕形土器2)は強く外反する口縁部に最大径を持ち、胴部以下あまり張りを見せず直線的にすぼまるものと考えられる。口縁部と胴部との境に一段を残す。

北-17

遺物 番号	器形	法 (径) 量 (底径) cm (容積)	整 形 方 法				底 高	色 調 胎 土	備 考			
			内 面		外 面							
			口縁部	胴 部	口縁部	胴 部						
1	壺 土師	推定8.9 — — 3.4	横面部		横撫で	範削り	範削り	褐色 黒色砂粒混入	• 内窓方 • 一部塗付着 • 口縁部と体部との境に一条の沈線有り。			
2	甕 土師	推定20.1 ~ 17.6 — 残存8.2	横面部	範削りの後斜位の 泡彫き	横撫で	複数の範 削り		黒褐色 黒、白色砂 粒混入	• 口縁部破方 • 脱部に段が有る。			

18号住居址（図-43・図版-19）

本住居址は長方形住居址の東西辺を南北に拡張し方形に仕上げたものである。カマドの下より、長方形住居址にともなう周溝が検出されたこと、方形住居址にともなう貯蔵穴が長方形住居址にともなう周溝を切って検出されたことなどにより長方形→方形の推移を確認することができた。作図した遺物図面はすべて方形住居址にともなうものである。本住居址の平面プランは東辺44m西辺4.6m南辺4.3m北辺4mの不整隅丸方形を呈し床面積は19m²で主軸方位N-11°-Eを指す。残存壁高は20cmである。柱穴は4個確認された。住居中央の東西に直線的に存在する柱穴（住居内に2個、住居外に2個）は長方形住居にともなうものである。周溝は全周に認められ、また貯蔵穴も北東コーナーより検出された。カマドは北壁中央に構築されていた。

遺物（図-44）

土師器

環形土器（1, 2）はともに口縁部と体部との境にかすかな稜を残す。竪形土器3は腹部にはほとんど張りがなく、口縁はゆるく外反し最大径を持つ。4は鉢状を呈する。

北-18

遺物 番号	器形 基 盤 cm (器高)	整 形 方 法				底 深	色 調 陶 土	備 考			
		内 面		外 面							
		口縁部	調 部	口縁部	調 部						
1 环 土師	11.7 — — 4.5	横撫で 削落著し い	削落著し い	横撫で 削落著し い	削落著し い		• 灰褐色 • 黑色砂粒 混入	• ほゞ完形 • 外面に1本接合痕			
2 “	12.8 — — 4.8	横撫で 削磨き 横撫で	削磨き 横撫で	堆な磨剤 り	磨剤り		• 黑褐色 • 白色砂粒 混入	• ほゞ完形			
3 竪 土師	推定21.3 “ 19.3 — 残存12.1	横撫で 削り	横撫の箇 削り	横撫で 削り	削り		• 黄褐色 • 黑、白色 砂粒混入	• 口縁部破片 • 軸張み痕有り。			
4 鉢 土師	推定21.0 “ 19.2 — 残存10.5	横撫で 削り	横撫の箇 削り	横撫で 削り	口縁部横 撫で前に 縱撫の箇 削り		• 灰褐色 • 黑、白色 砂粒混入	• 口縁部半欠損 • 一部に煤付着 • 瓦部に段を有す。			

19号住居址（図-45・図版-20）

本住居址の平面プランは東辺3.2m西辺3m南辺3.1m北辺3mの不整隅丸方形を呈する。床面積は9.6m²で主軸方位はほぼ真北を指す残存壁高は30cmであった。柱穴は確認できなかったが、あえて指摘するなら南壁中央付近で検出したピットと住居址外西南コーナー付近で検出したピットをあてることができるかもしれない。周溝は全周に認められた。

カマドは北壁中央よりやや東寄りに構築されており、両袖とも先端を鶴形土器片で補強していた。貯蔵穴はカマド右側と西南、東南の両コーナーより検出できた。カマド前面、住居址中央部分に河原石の散乱を見ることができる。

遺物（図-46）

土師器、須恵器

1は小形で器壁の厚い鶴形土器である。口縁部は短く外反し、底部は丸底に近い平底を呈する。砂粒の混入は少なく緻密な胎土を持つ。胴部外面は笠撫で、内面は横位の窪削り下半に笠磨きが施されている。2は肩部に張りがあり、口縁部は強く外反し、口唇部にやゝ立ち上がりをみせる。6号址、4号址出土の甌とほとんど同巧である。

3は大形の甌の破片であり、底部は回転窪削りされている。

北-19

遺物 番号	器形 法 量 cm (容積) (留)6	整 形 方 法				底 部	色 調 胎 土	備 考			
		内 面		外 面							
		口縁部	脣 部	口縁部	脣 部						
1	小形 土瓶	13.0 14.0 — 13.3	横撫で	横位の窪 削り、窪 削り	横撫で	窪撫で	窪削り	褐色 赤褐色砂粒 混入	・ほゞ完形 ・口縁は短く外反する ・床直上出土 ・輪積み痕有り		
2	甌 土師	23.0 27.0 — 残存27.5	横撫で	上半横位 の窪削り 下半笠撫 で	軸上半ま での継位 の窪削り のち横 撫で	下半 の 笠磨き		・灰褐色 ・温、白色 砂粒混入	・底部欠損		
3	甌 須恵	— — 推定9.4 残存4.3				体部下位よ り回転窪削 り	・灰色 ・白色砂粒 混入	右回転コロ成形			
4	*	— — 10.6 残存2.2				窪切りの ち回転窪削 りを施し高 台を付ける。	・灰色 ・白色砂粒 混入	右回転コロ成形			
5	甌 須恵	推定29.0 — — 残存9.5	ロクロ痕	叩目	ロクロ痕	叩目		青灰色 白色砂粒混 入			
6	*	26.2 — — 残存10.8	ロクロ痕	叩目	ロクロ痕	叩目		淡褐色 黒、白色砂 粒少量混入	床直上出土		

20号住居址（図一47・図版一21）

本住居址の平面プランは東辺 3.6m 西辺 3.6m 南辺 4.4m 北辺 4.5m の東西に長い不整隅丸長方形を呈する。床面積は16.2m²で主軸方位はほぼ真北を指す。残在壁高は25cmであった。定形化した住穴は検出できなかったが、4個のピットを各コーナー付近で検出した。これらすべてを柱穴と考えるならば、壁に接しているか、接近した位置に柱を建てたことになる。周溝は認められず、カマドは北壁中央やや東寄りに構築されていた。右の袖は残存状況が悪く明確にすることはできなかつた。カマドの右側より不整形のピットを検出したが、いわゆる貯藏穴と断定はできない。

遺物（図一48）

須恵器壺一点のみであるが、2分の1は11号址の充填土中より出土したものである。体部に龜記号があり、底部は回転窓削りされている。

北-20

遺物 番号	器形	法 (口徑) 量 (底径) cm(底高)	整 形 方 法				底 部	色 胎	調 土	備 考				
			内 面		外 面									
			口 線 部	胴 部	口 線 部	胴 部								
1	壺 須恵	14.3 — 8.0 4.4					回転窓削り	灰色 白色砂粒混 入		ほぼ完形だが、片は北一 11の充填土出土 外面に龜記号 右回転ロクロ成形				

21号住居址（図-49 図版-21）

本住居址の平面プランは東辺 2.9m 西辺 3 m 南辺 3.2m 北辺 3.5m の不整開丸方形を呈する。住居址南壁中央より半円形の張り出し部が検出されたが、本住居址にともなうものであるかどうか明確にできなかった。主軸方位は N-15°-W を指し、残存壁高は 20cm であった。定形化した柱穴は確認できなかった、また周溝も確認できなかった。カマドは北壁中央に構築されていた。

遺物（図-50）

土師器二点のみである。壺形土器は口縁部と体部との境にかすかな棱を残すものであり、胴部外表面は不定方向の窓削り、内面は同窓撫でにより整形されている。壺形土器は器壁が厚く非常にもりい焼成のものであり、内面は横位に窓撫でされているが、外面には縱方向の窓生による条痕が施されている。

北-21

遺物 番号	器形	法 (口径) 量 (底径) cm (器高)	整 形 方 法				底 部	色 胎	調 査	考				
			内 面		外 面									
			口 縁 部	胴 部	口 縁 部	胴 部								
1	壺 土師	推定 13.4 — — 3.5	窓撫で	不定方向 の窓撫で	窓撫で	不定方向 の窓削り		青褐色 赤色砂粒多 量に混入	半欠品 外面 1 本の接合痕					
2	壺 土師	— 13.3 6.1 残存 19.0	窓撫で	窓撫で	撫で	縱位の窓 削り	撫で	褐色 砂粒多量混 入	• 口縁部破損 • 内面に数本輪積み痕 • 一部焼向君 • 調査外面は条痕状の窓 削り整形である。					

22号住居址（図一51、図版一22）

本住居址の平面プランは東辺 5.3m 西辺 5 m 南辺 4.9m 北辺 4.9m の不整隅丸方形を呈し、床面積は 25.2m²、主軸方位は N—S—E を指し残存壁高は 30cm 程である。主柱穴は 4 本深さ 45cm 前後で確認したが、他にカマド前面に深さ 40cm 北東部柱穴付近より深さ 56cm、南東部柱穴に接して深さ 28cm、南壁中央付近より深さ 29cm のピット群を検出した。柱穴と何らかの関連があったものであろう。馬溝は認められなかったが各コーナーより深さ 15cm~30cm 程の不整形のピットを検出した。北西、南東コーナーのピットより土器を検出している。カマドは北壁中央に構築されていた。

遺物（図一52）

土師器、須恵器、鉄鎌

2 は充填土中より出土したものである。

土師环形土器（1~4）には、口縁部と体部との境に明瞭に一段を残すもの（1）とかすかな棱を見るもの（3、4）と全体的に器形が丸味を帯びるもの（2）がある。菱形土器（6~9）には、口縁部と胴上部との境が明瞭でなく全体的にラッパ状の器形のもの（6、8）と、口縁の外反が強く最大径も口縁部にあって直線的に胴部がすぼまるもの（7）の二種がある。なお 6、8 は厚手で砂粒の多量に混入した胎土を用い雑なつくりである。胴部外面の範削りは下から上への方向である。

須恵环形土器は口縁と位部との境に一段をかすかに残すものであり、底部は手持ちの範削りの後周辺に回転範削りが施される。

鉄鎌は峰の一部が破損しているが完形に近いもので、峰長約 15.6cm、刃部長約 15.5cm をはかる。

造物 番号	器形	法 (口径) 量 (深径) cm (留高)	整 形 方 法				底 部	色 質	調 土	備 考				
			内 面		外 面									
			口 線 部	削 部	口 線 部	削 部								
1	坏 土師	推定 14.8 — — 残存 4.1	横削で	横位の磨き	横削で	斜位の箒削り		・灰褐色 ・微砂粒混入		・半欠品 ・休器との境に一般と有し、口縁は外反気味。 ・外面2本の接合痕				
2	"	推定 10.7 — — 3.3						・灰褐色 ・砂粒多量混入		・另破片 ・内外面とも剥落著しい。 ・充填土出土				
3	"	推定 13.1 — — 残存 3.1	横削で	無で	横削で	不定方向の箒削り		・灰褐色 ・微砂粒混入		・口縁部破片				
4	"	推定 11.0 — — 残存 3.6	横削で	無削で	横削で	箒削り		・黄褐色 ・砂粒少量混入		・口縁部破片				
5	陶 土師	推定 9.5 — 7.3 4.1						淡褐色 砂状の粘土使用		・手摺ね(指頭痕有り。)				
6	陶 土師	18.6 15.3 3.8 26.2	横削で	不定方向の箒削り	横削で	下から上への斜位箒削り	4条の指頭による摺で	明褐色 砂粒多量混入		・ほぼ完形 ・口縁部はラッパ状に広がる。 ・輪積或有り。				
7	"	推定 28.0 — — 残存 12.5	横削で	横位の箒削り	横削で	斜位の箒削り(+)		赤褐色、暗褐色 砂粒多量混入		・口縁另破片 ・輪積痕有り				
8	"	— — 5.4 残存 9.0		不定方向の無削で		斜位の箒削り(±)	箒削り	内面褐色 外面暗褐色 粗大な砂粒多量混入		・底部破片 ・輪積み痕有り。				
9	"	— — 9.1 残存 3.5		箒削り		箒削り	撫で	内面淡褐色 外面暗褐色 砂粒少量混入		・底はやや上底				
10	坏 須恵	— — 6.2 残存 2.6					丸底に近い 手持ち箒削りののち周開を箒削り	灰色 緻密な粘土		・底部半欠品 ・体部上方に一筋有り。 ・右回転クロ成形				

23号住居址（図-53、図版-23）

本住居址は北区最南端に位置する住居址である。平面プランは東辺 7 m 西辺 6.8 m 南辺 6.8 m 北辺 7.1 m の隅丸方形を呈し床面積は 48.3 m² で主軸方位は N-20°-W を指し残存壁高は東壁で 30 cm 西壁で 20 cm である。この差はブルドーザーによって削りとられたからである。主柱穴は 4 個、さらに南壁中央付近にピットを確認した。このピットの性格は不明であるが入口施設の痕跡とは考えられないだろうか、断定することはできないが可能性もある。カマドは北壁中央に構築され、カマド前面には床をわずかに掘りくぼめたところに多量の焼土を確認した。

24号住居址（図-54 図版-23）

本住居址の平面プランは東辺 4.2 m 西辺 4.2 m 南辺 4.2 m 北辺 4.6 m の不整隅丸方形を呈する。床面積は 18.5 m² で主軸の方位は N-9°-W を指し、残存壁高は 50 cm であった。柱穴は 4 個確認された。深さは 23 cm から 54 cm と差がみられた。周溝は北東コーナーの一部と西壁の一部に認められたにすぎなかったが、住居中央より南半分の壁の付近は床面がわずかにくぼんで凹凸が著しかった。南壁中央より西側の南壁に接した場所より焼土層が確認されたが、いかなる理由によるのか不明である。カマドは北壁中央やや東寄りに構築されていた。右袖は土器を利用して芯としていたが、左袖は明確に検出できなかった。

遺物（図-55）

土師器、黒曜石

环形土器（1～3）は、口縁部と体部その境に明瞭に一稜を残し外反するもの（1）とわずかに残すものの（2、3）がある。なお 3 は内黒の坏で全体的に丸味を帯びるものである。4 は小形斐形土器で底部を欠く 3 分の 1 の破片である。口縁部と胴部との境に一稜が巡り、内面に刷毛目が観察できる。5 は口縁部の外反が強く、やや下彫れの器形を持つ。6 の口縁部の外反は 5 ほど強くないがやはり下彫れの器形であると考えられる。

7 は黒曜石の残核と見られる。

番号	器形	(口径) 法 (脚部) 量 cm (器高)	整 形 方 法				底 部	色 調 土	備 考			
			内 面		外 面							
			口 線 部	脚 部	口 線 部	脚 部						
1	坏	推定 12.9 — 土師 残存 42	横 摆 で	横 摆 で	横 摆 で	横位の箝 削り		赤褐色 黒白色砂粒 混入	另破片 外面に1種有り			
2	~	推定 13.0 — 残存 5.0	横 摆 で	箝 削 きでの のち放射 状の箝削 き	横 摆 で	不定方向 の箝削り		内面淡褐色 外面黃褐色 黒赤褐色砂 粒混入	另破片 外面2本の接合痕			
3	~	推定 12.1 — 残存 3.4	横 摆 で	横 摆 で	横 摆 で	横位の箝 削り		暗褐色 黒砂粒混入	口縁部片 内部黑色處理			
4	小甕	推定 12.9 ~ 12.6 — 残存 7.0	横 摆 で	箝 磨 き, 刷毛目あ り	横 摆 で	斜位の箝 削り		淡褐色 砂粒少量混 入	另破片			
5	甕	21.0 19.1 — 残存 21.6	横 摆 で	箝 磨 きで	横 摆 で	縦位の箝 削り(?)		褐色 砂粒多量混 入	底部欠損 口縁部下外面に殷有り 輪積み底有り			
6	~	推定 20.3 — 残存 92.5	横 摆 で	箝 磨 きで	横 摆 で	↓の箝削 り		褐色 砂粒多量混 入	另破片 輪積み底有り			

25号住居址（図-56・図版-24）

本住居址の平面プランは東辺 5.2m 西辺 5.7m 南辺 5.8m 北辺 6.1m の不整規丸方形を呈し床面積は32.4m²である。主軸方位はN-23°-Wを指し、残存壁高は40cmである。主柱穴は4本確認でき、さらに南壁中央付近に棟持柱穴と考えられるピットを検出した。周溝は全周とも認められた。また14住居址にみられたように周溝より東西に張り出した溝を図のように確認した。この溝は周溝と同じ深さか、やや深いところも認められたが大差ないものである。性格について断定はできないが、間使切りの痕跡である可能性もある。カマドは13号、15号住居址でみられたように北壁中央やや西寄りに構築されていた。

遺物（図-57）

土師器、須恵器（充填土より出土）

环形土器（1～7）には口縁部と体部との境に明瞭に一段を残すもの（3、5）、かすかな稜を残すもの（1、2、6、7）と口縁が内湾しつつ開き全体的に丸味を帯びるもの（4）がある。なお1、2、6は口唇部はわずかに外反するが、7は直立する。また3の口縁部は内傾するが、5は外反する。8、9は壺形土器の底部であるが、糸切状の痕跡を残している。

10、11の須恵壺の底部整形はともに回転窓削りである

番号	器形	(口径) 法(胸径) 量 cm (底径) (高さ)	整 形 方 法				底 部	色 調 脂 土	備 考			
			内 面		外 面							
			口縁部	胸 部	口縁部	胸 部						
1	壺 土師	推定 10.4 — 残存 3.2	横 摶 で 横	箆 磨 き	横 摶 で	箆 刷 り		淡褐色 砂粒多量混入	口縁部汚破片			
		推定 14.6 — 残存 5.1		横 摶 で	横 摶 で	横 摶 で		淡褐色 砂粒少量混入				
		推定 11.2 — 残存 4.4		横 摶 で	横 摶 で	横 摶 で		黒褐色 砂粒多量混入				
4	*	推定 11.6 — 残存 3.2	横 摶 で	横 摶 で				淡褐色 微砂粒多量に混入	汚破片 外面 2 本の接合痕			
		推定 13.0 — 残存 3.8		横 摶 で	横 摶 で	横 摶 で		黒褐色 砂粒混入				
		推定 11.1 — 残存 3.8		横 摶 で	横 摶 で	横 摶 で		褐色 砂粒混入				
7	*	推定 11.6 — 残存 3.4	横 摶 で	横 摶 で	施 刷 り		淡褐色 砂粒混入	口縁汚破片 一部黒色処理?				
		— 7.2 残存 5.4										
		推 — 推定 9.9 残存 5.4										
10	壺 須恵	推定 14.1 — 残存 4.9				回転箆刷り	灰色 砂粒混入	汚破片 右回転ロクロ成形 充填土出土				
		推定 9.5 — 残存 2.7										

26号住居址（図-58・図版-24）

北区南端に位置し22号住居址23号住居址25号住居址に近接する。平面プランは東辺 5.2m 西辺 5.7m 南辺 5.8m 北辺 5.1m の不整隅丸方形を呈し床面積は32.4m²で残存壁高は25cmであり主軸方位はN-23°-Wを指し主柱穴は4本確認できた。周溝は確認できず、カマドは北壁中央に構築されており、火床よりゆるやかな傾斜を持って煙道に至る。貯蔵穴は確認できなかったがカマド東袖より40cmの場所より环を検出した。南壁中央よりやや西寄りの壁に接した場所より河原石2個を検出したが性格等については不明である。

遺物（図-59）

土師器、紡錘車

坏形土器(1)は、口縁部と体部との境に一稜を明瞭に残すものである。2は鑿形土器の底部近くのものと思うが、非常に丸味を帯びた器形らしい。

3は土製紡錘車の半欠品である。

北-26

造物 番号	器形 法 (口様) 量 (底様) cm (器高)	整 形 方 法				底 部	色 胎	調 土	備 考				
		内 面		外 面									
		口 縁 部	脇 部	口 縁 部	脇 部								
1 土鉢	推定 13.6 — 現存 3.9	横 壁 で	横 壁 で	横 壁 で	斜位の窪 削り		青褐色一部 黒褐色 比較的緻密		片断				
2 “	夷 現存 6.0	横段の窪 削り、放 射状の窪 削き			窪 削 り		淡褐色一部 黒色 緻密な粘土 使用		剥下半の破片				

南地区の発掘調査

南区1号住居址（図-61・図版-25）

本住居址の平面プランは東辺 5.4m 西辺 5.5m 南辺 5.5m 北辺 5.4m の隅丸方形を呈し床面積29.7m²である。残存壁高は30cmを計測し、主軸方位はN-°-Eを指す。主柱穴4本確認できた。さらに南壁中央付近より棟持柱穴を検出した。周溝は全周に認められ北西コーナーのピットへと続く。カマドは北壁中央よりやや東寄りに構築されており、床面をやや掘りくぼめて焚口とし、支脚には河原石を利用している。カマド右側にピットを検出したか貯蔵穴かどうかについては不明である。

遺物（図-62）

土師器、須恵器、鉄鎌、砥石

土師甕形土器(1)の口縁部は短く外反し、口唇部は内面に稜を残して面には立ち上がりを見せる。これは北地区4、6、19号址に出土している甕とほとんど同巧である。2は台付甕の一部と考えられる。

須恵環形土器3は灯明皿として使用されたものである。底部整形は3は回転鎌削り、4は糸切りの後周囲を回転鎌削りによる。底部と体部との境はともになだらかで明瞭ではないが、口径は底径の二倍よりも小さいと考えられる。

鉄鎌は先と刃部の大半を欠くものである。残存峰長約10.9cmをはかる。砥石は残存長約7.6cm、最大巾約3.9cmをはかり、泥岩製と考えられる。

南-1

番号	器形	(口径) cm (底径) cm (器高) cm	整 形 方 法				底 部	色 調 胎 土	備 考			
			内 面		外 面							
			口縁部	胴 部	口縁部	胴 部						
1	甕 土師 残存	20.5 27.5 — 18.5	横 摺 で	横 摺 の 蓋 盤 で	横 摺 で	上半蓋盤 で 下半窓渡 き (△)		赤褐色 黒、白色砂 粒多量混入	• 底部欠損 • 外面に黄褐色粘土付着			
2	台付 甕 土師 —	— — — —		横 摺 で		横 摺 で		赤褐色 黒、白色砂 粒多量混入	• 台部と甕底部の接合所 と考えられる。			
3	壺 須恵 —	13.9 — 8.1? 3.7					回転窓剝り	灰褐色 黒色砂粒多 量混入	• ほぐ穴形 • 右側底ロクロ成形 • 灯明眼として使用			
4	“ — 残存	推定 — 8.2? 3.8					糸切り後、 周辺と回転 窓剝り。	灰色 破片少量混 入	• 月破片 • 右回転ロクロ成形			
5	“ — 残存	— — 11.4 2.2					三面窓剝り 後、高台端 辺を盤で付 け。	灰色 黒、白色砂 粒少量混入	• 右回転ロクロ成形			
6	蓋 — 残存	18.0 — — 2.9					つまみ付近 回転窓剝り。	灰褐色 砂粒多量混 入	• つまみ付近は1条の筋 巻きが施され、貼り付け の跡の固定を考えた。			

遺物(図-66・67)

小形の土師器甕形土器と男瓦片と、弥生時化二軒屋式窓の土器底部片のみであった。

南-円形有段4

番号	器形	(口径) cm (底径) cm (器高) cm	整 形 方 法				底 部	色 調 胎 土	備 考			
			内 面		外 面							
			口縁部	胴 部	口縁部	胴 部						
1	甕 土師 残存	推定 — 14.9 — 10.5	横 摺 で	斜紋の窓 剝り	横 摆 で	窓剝り		灰褐色 砂粒多量混 入	• 口縁部破片			

南区2号住居址（図-63・図版-25）

本住居址は南西コーナーを4号円形有段遺構に切られている弥生期の住居址である。平面プランは東辺4.7m西辺4.7m南辺4.4m北辺4.4mの各辺にややふくらみのある、南北に長い不整隅丸長方形を呈する。床面積は20.7m²で主軸方位はN-45°-Wを指す。残存壁高は20cmであった。プランの中央に長径60cm短径40cmの楕円形の床面を10cm程掘りくぼめた炉跡を検出した。炉内には焼土がみられ、中ほどには河原石が検出された。この炉を中心として4本の主柱穴と南壁中央のピット付近より深さ32cmのピットを確認したがこのピットが棟持柱穴となるかどうかは不明である。他にピット4つそれぞれ深さ10cm~25cm程を確認した。周溝は認められなかった。

遺物（図-64・65）

遺物は住居址の南辺、4号円形有段遺構に接する不整円形の浅いピットより多く検出された。土器については器形の推定し得るものはなく、全て破片である。その内容は口縁部破片5片、胴部破片35片、底部破片3片の計45片である。この他に鉄製品1個、流紋岩製と思われる剝片1片がある。この鉄製品は鉄斧として使用されていたものかもしれない。

図中1~3及び6、7は口縁部破片、4、5は底部破片である。この他は全て胴部或いは頸部の破片である。口縁部破片はいずれも口唇上に縄文或いは燃糸文の原体による押奈がなされている。このうち2、6、7は頸部との境に一種の隆起帯を持ち、この上には縄文による刻み目が施される。また6の地文は羽状に施された縄文、2、7については所謂渦状斜縄文である。1は条間隔の粗で極めて浅に無節の縄文、2は所謂折返し口縁の形態で縄文が施される。底部破片については、4、5の両者とも木葉痕が残されており、外面に外曲した張り出しが目立つ。胴部破片については、ほとんどのものに異条斜縄文が施され、羽状を呈するものが多い。これらの土器破片は全て本県でいう弥生後期二軒屋式に含まれると思う。

4号円形有段遺構（図-63・図版-32）

本遺構は、2号住居址の東南隅を切った形で検出された。平面形は径3.2~3.8mの東西に長い円形を呈し、ローム層上面からの深さ約1.7mを測る。断面形をみると大略鍋底形を呈するが、底部は一担平坦になり、その中央に1×0.7mの長方形の土壙を持つことが特徴的である。遺物は充填土中から出土しているか、これらは国分期のものとみることができる。円形有段遺構とは、その形態的な面からつけた名称であり、本遺構についてはこの他3基検出されている。いまのところ類例は少なく、本県においては、矢板市と南河内町において数例検出されている。性格や集落との関係などは皆目見当がつかない。多少参考的な意見は聞いているが、後日検討したいと考えている。

南区3号住居址(図-68・図版-26)

3号住居址の平面プランは東辺3.2m西辺3m南辺3.9m北辺4mの不整長方形を呈し、床面積12.4m²である。残存壁高は15cmである。

柱穴、周溝は確認できなかった。カマドは検出されず、中央部よりやや北側に炉跡を検出した。炉は楕円形を示し長径75cm短径40cmの規模で床面をやや掘りくぼめ、炉の中ほどよりやや南方に河原石が置かれ炉内には焼土がみられた。カマドは検出できなかつたが東南コーナーより粘土塊を検出し、東壁の中央付近よりピットを確認したので、これらはカマドの構築を想起されるものかも知れない。

遺物(図-69)

土師器、紡錘車

環形土器(1, 2)は、双方とも口縁部が短く外反し、やや深い丸味をもつた器形である。

1は口縁部内外は横撫で、体部以下は不定方向の箒削りによって整形されている。

楕形土器(3)は短く外反する口縁部、膨らむ体部、上げ底をもつ。

圓形土器(4)は口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部で更に外反する。胴部は球形に近いものと思われる。外面は刷毛状の工具による整形、内面は横位の箒撫でが施される。

小形壺(5)は、口縁以上を欠き丸底のものである。

なお4以外は砂粒の混入が少なく緻密な胎土をもつ。

紡錘車は蛇文岩製と考えられ、径約5.1cm最大厚約1.5cm、孔径約0.75cmをはかり、薄い円錐台形を呈する。

南-3

遺物番号	器形	法(口縁) (胴縁) 量(cm) (器高) cm	整 形 方 法				底 部	色 胎	調 土	備 考				
			内 面		外 面									
			口縁部	胴 部	口縁部	胴 部								
1	坏 土師	14.6 — — 6.5	横無で 不正方向 の箒磨き	横撫で 不正方向 の箒削り	横撫で 不正方向 の箒削り	箒削り	淡褐色 砂粒少量混入	• ほぐ光形 • 口縁部は短く外反し内 縫を持つ						
2	“	推定 14.8 — — 残存 4.7	横無で 箒撫で	横撫で	横撫で	箒削り	赤褐色 黑色砂粒少量混入	• 口縁部片						
3	楕 “	11.3 12.4 3.8 10.6	横無で 下半は横位の箒撫 で	横位の箒 削り	横撫で 不正方向 の箒削り	箒削りによ って円形の 上底に仕上 げる	赤褐色 砂粒少量混入	• ほぐ光形 • 一部爆発着						
5	壺 “	頭径 8.4 14.7 — 残存 11.7	頭部は無 て及び箒 磨き	撫 で	頭部横位 の箒削り 削り	主として 横位の箒 削り	淡褐色 赤褐色 黑色砂粒少 量混入	• 口縁部欠損						
4	圓 “	推定 16.3 — — 残存 6.3	横撫で 横位の箒 撫で	横撫で 刷毛状工 具による 整形			赤褐色 黒白色砂 粒多量に混 入	• 口縁部半欠品 • 輪積み底有り						

南区4号住居址（図-68・図版-26）

本住居址は大半を3号住居址によって切られているために、全容は確認できなかった。切り合いの様相から3号住居址より古手のものであろう。

南区5号住居址（図-70・図版-27）

本住居址は北壁を6号住居址によって切られ、さらに北東コーナーはかく乱されているためプラン全容は確認できなかった。推定による平面プランは東辺4.7m西辺4.1m南辺4.5m北辺4.3mの不整形隅丸方形を呈する。床面積は19.4m²である。残存壁高は20cmを計測する。中央に炉跡が検出された。この炉は長径90cm短径70cmの梢円形を示し、床面をわずかに掘りくぼめ炉の中ほどに1個の河原石を置くもので炉内には多量の焼土がみられた。焼土の範囲は長径130cm短径70cmの梢円形状を示していた。この炉を中心とし4本の柱穴が検出され、また炉跡付近より紡錘車を出土した。

遺物（図-71）

検出された土器は全て破片であり、器形の推定し得るものはない。口縁部破片2片、底部破片2片を除いたものは胸部或いは頸部の破片であり、総数25片検出された。この他に紡錘車、土鍤各1個の出土がある。

口縁部破片（1, 2）は両者とも口唇上に繩文の原体を押奈して作った刺み目が見受けられた。なお2は三段隆起帯があり、ここにも繩文の原体が押奈されている。1は所謂折り返し口縁を持ち、全面に繩文が施される。胸部破片には1片撇描文を有するものがあり、底部破片は外曲した張出しが見受けられ、木葉痕が残存している。

紡錘車は土製を中心のやゝ厚い円盤状を呈し、表裏とともに繩文が施文される。直徑約4.8cm、孔径0.5cm、最大厚約7.8cmをはかる。土鍤は径約2.5cmで中心に径約0.4cmの孔が穿たれている。

これらの遺物の特徴も、南地区2号住居址と同様、本県における弥生後期二軒屋式に含まれると思う。

南区6号住居址（図-70、図版-27）

5号住居址の北壁を切りこんで本住居址は位置する。東壁および南東コーナーがかく乱されているため全容を明らかにすることはできなかったが北壁にはカマドを構築したと思われる痕跡が認められた。

遺物（図-72）

土師器、須恵器

土師壺形土器は3個とも内黒の土器であり、いずれも内面に密な簾磨きが施されている。但し2は剥落が激しい。底部の整形は1は窓割り、2は糸切りのまゝである。3は器形からみると、口縁まで内湾しつつ開き丸味を帯びるが、これは明らかにロクロにより成形されている。なを外面に墨

書が観察できる。

遺物 番号	器形	法(口径) (胴径) cm(底径) cm(高さ) cm	整 形 方 法				底 部	色 胎	裏 土	備 考				
			内 面		外 面									
			口 線 部	脣 部	口 線 部	脣 部								
1	坏 土師	14.4 — 7.8 5.8	篠磨き	篠磨き			回転薦削り	黄褐色 黑色砂粒多 量混入		• ほゞ完形 • 内面黒色処理 • 右回転ロクロ成形				
2	"	12.9 — 5.8 4.6	篠磨き	篠磨き			糸切り	淡褐色 砂粒多量混 入		• ほゞ完形 • 内面黒色処理 • 右回転ロクロ成形				
3	推定	17.0 — 残存 4.0	横位の篠 磨き	横位の篠 磨き				淡褐色 砂粒多量混 入		• 口縁牙破片 • 内面黒色処理 • 外面に墨書き有り • ロクロ成形				
4	蓋 須恵	— — — 残存 2.0					回転薦削り	灰色 砂粒混入		• 右回転ロクロ成形 • つまみ無し				

南区7号住居址（図-73・図版-29）

本住居此の平面プランは東辺3.1m西辺2.9m南辺3.2m北辺3.4mの東西にやや長い不整隅丸長方形を呈し床面積は9.6m²である。主軸の方位はほぼ真北を指し残存壁高は15cmを計測した。柱穴周溝は確認することができなかったが東南コーナー付近に住居址外ではあるが深さ20cmのピットを検出した。カマドは北壁中央よりやや東寄りに構築されていた。カマドの右側、東北コーナーより深さ29cmのピットを検出したが、貯蔵穴であろうと思われる。

遺物（図-74）

土師器

环形土器（1）はロクロで成形され内黒であり、内面鏡磨きの密なものである。底部は糸切りと考えられるが剥落が激しく図示しなかった。菱形土器（2, 3）のうに2は「コ」の字状と呈する口縁をもち、薄手で赤褐色、胎土に細砂粒を多量に混入する。3は口縁が短く外反し、全体的に細長く、薄手の器である。

遺物 番号	器形	法（口径） （腹径） cm（器高）	整 形 方 法				底 部	色 胎	調 土	備 考				
			内 面		外 面									
			口 縁 部	腹 部	口 縁 部	腹 部								
1	坏 土師	14.7 — 6.2 5.2	横位の算 磨き	横位の算 磨き			糸 切 り	淡褐色 砂粒混入		•一部に墨付有 •内面黒色處理				
2	菱 “	推定 19.2 20.0 — 残存 28.0	横 無 で	横位の算 磨で	横 無 で	横位の算 削り		赤褐色 砂粒多量混 入		•底部欠損の半欠品 •輪積み底有り。				
3	“	推定 19.8 — — 残存 5.7	横 磨 で	無 で	横 磨 で	斜位の算 削り		褐色～赤褐色 砂粒多量混 入		•口縁部片				

8号住居址(図-75・図版-29)

本住居址の平面プランは東辺4.6m西辺4.2m南辺4.4m北辺4.4mの不整方形を呈し床面積は18.5m²である。主軸方位はN-7°Wを指す。残存壁高は15cm程度である。周溝、柱穴は明確にできなかったがプラン中央やや東寄りのところから深さ28cmのピットを検出した。柱穴と考えられそうな唯一のピットである。本住居址は中央より南北の部分は若干低くなつており凹凸が著しかった。カマドは北壁中央東寄りのところに構築されていたようであるが、破壊が著しく明確にはできなかつた。北西コーナーより深さ33cmの梢円形のピットが張り出して検出されカマド右側、北東コーナーよりピットが確認された。貯蔵穴の可能性もあろう。

遺物(図-76)

土師器、砥石

環形土器(1, 2)はともに内黒で、内面に密な施磨きが施される。底部に1は体部下半に及ぶ施削り、2は糸切りが残されている。錐形土器(3, 4)のうち3は比較的薄手で、口縁が「く」の字状に外反し、胴部にやや膨らみをみせる。

砥石は砂岩製の粗いものである。

南-8

遺物 番号	器形 法(口径) 量(cm) (底深) (留青)	造 形 方 法				底 部	色 治	調 土	備 考				
		内 面		外 面									
		口 緣 部	胴 部	口 緣 部	胴 部								
1	环 土器	推定 13.5 — 推定 6.2 3.9	施磨き		下平回転	回転施削り	淡褐色 砂粒混入		• 半欠品、右回転クロ成形 • 一部に煤付有 • 外面に墨書き有り「統」か • 内面黒色処理				
2	~	— — 残存 6.8 3.4	施磨き 施磨き			糸切り	黒褐色 砂粒混入		• 底部半欠品 • 右回転クロ成形 • 内面黒色処理				
3	錐 ~	推定 26.0 — 残存 11.5	横椭で 施削り	横椭で 施削り	横位の施 削り		淡褐色 砂粒多量混入		• 口縁部分破片				
4	~	— — 残存 9.9 5.1	施削で		施磨き	施による整 形や、突出 し上げ底	淡褐色 砂粒混入		• 底部のみ				

9号住居址（図-77・図版-30）

本住居址の平面プランは東辺4.2m西辺4.2m南辺3.9m北辺4.2mの西辺にふくらみを持つ不整隅丸方形を呈する。床面積は17m²で主軸方位はN-16°Wを指す。残存壁高は10cmであった。定形化した柱穴は確認できなかったが東壁中央付近に深さ18cm、南壁中央付近より深さ15cm、南西コーナーよりやゝ北側に深さ40cmのピットを検出したのであえて柱穴を考えるなら、これらのピットをあてることができよう。カマドは北壁中央に構築されていたが削平が著しく詳細に確認することはできなかった。カマドの右側より深さ18cmほどのピットを検出したが、貯蔵穴の可能性が考えられる。

1号円形有段造構（図-78・図版-30）

形態的にも規模的にも、4号円形有段造構と似ているが、底面に掘られた土壇は不整な円形を呈し、大きい。平面形は径約3.6mのはゞ円形を呈し、ローム上面よりの深さは約1.9mを測る。底部は施設パミス層内に構築されていることは、4号円形有段造構と同様である。充填土中より出土した遺物はやはり国分期のものと考えられるが、それほど新型式のものではないようである。

充填土の土層堆積状況は、上位にあった層が下位にも確認されることや、ローム或いはパミスのブロックが多数見られることから、一時（それ程長時間でなく）に埋められたような感を持たせる。底面の土壇の他には何等付属の施設は確認されなかった。

遺物（図-79）

土器部、須恵器

1は口縁部と体部の境に溝があり、口縁が内湾しつつ聞く体部の低い环である。

南-円形有段1

遺物 番号	器形	法 (口径) 量 (底径) cm (器高)	整 形 方 法				底 部	色 調	質 土	備 考				
			内 面		外 面									
			口 縁 部	軋 部	口 縁 部	軋 部								
1	环 土罐	推定 9.9 — 残存 3.5	横顎で 横顎で	振で 振で	横顎で 横顎で	振で 振で		淡褐色—深 墨色 緻密な粘土 使用		• 手欠粘 • 外縁を有するが、口縁 部と体部との境に1条 の沈線有り。				
2	軋 須恵	— — 推定 5.1 4.5					施剣り	黒灰色 白色砂粒多 量混入		• 全面に釉付着				

2号円形有段遺構（図-80・図版-31）

今回検出されたものの中で、最も小規模のものであり、径約2.7m、深さ約1.5mを測る。底面に径1.3~1.5mの梢円状の土壌を有する。断面を見ると、壁の中位にてやゝ屈曲点があるが、全体から見ると他の円形有段遺構と同様の形態である。更に注目すべきなのは壁下に穿たれた4つのピットである。これは3号円形有段遺構にても検出された。また底部は鹿沼バミス内に構築されている。遺物の出土は全くなかった。

3号円形有段遺構（図-81・図版-31）

今回検出された円形有段遺構のうち最大規模のものであり、平面形は径約4.2mのほど円形を呈し、深さ約2.7mを測る。断面形は、落ち込みの部分から底へ順次すり鉢状にすればみ、ローム上面より深さ約2.2mにて一端平坦な段を作り、その中央に更に土壌を掘る。この形態をもって有段遺構と名づけ、平面形を併せて円形有段遺構としたのである。

本遺構にて特記すべきことは、壁の下底面近くに、8個のピットが横に穿たれていることである。これはピットに合った円形の棒状のものを、底面及び土壌の上に差し廻したという痕跡ではなかろうか。更にこのピットの高さから底面（有段の部分）にまで厚い炭化物、焼土の検出があったことは注目すべきものと思う。炭化物の範囲は底面の上に広がっているが、底面中央の土壌中にはほとんど検出されなかった。充填土層は上下に共通の層が検出されることや、ローム或いは鹿沼バミスのブロックが多量に混入するなど、その埋まり方に人為的なものを感じる。しかし確実に実証することは今はできない。底面は鹿沼バミス下の火山灰層中に構築され、遺物は充填土中より出土し、多くは国分期と目される。

円形有段遺構は本遺構を含めて四址検出されたわけであるが、性格、集落との関連について考察するために、今のところ何ら論点を持ち得ない。検出された四址についても、互いに共通することは、円形有段という形態と充填土の埋まり方のみであり、他に積極的に講えるものはない。今は更なる資料の増加を持つ段階と考える。ただ、壁下及び壁下位より検出されるピット、炭化物の存在は以後注目に値するものであろうと思う。

遺物（図-82）

土師器、須恵器、紡錘車

土器はいずれも破片である。弥生式土器片も充填土中より出土したが、どこからかの粉れ込みと思われる。

紡錘車は石製で、蛇文岩製と考えられる。

南一円形有段 3

器物 番号	器形 法 量 cm (容積)	整 形 方 法				底 部	色 質 胎 土	備 考			
		内 面		外 面							
		口縁部	腹 部	口縁部	腹 部						
2	甕 土師	— — 推定 残存	5.8 2.2	直 で	指頭板	薬 剤 り	淡褐色 赤色砂粒混入	* やゝ上底			
3	々	— — 推定 残存	4.7 3.1	横位の薬 調整	直 で	薬 剤 り	赤褐色 赤色、白色 砂粒多量混入	* 底部に媒材着			
4	鉢 須恵	推定 — — 残存	20.6 6.4	—	—	—	青灰色 白色砂粒多量混入	* 口縁部分の破片			

VII 遺構遺物の検討

遺物について

1. 先土器時代（図-83）

遺物は白色の流紋岩製剝片（Flake）一点であり、南地区第4号円形有段造構の壁面のローム層中より検出されたものである。層位的には宇都宮近辺の宝木ローム層上位の黒色帶と考えられるが、遺物についての記述、本県既知の遺跡との比較等、別に斎藤一男氏の詳しい報告¹⁰があるのでここでは省く。

発掘調査当時、時間、人員等の制約もあり、充分な調査ができなかったことは甚だ残念である。しかし該出土地点は現在瑞穂野工業住宅団地の終末汚水処理場の一画になっているが、それ程甚大な破壊はなされていないようである。そして今本県先土器時代研究の停滞を思うとき、本遺跡の再度の調査が試みられることを念願して止まない。

¹⁰ 斎藤一男、「宇都宮市瑞穂野団地遺跡出土の石器」、下野古代文化創刊号所収、1974、4、下野古代文化研究会

2. 繩文時代（図-84）

南調査区より五片の縄文式土器を採集した。これらはいずれも小破片で、器形のうかがえるものはない。また造構を伴うものはなく、表面採集或いは覆土より検出されたものである。

1～5は全て口縁部の破片であるが、5以外のものは4片とも同系統と考えられる。つまり1～4は口縁部を除く表面に間隔のある撚糸文が施されており、いずれも口唇部がやや肥厚している。このうち、1、2は器壁の厚さは異なるが、表面は同様な間隔で撚糸文が見られ、器面は表裏とも良く磨かれており、焼成は良く固くひきしまっている。これに対して3、4はやや密に施文されており、口唇部の肥厚はより目立っている。また1、2に比して焼成が悪く、器面の磨きはあまり丁寧ではない。1～3は暗褐色を呈するが、3は黄褐色に近い。5は、口唇部上端が平滑で、口唇下に一条の沈線が施されている。器面は表裏とも良く磨かれており、胎土には砂粒を含むが、焼成は良く固くひきしまり、色調は黒褐色を呈する。

1～4は縄文早期の撚糸文系土器と見て良いと思うが、このうち1、2は所謂稻荷台式に類似性が高いが、3、4については良く分からぬ。が、それ程差はないであろう。5については、栃木町天谷場遺跡¹¹の3類土器の一郎の特徴と合致しているが、該類土器は早期無文系土器の花輪台式に一部共通するとされている。

1は南地区での表面採集品であり、2は5号住居址、3～5は4号円形有段造構の覆土中より検出した。

¹⁰ 中村紀男、橋本澄朗、「天谷場遺跡」、栃木県教委、1972

3. 古墳時代後期前半（図-69）

南地区3号住居址は、東西約4m、南北約3mと長方形を呈し、比較的小規模のものである。中

尖北壁よりに炉の施設があり、カマドの付設はなかった。本址と同時期のもので規模的形態的に類似のものは本県では未だ知見がない。

遺物について本県既知のものと比較してみると、壺形土器1, 2のように、口縁部が短く外反し、体部が半球状に丸味を呈するものは、鹿沼市三軒屋遺跡¹1号住居跡出土の壺の多くと、野木町篠山遺跡歴史時代1号址003, 005の壺と、上三川町大野遺跡K-14号住居跡1, 2の壺との類似性が高い。また口縁部の形態に多少の相違があるが、真岡市井頭遺跡5区21号住居跡出土の壺にも類似する。碗形土器3の、口縁部が非常に短く外反し、やや下膨れ気味の体部を持ち、上げ底のものは、大野遺跡K-14号住居跡4の碗と、小形壺形土器5は同住居跡出土の小形丸底壺に類似する。これらのうち三軒屋遺跡1号住居跡、篠山遺跡歴史時代1号住居跡は鬼高窓初頭に比定され、前者については6世紀の前半に位置づけられている。また大野遺跡K-14号住居跡については所謂和泉期とされ、年代的には5世紀半ばのある時期と考えられている。なお、大野遺跡K-14号住居跡は、本県で報告書の刊行された和泉期の住居跡の中では、遙に長胴化の傾向がみられること、遺構形態にやや新規の様相がみられることなどから、やや後出のものとする考え方がある。更に本址出土の壺形土器は、口縁部から胴上部にかけての破片でしかないが、大きく「く」の字状に外反する口縁部、球体の胴を呈する可能性が大なこと、刷毛状具による整形がなされていることなど、所謂和泉期に含まれる壺形土器の特徴とほぼ合致する。

また本県の住居跡におけるカマドの出現は、現在のところ大野遺跡L-6号住居跡をもって初現とされており、該住居跡には6世紀前半のある時期という年代が与えられている。⁶ 篠山遺跡歴史時代1号住居跡の場合、カマドの構築法からして、これより後出的とされている。⁷ また三軒屋遺跡1号住居跡にはカマドの付設は報告されていない。とすれば本址はカマドを未だ持たないということ、また遺物的な観点から、和泉期から鬼高窓へと移行するある段階、カマドの付設される以前の時期に近い。つまり篠山遺跡歴史時代1号住居跡、大野遺跡L-6号住居跡よりは多少先行的であり、三軒屋遺跡1号住居跡或いは大野遺跡K-14号住居跡に近接する時期とみられる。しかし、本住居址より検出した遺物の数量的なものには問題があるが、高壺の存在がなかったことは、三軒屋遺跡1号住居跡により近い感を持つのであるが、厳密にはどちらとも言えない。よって現在のところ、先述のように本住居址は和泉期から鬼高窓への移行的な段階といえるのみである。大野遺跡K-14号住居跡と三軒屋遺跡1号住居跡の年代を参照すれば、本址は5世紀半ば以降6世紀初頭までのある時期に考えられる。

文 献

- (1)辰巳四郎他、「三軒屋遺跡」、東北縦貫自動車道発掘調査報告書所収、栃木県教委、1972
- (2)竹沢謙、山崎由美子、「篠山遺跡」東北新幹線埋蔵文化財報告書所収、栃木県教委、1974
- (3)白田芳郎他、「大野遺跡」、栃木日産遺跡所収、日産自動車株式会社、1971
- (4)大金宣亮、橋本澄朗、川原由典、二宮淳子「井頭遺跡」栃木県教委、1974
- (5)竹沢謙、「十三塚遺跡」、東北新幹線埋蔵文化財報告書—その2—所収、栃木県教委、1975
- (6)註(3)前掲書
- (7)註(2)前掲書

4. 古墳時代後期後半以降

土器の分類

瑞穂野工業団地内遺跡北、南両調査区で検出された32軒の住居址より出土した実測可能な遺物は214個であった。ここでは南地区3号址より検出した土器(5個)と鉄製品、砥石、紡錘車を除いた190個の土器について分類を試みた。これらは南関東で言う鬼高窓後半から国分窓にかけてのもとと考えられる。本来ならばこれほど長期間に亘るものを見一括して分類することなど不見識のそしりを免れないものかもしれない。が、出土した土器の数量、検出し得た造構の少なさは、各期における土器の分類を試みることに、「重箱の隅を穿る」ような感を呈させた。それならば長期間ではあるが一括して分類を試み、またその伴出関係を基にしながら土器群の変遷をながめてみるのも無駄ではあるまいと考えたのであった。しかし、検出し得た造構には相互に重複するものが多く、また調査方法の不首尾から造構の確認を層位的に観察することができます¹¹、造構各々の時間的な差異を明確につかみ得なかった。ただ土師器壺形土器、同杯形土器、須恵器壺形土器には、器形のこととその製作技法に変化が認められ、胎土、色調等にも多少の差異が観察できた。住居址毎の伴出遺物の分類表は後に掲載した。なお分類に利用した土器は比較的出土量が多く、ほとんどの住居址より出土した土師器壺形土器、同杯形土器、須恵器壺形土器である。但し覆土中上位から出土したものは一応除外した。

(1) 土師器壺形土器

A類；口縁部と体部との境に階段状の稜が明瞭に残るもの。口縁部の内屈するものと外反するものの二種があり、前者とも底盤はほとんど丸底である。口縁部内外に横なで、体部外面はへら削り、内面にへら磨きが施される。口縁部の内屈するものは北地区3、5、25号、口縁部の外反するものは15、22、24~26号の各住居址出土の坏に見られる。

B類；口縁部と体部との境には階段状の稜は残さず、この部分でかすかな屈曲しか見せないものと、口縁部が強く内屈或いは直立して外面に稜を残すものの二種がある。前者はよりC類に近く、後者はよりA類に近い。前者とも丸底である。口縁部内外には横なで、体部外面はへら削り、内面にはへら磨きされるものとされないものがある。北地区2、5、18、21、22、24、25号址出土遺物に含まれている。

C類；B類の一部に見られた口縁部と体部の境の屈曲はなくなり、全体的に扁平で丸味を帯び、口縁部が内側湾するようになってくる。底部に平底に極めて近い丸底を呈する。口縁部外面の横なでの幅は狭く、内面には全体に施されることが多い。体部外面にはへら削りが観察される。A、B類に比して極めて緻密な精選された粘土が用いられ、器壁も概して薄い。北地区1、2、14、15、17、18、25号の各住居址に含まれるが、当類の特徴は所謂真間窓の壺形土器のある部分に合致する。

D類；C類と同様の特徴を有するが、器高に比して口径が大きくなりより扁平な器形になってくる。北地区1、2、8号の各住居址の出土遺物に含まれるが、数量的には少ない。

E類；ロクロ成形によるもので、いずれも内面は黒色処理がなされている。底部には糸切り痕と回転へら削り痕が残され、底盤は口径よりも小作りである。C、D類とE類との間には、それぞれの伴出遺物から、時間的に相当な間隙があるものと思われる。南地区6、7、8号址に含まれる。墨書きされたものが2個ある。

(2) 土師器瓶形土器

北地区2号住居址に多く検出されたものである。瓶形土器の底部だけを切り取ったような器形を呈し、厚く手づくねの感を持たせる。極めて緻密な粘土が用いられており、色調とともにC類に類似する。

(3) 土師器瓶形土器

- a類；最大径が胴部にあるものが多く、口縁部にあっても胴部に膨らみを見せる。口縁部はおおむね「く」の字状に外反し、比較的厚手につくられている。口縁部直下に一稜き有するものが一例あり、これは底部に木葉痕が残されている。口縁部内外面には横なで、胴部外面にはへら削り、内面には横位のへらなでが施される。北地区5、7、24号の各住居址に含まれる。
- b類；いずれの資料もどこかが欠損しており、良好なものとはいえないが、最大径は口縁部にあり、胴部にはほとんど膨らみを見せず直線的にすぼまる。a類に比べて器壁は薄くなり、口縁部の外反が強い。口縁部内外面に横なで、胴部外面は縦位のへら削り、内面に横位のへらなでが施されることが多いが、へら磨きされたものもある。北地区1、2、15、17、18、21、22号の各住居址出土遺物に含まれる。
- c類；口縁部は短く強く外反し、口唇部にやや立ち上がりを見せ、胴部上半に張りを持ち、ここに最大径がある。胎土は微砂粒を多く混入するが、礫はほとんど含まれず、焼成は良く堅緻なものである。色調は赤褐色より黄褐色に近い。器面はa、b類と異なり丁寧に整形され、胴上半になで、下半に底部近くから始まって折り返すへら磨きが特徴的である。底部に木葉痕が残る。北地区4、6、19号、南地区1号の各住居址に含まれる。本県において真岡市井頭遺跡出土の数的に主流を占めるという瓶形土器II類が本類のものと酷似する。また南関東において本類と同タイプのものを国分式土器の一要素としている³⁹⁾。更に類似のものは東北地方出土の晩期IIに位置づけられる瓶形土器に多く見られるようである⁴⁰⁾。
- d類；口縁部は大きな「く」の字状⁴¹⁾或いは「コ」の字状を呈する。胴部は丸味を帯びながら急激にすぼまり、底部は小さくなると思われるが、口縁部近辺の破片が多く充分な観察はできない。器壁はc類より更に薄くなる。胎土に微砂粒を多く含み礫の混入は全くない。色調は赤褐色を呈する。これらはc類に比べ更なる製作技術の向上を感じさせる。胴部外面には横位或いは斜位のへら削り、内面にはおおむね横位のへらなでが観察できる。北地区4、12、16号、南地区7、8号の各住居址に含まれる。井頭遺跡出土の瓶形土器III類の要素がこれに含まれ、時に「武藏形」の瓶形土器と称されるものに類似する。
- 台付型；脚台のつく小形の瓶形土器である。口縁部は「コ」の字状を呈するものが多いが、胎土、色調、整形の方法はd類の瓶形土器に類似する。型部分の形態は上下から押し潰されたような扁円形を呈する。d類との併出が考えられるものである。北地区10、11、16号、南地区1号の各住居址に含まれる。

(4) 須恵器壺形土器

器形的なものの分類は、器体の完全に復元できるものが少量なので取り止め、底部分の残りは比較的多いので、粘土塊から製品を切り離す際の技法によって区別した。つまり回転へら切り、回転糸切り、静止糸切りの三種が考えられるが、当遺跡で検出し得たのは前二者である。更にこれらは切り離しの後、底部周辺がへら削りにより調整されたもの、及び底部全面が調整されたものがあ

る。この調整の多くはロクロ回転を利用してなされているが、なかに若干ではあるが、ロクロ回転を利用しないで削り調整されているものがある。¹⁷⁾また全面へら削りされているものは、切り離す際の技法についてはほとんど不明であった。高台の付されたものも何個体かあるが、これも全面的にへら削り調整されている。各住居址出土の須恵器壺形土器の底部に残る痕跡、調整については後に一括して表示した。

なお須恵器壺形土器は北地区で12の住居址より、南地区より1の住居址より出土しており、総数33個体分である。

文 献

(1)久保哲三、小出義治、「秦野下大槻遺跡」、秦野の文化財第9、10集、1974

上記によれば、該遺跡20c地区住居址群の検出にそれぞれの住居址が確認される層位を重視し、それを後の各住居址の時間的な判定の一観点としている。このような発掘方法には、ブルドーザーによって全面的に表土を削平する大規模発掘の多い昨今、範とすべきものがあると思ったので註記した。

(2)大金宣亮、橋本澄朗、川原由典、二宮淳子「井頭遺跡」栃木県教委、1974所収「第4章第2節4奈良平安時代、土器の分類」

(3)西野元、「房總における奈良平安土器について」三浦古文化第14号、1973

(4)杉原莊介、大冢初重編、「土師式土器集成、本編4（晩期II）」、東京堂、1973

(5)註(3)前提書

(6)河野喜映、「厚木市鳶尾遺跡出土の土器編年試論」神奈川考古、1976

(7)所謂手持ちのへら削りによる調整がこれに当たると思う。

時期区分

南地区3号住居址以外の住居址出土遺物は、その伴出関係からいくつかの類型に分けることができる。それは主として土師器壺形土器、同壺形土器、須恵器壺形土器の伴出関係をもとにした。

(1) 第I類型

土師器壺形土器A類とB類、同壺形土器a類が伴出し、須恵器の伴出のないもの。北地区3、5、7、24号址出土遺物群がこれにあたる。上述の他の遺物として、5、7号址より單口で比較的大形の壺形土器、7、24号址より小形短胴の壺形土器の出土を見るが高坏の出土は全くない。¹⁸⁾

壺形土器A類の口縁部の形態は直立或いは外反するものがなく、ほとんど内傾する。これは南房東において所謂鬼高峰期の後半の段階に多く見られる形態と見受けられる。また壺形土器B類のなかの5号址の4、5の遺物、24号址3の遺物などに、壺形土器C類との類似性を認めるならば、本類型の編年的位置を予測し得る。

壺形土器a類は全て肩部に膨らみを見せる形態を呈し、いずれも肩部外面に縱方向のへら削りが目立つが、7号址の3の遺物は肩部に張りを持ち、口縁部の外反が強くなり、更に他の壺形土器に比して精選された粘土を用いていることや、やや薄く仕上げられていることなど、第IIから第III類型の壺形土器との関連が深いように思われる。またこの壺形土器の底部には木葉痕が残されている。

壺形土器A、B類と壺形土器a類の伴出、更に壺形土器B類の一部にC類に近いものがあること

は、本県既知の遺跡（報告書の刊行されたもの）の中では上三川町上蒲生遺跡2号住居址の土器群に酷似する。つまり該住居址の壺形土器1, 2は本類型のA類に、また同3, 4（報告書では真間期の壺形土器とされている）が本類型でいえばB類の一部のものとの類似性が高い。また壺形土器6, 9の要素は本類型の大部分のそれに合致する。更に大形の壺形土器、小形短脣の壺形土器の出土は、本類型5, 7号及び24号址にも観察できた。上蒲生遺跡2号住居址については、橋本氏が本県内の鬼高窓と目される住居址を通観し、これが初頭、後期前半、後期後半の三期に区分される可能性を呈示されたうちの後期後半に位置するものとされている。更に野木町杏林遺跡⁵、佐野市工業団地内遺跡⁶より検出された住居址の一部、井頭遺跡5区20号住居址等がこれに位置づけられるとして挙げている。

上述の他に本類型と類似する土器群を出土するものとして、都賀町觀音堂遺跡15号、21号住居跡、佐野市堀米遺跡⁷13号住居跡がある。觀音堂遺跡15号住居跡、堀米遺跡13号住居跡はそれぞれ鬼高窓或いは古墳時代後期の所窓とのみ報告されている。土器を実見したわけではないので詳細には分からず、報告書の実測図より判断すれば、これらも本類型に類似すると思われる。

鬼高窓後期後半は、八王子市中田遺跡の鬼高III期の土器群とはほとんど類似するとされる。本類型の土器群もそれにはほとんど同位置とすることができよう。また本類型において特記すべきことに土師器壺形土器の一部に真間期的な要素が取扱えることがある。しかし純粋な真間期に至るまでには、他の土器群の様相を見る限り、まだ大きな懸隔を感じる。ところで本遺跡の時期区分における第III類型は所謂真間期の中に位置づけられると筆者は考へている。そして本類型と第III類型との間には、土器群の様相を見る限り、まだまだ多くの差異を認めざるを得ない。よってこの差異を埋めるものとして、第II類型の土器群を示した。

蛇足ではあるが、上蒲生遺跡は本遺跡と同じ岡本段丘上に位置し、北地区より南方約6kmの距離にある。

(2) 第II類型

土師器壺形土器A～C類（但し数的にはB類が多い）と同壺形土器b類が伴い、須恵器の伴出はまだ一般的ではないもの。北地区15, 18, 22, 25号住居址出土遺物群がこれに含まれる。これら以外の遺物として、土師器壺形土器が15号址に、器形全体が口縁部からラッパ状に開く土師器壺形土器が22号址に、その他鉄鎌、須恵器壺形土器、同壺形土器の出土が見られる。

本類型に含まれる壺形土器A類は全て口縁部の外反するもの（15, 22, 25号址に伴う）、第I類型に含まれる壺形土器A類とは趣を異にする。この形態は所謂鬼高窓に印象的な壺形土器から派生したものであろうが、須恵器壺形土器の模倣から離れて、土師器特有の形態を呈するようになったものではあるまい。本県においては、同様の形態のものと、同様の形態であるが口縁部と体部との境に沈線を持つものが、真間期以降国分期初頭の段階にまで存続するようである。壺形土器B類も本類型では外面にかすかな屈曲しか見せないものが多く、C類に近い感を持つことができる。ただC類と異なる点に、胎土に砂粒が多く含まれ比較的厚手であること、口唇部がやや外反するものがあることである。口唇部がやや外反するものは、少量ではあるが第III類型にもまだ残る。C類はこれも少量ではあるが、本類型では15, 18, 25号址出土遺物群に含まれている。

本類型は第I類型に比して、壺形土器B類の増加が目立ち、更にC類の出現と、A類（形態的には第I類型のA類とは異なるが）の残存は、本類型の位置の想定にひとつの鍵が与えられるもので

ある。その上に本類型で特記すべきことは鷹形土器 b 類の出現であろう。つまり、坏形土器 c 類と鷹形土器 b 類はあきらかに真間期の範囲に入れられるものであり、これらは第Ⅲ類型に一般的に見ることのできるものである。これらと A 類の坏形土器との伴出は本類型が第 I 類型から第Ⅲ類型に至るまでの段階に位置づけられるものと考えた。しかし或いは本類型は真間期の一要素に含まれて然るべきものではないかという考えは試されたわけではない。が、後述するように第Ⅲ類型の土器群を真間 I 式期に類似のものと考えた場合、本類型の土器群と大きく異なる点に坏形土器 B 類の数量の違い、A 類の有無及び須恵器高台付坏形土器の有無がある。よって第Ⅲ類型より本類はやや先行的なものとして考えざるを得なかったのである。

先述のラッパ状に器形全体が開く鷹形土器は特徴的な整形の施されたものである。つまり底部が小さくやや斜めに作られており、安定性に乏しいので、全体を倒立させた状態で縱方向にへら削りがなされている。よってこれを正立させるとへら削りの方向は下から上となる。このような鷹形土器は寡聞にしてまだ知らない。また少量であるため第Ⅱ類型に特徴的なものか否かも分からぬ。

また北地区22号址にて、須恵器坏形土器の底部破片と思われるものが床面直上より検出された。これは焼成の程度の非常に良い堅緻なものである。底部全面には手持ちのへら削り痕が残されていると考えられ、第Ⅳ類型以降に認められる坏形土器とは一線を画すことができる。更に同住居址には鉄鎌の出土がある。鉄鎌の出土は、本遺跡においては第Ⅲ類型以降に比較的多くみられた現象であり、これも本類型の位置を想起させる。

本県において、報告書の刊行された遺跡出土の土器についてみると、佐野市堀米遺跡 8 号住居址に A 類（口縁部が内傾するものと外反するものの 2 種ある。）の土師器坏形土器と b 類の鷹形土器に近いものが出土している。が、該住居跡は古墳時代後期の所産とされ、本類型よりやや先行的な要素が見受けられる。また佐野市と足利市にまたがる上敷遺跡 B 区 7 - A 号住居跡に A 類（口縁部の外反する）の坏形土器と b 類の鷹形土器に近似するものの出土があるが、堀米遺跡 8 号住居跡と違い、口縁部の内傾する坏形土器 A 類に似るもの出土はない。が、これは鬼高 III 式期に含まれるとしている。

また、北地区25号住居址出土の土器の中の鷹形土器の底部と思われるものに糸切り痕に類似する痕跡が残されている。二個体分の底部破片であるが、これをどのように考えてよいのか不明である。

(3) 第Ⅲ類型

土師器坏形土器 C, D 類（量的には C 類が多い。）、同鷹形土器 b 類と須恵器高台の付された坏形土器が伴出するもの。北地区 1, 2, 8, 17 号住居址出土土器群がこれに含まれる。また北地区 14, 21 号住居址もこれに含まれる可能性があるが、出土遺物は充分検討に値するものではないので明瞭ではない。これらのうち 1 号住居址出土土器群が最も特徴的なものである。この他の遺物として、2 号住居址を特徴づける土師器楕円形土器、1 号と 14 号址から須恵器壺形土器、1・2 号址に鉄鎌が、その他土製紡錘車、金環が出土している。

土師器坏形土器 C, D 類と同鷹形土器 b 類、更に高台付の須恵器坏形土器が伴出することは、概ね所謂真間期の諸要素と共通する。しかし、真間式土器については、その型式名提唱以来、種々の議論が重ねられてきたようであるが、未だ判然としないものを感じる。これは筆者の不勉強も災いしているものであろうが、例えば真間式土器は広範圍に分布が認められるものではなく、規定された地域の特性にしか過ぎないといったことが人口に論及されることもあるし、どのような段階を踏

んで国分式土器に移行していくのか必ずしも明確になったとはいえない。

八王子市中田遺跡の真間式土器について、調査者服部敬史氏は「彫形土器については同一型式とみとめられるにも拘わらず伴出する彫形土器が異なる一群を分析することができた」とし、彫形土器の変化によって真間期を I 類、II 類に分類している。つまり II 類ではあきらかにロクロ成形のなされた平底盤状の彫形土器メルクマールとし、それに対して I 類では、内曲した扁平な彫形土器を標式として差支えないとする。これに則り、本類型に含まれる C、D 類の土師器彫形土器に立返ってみれば、ロクロ成形の痕跡は全く認められない。すると、本類型は中田遺跡における真間 I 類に近似するようになる。¹⁹

しかし、菊島美夫氏は山梨県における晩期の土師器を二大別され、晩期 I を南関東編年でいう真間式土器であるとし、更に晩期 I を二式に分類した上で、晩期 I - 1 式に含まれる彫形土器の整形にロクロの使用を指摘されている。これはロクロ成形とは記されてはいないが、ロクロ整形の存在は土師器の製作におけるロクロ使用を当然想起させるものとなる。とすれば、本類型の位置はすこぶるあいまいになってくる。

また高橋一夫氏は、埼玉県における「国分期土器の細分・編年試論」において、真間式土器と国分式土器を区分する観点として、彫形土器における横へら削りの出現、台付蓋の出現、大形瓶の消滅、平底盆の出現を挙げておられる。埼玉県と本県の地域的な違いもあるが、これらの観点からは本類型に含まれる土器群の様相は未だ大部かけ離れている。要するに、通説に従い真間式土器の年代を七世紀終末から八世紀代とすれば、本類型はその前半の段階に位置づけられる。つまり真間期でも前半の段階にあたると思われる。

本県における本類型類似資料の報告は数少ないが、上敷遺跡 B 区 1 - B 号、1 - D 号住居跡が真間 I 式期に、佐野市堀米遺跡 10 号、14 号住居跡が奈良時代に比定されている。その他、那須郡黒羽町西郷中学校保管の土師器の中に本遺跡の C 類の土師器彫形土器に類似するものの報告があるが、これは出土した構造は不明である。これらの他本県においては、本類型類似の資料の報告はない。つまり本県における真間期の検討は、もう少し資料の増加を待たなければならないのである。

(2) 第 IV 類型

土師器彫形土器 c、d 類、須恵器彫形土器が伴出することが多く、土師器彫形土器の出土は見られなかった。北地区 4、6、10、11、12、16、19、20 号住居址、南地区 1 号住居址出土遺物群がこれに含まれる。北地区 9、13 号住居址も遺物の出土はなかったが、住居址の形態・位置からみて本類型に含まれると考えられる。これら以外の遺物として須恵器彫形土器（北地区 6、19 号）、須恵器蓋（北地区 6 号、南地区 1 号）、鉄鎌等の鉄製品（北地区 6、11 号、南地区 1 号）、砥石等の出土を見る。

これらの土器群の様相は所謂国分期としてとらえることが可能だが、最近国分期について、該期の大規模な発掘調査の増大につれて、詳細な研究が推し進められ地域性を重視した土器の細分が行なわれている。しかし、瑞穂野遺跡において調査された該期に位置づけられる住居址数は 11 号と少なく、本遺跡の広がりからすればほんの一握りに過ぎない。よってここでは無理な細分は行なわず、本類型が國分期の中でどのへんに位置づけられるかを考えてみることにした。

まず須恵器彫形土器についてみると、総数 32 個体分（但し本類型に含まれる住居址より出土したもののは 29 個体分）検出されているが、先述通り土師器彫形土器は全く見当らない。このうち粘土塊より切り離し痕が判明するものは 13 個体分（高台付 1 個あり）で、他はみな底部面はへら削り調

整されている。これらにはへら切りによるもの10個体分、糸切りによったもの3個体分で、資料数は少ないながらもへら切りによる壺形土器の量的な多さを指摘できるものである。しかしこの糸切りによる壺形土器は3個とも外縁部に回転へら削りされている。次にこれらと他の遺物との伴出についてみると、北地区6号址において6個体分の土師器壺形土器c類とへら切り壺6個体分、北地区19号址においては高台が付されているが、へら切りの後に全面調整されたものと土師器c類の壺形土器が出土している。更にc類の壺形土器は北地区4号址においてd類の壺形土器と、南地区1号址においては糸切りの須恵器壺形土器とともに出土している。結局、量的に遺物数は充分ではないので確実性に乏しいが、本類型の土器群には、c、d類の土師器壺形土器、へら切り、糸切りの壺形土器の4種ともに伴出する可能性が指摘できる。

真岡市井頭遺跡におけるII類の壺形土器は、本遺跡におけるc類の壺形土器と、また同様にIII類のものはd類のそれと類似性の極めて高いことは先述の通りである。そして井頭遺跡の調査報告においては、II類の壺形土器とへら切り壺を中心として、これらと伴出関係にある土器群の様相から、該遺跡の造構が先行的な要素を持つものと後出的な要素を持つものに細分できる可能性を指摘されており、III類の壺形土器はその後出的な要素の中に含めることができるとされている。これに則り本類型の土器群についてみれば、その後出的要素を持つものとして把握できるものと思う。更に該遺跡の年代観として、東国における糸切り底の出現時期を考究し、井頭集落の形成過程の中心を8世紀末期に置き、その終末を9世紀に入る平安初期に及ぶものとされる。

しかし、神奈川県厚木市鳩尾遺跡出土の歴史時代の土師器の分析において、三つの系統が指摘されている。この中で注意すべきなのは、武藏型と仮称された一群である。そして武藏型の壺は出土量は少ないが、ほぼどの時期にも存在するとし、これは移入品として考えられている。この武藏型の壺は本類型におけるd類の壺形土器とはほぼ類似するものと思う。つまり井頭遺跡III類の壺形土器も、「武藏型」の壺としてとらえられるのではないか。もし「下野」においても、この武藏型の壺が移入品とすれば、その移入時期を問題としなければならないであろう。しかし、「下野」と「相模」の地域的な差異もあるうが、鳩尾遺跡において武藏型の壺はほぼどの時期にも存在するとされることは、この壺についてはもう少しの検討を加えなければ、この壺の存在をもって、これが伴う造構の時期を論ずることには未だ時期尚早と言わねばならない。

よって今のところ本類型の位置については、より詳細な分析のなされている須恵器壺形土器の検討に立ち返らなければならない。

埼玉県における須恵器壺形土器の細分(編年)において、壺が粘土塊より切り離されて後の底部調整は時期が下るとともに簡略化が行なわれるという観点と実際の窯址における様相から、全面回転へら削り、全面及び外縁部の手持ちのへら削り、外縁部の回転へら削り、調整なしという流れがほぼつかめるとされ、糸切り後の外縁部の回転へら削りを持つ壺形土器の出現時期は9世紀前半とされている。この調整の施された須恵器壺形土器は、本類型に含まれる糸切り壺なのである。また本類型に含まれるへら切り壺は、糸切り壺よりも數的には多い。回転へら切り技法は粘土塊よりの切り離し技法の中では最も古い技法であり、埼玉県においては、真間期終末と考えられる時期の遺跡より検出されている。

次に本類型に含まれる土器群の伴う住居址についてみると、平面形が長方形を呈するものと、正方形を呈するものの二種あることが注意される。つまり北地区6、19号住居址、南地区1号住居址は後者であり、他は前者であった。長方形の住居址は造構の項で触れられると思うが、その内部構造に特異な点が見受けられる。長方形と正方形の差は時間差によるものであるか、或いは住居址の

性格の違いによるものであるかは不明であるが、出土する遺物に多少の相違があった。まず遺物の量と種類は正方形住居址がより多くなっていること、またd類の圓形土器、台付圓形土器の出土は長方形住居址がより多くなっていることである。これは或いは本類型の細分の可能性を示唆するものかもしれない。

(5) 第V類型

土師器壺形土器E類、同圓形土器d類の伴出が窺えるものであり、南地区6~9号住居址出土遺物群がこれに含まれる。これらの他に瓦石一点の出土がある。

第IV類型と異なる点は須恵器に変わる土師器壺形土器E類の存在にあるが、遺物数量も検出住居址数も少なく、本類型が果たして一般的な様相としてとらえられるか否かは不確実と言わなければならぬ。ただ土師器壺形土器は糸切り痕のみが残されているものが多く、口径に比して底径の小さいこと（口径>底径×2のものが多い²⁷）、口唇部にやや外反を見せるものが多いことなどより後出的な様相を感じるのである。ちなみに第IV類型に含まれる須恵器壺形土器の底径と口径の比は二分の一以上のものが多い。またd類の圓形土器は先述のように「武藏型」の一群に含まれ、武藏を中心にして分布するといわれる。よってこれについて埼玉県における国分期圓形土器の細分(編年)²⁸についてみると、口縁部が「コ」の字状を呈するものと「く」の字状に曲がるものは共存しながらも、前者は後者からやや遅れて派生するものらしい。本類型のd類の圓形土器には口縁部が「コ」の字状を呈するものがあり、第IV類型のものは全て「く」の字状に曲がるものであった。しかし、本類型の土器の少なさは、第IV類型より本類型の後出性を明確にし得ないが、その可能性は呈示できる。

文 献

- (1)岡田淳子、服部敬史他、「八王子中田遺跡」（資料編III），八王子中田遺跡調査会，1968
上記所収「第3章、土師器の編年に関する試論、鬼高II類土器」に「器形の中でII類と異なる点は、高壺形土器がみられなくなること……」とある。
- (2)註(1)前掲書でいう鬼高II類～III類
杉原莊介、大塚初重編、「土師式土器集成本編3」（後期），1973でいう鬼高II式
- (3)C類は、後述するが、真間期独自にみられる壺形土器に合致する。
- (4)大和久震平、「上蒲生遺跡」，日産自動車株式会社，1969
- (5)大金宣亮、橋本澄朗、川原由典、二宮淳子、「井頭遺跡」栃木県教委，1974，「第4章第2節3 古墳時代後期」
- (6)辰巳四郎、大和久震平、堀静夫、中村紀男、「杏林製薬工場内遺跡発掘調査報告書」，野木町教委，1967
- (7)辰巳四郎、大川清、大和久震平他、「佐野市工業団地内遺跡発掘調査報告書」栃木県教委，1970
- (8)倉田芳郎他；「觀音堂遺跡」東北縱貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書所収，栃木県教委，1972
- (9)柴田武志、矢島俊雄他；「棚米遺跡発掘調査報告書」，佐野市教委，1976
- 註(5)前掲書
- 註(1)本誌、「II. 遺跡の立地」参照
- 註(5)岩崎卓也；「真間式土器小考」，大塚考古，1967 杉原莊介、大塚初重編；「土師式土器集成本編4」（晚期I），東京堂，1973，等に呈示された諸特徴を参照した。

- 03^{註5)}前掲書において、川原氏が「奈良時代初期から平安時代初期にかけての所産と考えられる住居址、掘立柱建物遺構の柱穴から出土しており、この時期になって鉄製品の普及が増大していくのではないかと考える」と執筆されている。
- 04^{註6)}前掲書
- 05竹深謙、石川均、山ノ井清人; 「上敷遺跡」栃木県教委、1977
- 06岩崎卓也; 「真圓式土器小考」、大塚考古第8号、1967
- 07^{註7)}前掲書
- 08菊島美夫; 「山梨県における晩期土師式土器編年試論」、甲斐考古12の2、山梨考古学会、1975
- 09高橋一夫; 「国分期土器の細分、編年試論」、埼玉考古第13、14号、埼玉考古学会、1975
- 10^{註8)}前掲書
- 11^{註9)}前掲書
- 12青木義裕; 「那須郡黒羽町両郷中学校保管の土師器」、栃木考古学研究No.9、1964
- 13大金宣亮; 「井頭遺跡の編年的位置と性格」、井頭所収
上記において、井頭遺跡の検出造形におけるII類の型を一般的要素とされ、これとI類の型（真圓的要素の強い型とされる）、丸底坏との伴出を先行的要素として、また糸切り底の坏の伴出、須恵器量の増加と器種の複雑化を後出的要素として把握される可能性を指摘され、この後出的要素の中にIII類の型が含められるとされている。
- 14河野喜映; 「厚木市鳶尾遺跡出土の土器編年試論」、神奈川考古第1号、1976
- 15^{註10)}前掲書
- 16同前
- 17久保哲三、小出義治; 「秦野下大槻遺跡」秦野の文化財第9・10集、1974
上記所収の「V後論、集落址出土の土器について」において、小出氏は、検出された須恵器坏の底部に糸切り痕の残るものは、口径>底径×2、口径≈底径×2、口径<底径×2の順に新しくなることを造形の前後関係より実証されている。第V類型における坏は土師器ではあるが、この流れがクロ技術の向上を示すと考えるならば、本類型の坏の計測値はその後出性を表わすものではあるまいか。
- 18^{註11)}前掲書
- 19^{註12)}前掲書

表-3 土師器、坏形土器、甕影土器の類型個数

北地区

住居跡 番号	坏 型 土 器					甕 形 土 器				備 (主として伴出遺物)	考	
	A	B	C	D	E	塊	a	b	c	d		
1			4	1			1				• 土師坏平底、鉄鎌1点 • 須恵壺頸部、土製紡錘車	
2		1	4	1		12	2				• 金環3点、鉄鎌1点	
3	4	2									• 須恵坏充填土より出土	
4								1	2		• 甕Cは木葉底 • 磁石、紡錘車	
5	2	5				4					• 甕1点	
6							6				• 須恵壺2点、同壺2点 • 鉄製品1点	
7		1				2					• 甕1点に木葉底 • 短削甕、甕	
8		1		1							• 甕	
9											• 遺物なし	
10							1	2				
11									1?		• 須恵甕、鉄製品1点	
12							1				• コップ形の土師底	
13											• 遺物なし	
14		1	1								• 須恵壺、口縁部と体部の境に一溝ある土師坏	
15	1	3	1			1	1				• 須恵甕 • 土師甕2点	
16								1	2		• 磁石1点	
17			1				1					
18		1	1				1				• 鉢状の土師甕	
19								1			• 小形土師甕、須恵壺	
20												
21		1					1?					

以上、古墳時代後半以降の土器群について時間区分を行ったわけであるが、それを表にすると下のようになる。しかし、これはもとより充分なものではない。とくにII類型・IV類型・V類型については更なる検討を要すると考える。

類型	然出土器	住居址番号	柄木塗における然出土器の類似する遺跡	時期
I	土師器杯A類 同窓a類 (須恵器の伴出なし)	北地区3, 5, 7, 24号	上横生遺跡 2号住居址 鶴谷堂遺跡 15・21号住居址 堀木遺跡 13号住居址 井頭遺跡 5号20号住居址	鬼高田第
II	土師器杯A・B・C類 (B類が多い) 同窓b類 (須恵器の伴出少)	北地区15, 18, 22, 25号	堀木遺跡 8号住居址 上敷遺跡 B区7-A号住居址	鬼高田第-近畿I期
III	土師器杯C・D類 同窓b類 (須恵器の伴出少)	北地区1, 2, 8, 14?17, 21?号—	上敷遺跡 B区1-B, 1-D号住居址 堀木遺跡 10, 14号住居址	近畿I期
IV	土師器窓c, d類 須恵器杯ヘラ切り多量 (土師器の伴出なし)	北地区4, 6, 10, 11, 12, 15, 20, 9 ?, 13?号 南地区1号	井頭遺跡 佐野市工製地内遺跡 堀木遺跡 上敷遺跡 等	区分
V	土師器杯E類 同窓d類	南地区6~9号	検討を要する	区分未定

住居址番号	环形土器					壺形土器				備考 (主として伴出遺物)	
	A	B	C	D	E	碗	a	b	c	d	
22	1	2				1		1			• ラッパ状に開く土師壺 • 鉄鏃
23											• 遺物なし
24	1	2					2				• 小形土師壺、黒曜石塊
25	2	4	1								• 土師壺底部系切状
26	1						1?				• 壺は胸部のみ • 土製幼獣車

南地区

1						1		1	• 須恵蓋、砥石、鉄鏃
2									• 弥生
3									• 鬼高Ⅰ期
4									• 遺物なし
5									• 弥生
6			3						• 壺底は系切り、箆削り、 一つは墨書き
7				1				2	• 壺底は系切り
8				2				1	• 壺底は系切り、箆削り、 一つは墨書き、砥石
9									• 遺物なし

表-4 須恵器環形土器底部による類型個数

住居跡番号	ヘラ切り		糸切り後同縫調整	ヘラ削り調整		高台付	備考
	無調整	周縫部調整		回転	手持ち		
北-1				1?		1	• 壺C, D, 壺b • 高台付はヘラ削り
北-2						1	• 壺B, C, D, 壺b • 高台付はヘラ削り
北-3		1			1		• 二種とも光墳土出土
北-6	4	2				2	• 壺C • 高台付はヘラ削り
北-8						1	• 壺B, D • ヘラ削り
北-10				1			光墳土出土 *
北-11		2	2	1			• 台付壺?
北-16						1	• 壺d, 台付壺 • ヘラ削り
北-19				1		1	• 壺C • 高台付はヘラ切り後調整?
北-20				1			*
北-22					1		• 壺A, B 壺b
北-25				1	1		• 壺A, B, C
南-1			1	1		1	• 壺C, 台付壺 • 高台付はヘラ削り, 灯明皿

* 須恵壺を出土しない住居址については表示しなかった。

造構について

今回の調査においては北地区、南地区合わせて35個の堅穴住居址が検出された。その中で2個の弥生期の住居址の検出は栃木県内において数少ない弥生期の住居址のひとつとして貴重な存在であると言えよう。2個の住居址は共に南区で発見されたもので、南区2号南区5号住居址である。2つの住居址とともに他の造構と切り合っているために、全容を確認できなかったが、プランは不整規丸長方形を呈する。さらに両者は住居中央に施設をもたない炉を持ちこの炉を中心に4本の柱穴を確認した。

主軸方位

住居址の主軸方位は表-2 bに示したが、土器による5つの時期区分に従い主軸方位との関係について若干述べてみると、第I類型の土器を出土する住居址はすべてその主軸方位はN-6°-W(北区5号住居址)からH-21°-W(北区3号住居环)の15°の範囲内で西へ偏在する。第II類型の住居环については北区25号住居地を除くとN-5°-E(北区22号住居址)からN-15°-E(北区15号住居址)の10°の範囲内で東へ偏在する。以上古墳時代後半と考えられる住居址は主軸方位が西方向から東方向に変化していったと考えられる。しかし住居址数が少いために信頼できるデータとはなりえないことを付記しておく。第III類型の住居址はN-19°-W(北区2号住居址)からN-21°-E(北区8号住居址)まで40°の範囲内で西から東へとまらまらの方位を示す。第IV類型の住居址は北区13号住居址を除きすべてNからN-22°-E(北区16号住居址)と22°の範囲で真北か東の方向を向く。約7割の住居址が真北を向いていることになる。第V類型の住居址は西の方向を向く傾向にありそうだが3例では何も言えない。以上主軸方位によって住居址の時間的差異が判明できるものと期待したが、時間的差異との相関関係はうすいものであった。このことは主軸方位が自然的条件に負うことろが大であったためであろうと考える。

カマドの構築位置(表-2-a)

瑞穂野遺跡においてカマドを有する住居址はすべて北壁に構築されている。しかし北壁に構築されたカマドも北壁中央、中央より西寄り、中央より東寄りの3つに分けることが可能であった。中央より西寄りに構築された住居址は3例で、中央と中央東寄りで約半数に分けあうことになり瑞穂野遺跡においては北壁中央、北壁中央東寄りが一船的傾向であると言うことができる。

住居址の規模と形態(表-2 c, d)

古墳時代後期後半と考えられる第I類型の土器を出土する住居址、以下第I類型の住居址は表-2-cのようにほぼ方形を呈する。面積50m²をこえる北区3号5号住居址のような瑞穂野遺跡での最大クラスの住居址がある。第II類型の住居址もほぼ方形を呈し、面積は20m²から30m²前後の広さ

となる。第III類型の住居址となるとやはりプランはほぼ方形を呈するが、面積は10m²前後から最大規模を有する北区2号の64.8m²まで55m²の範囲で存在する。第IV類型になると、南区1号住居址、北区6号住居址の2つを除くと、すべて面積が20m²未満と小形となる傾向がうかがうる。さらに北区9号、19号住居址以外はすべて東西に長い長方形となることも特色のひとつである。これら小形(15m²~20m²)で長方形の住居址はの大半がカマドを北壁中央からやや東寄りの所に構築している。

	プラン	各辺の長さ	面積	E軸方位	カマド 標準位置	時間	備考
N 3	長方形	6.9, 6.9, 7.3, 7.3	50.4m ²	N-21°-W	N	I	
5	万形	7.0, 7.3, 7.1, 6.9	51.1m ²	N-6°-W	N	I	
7	不整圓丸方形	2.6, 2.3, 2.6, 2.3	6.7m ²	N-20°-W	N	I	
24	不整圓丸方形	4.2, 4.2, 4.2, 4.6	18.5m ²	N-90°-W	NE	I	
15	不整圓丸方形	5.6, 5.5, 5.3, 5.2	29.1m ²	N-15°-E	NW	II	
18	不整圓丸方形	4.4, 4.6, 4.3, 4	19.0m ²	N-11°-E	N	II	
22	不整圓丸方形	5.3, 5.0, 4.9, 4.9	25.2m ²	N-5°-E	N	II	
25	不整丸長示方形	5.2, 5.7, 5.8, 5.1	32.4m ²	N-23°-W	NW	II	
1	不整圓丸方形	5, 4.5, 4.9, 5.1	23.8m ²	N-9°-E	NE	III	
2	不整圓丸方形	8.5, 7.8, 7.9, 8.0	64.8m ²	N-19°-W	N	III	
8	不整圓丸方形	3.8, 3.9, 3.9, 3.9	14.4m ²	N-21°-E	N	III	
17	不整圓丸方形	5.9, 6.0, 5.9, 6.1	35.7m ²	N-10°-E	NE	III	
14	圓丸長方形	5.1, 5.0, 5.4, 5.3	26.5m ²	N-7°-W	N	III	
21	不整圓丸方形	2.9, 3, 3.2, 3.5	11.9m ²	N-15°-W	N	III	
4	不整長方形	3.1, 3.2, 4.8, 4.5	14.6m ²	N	NE	IV	
5	不整圓丸方形	5.0, 5.3, 5.3, 5.2	28.1m ²	N	NE	IV	
10	圓丸長方形	3.4, 3.3, 5.0, 5.0	16.8m ²	N-14°-E	N	IV	
11	不整圓丸長方形	3.4, 3.0, 4.0, 3.9	12.6m ²	N	NE	IV	
12	圓丸長方形	3.8, 3.8, 4.8, 4.6	17.9m ²	N-7°-E	NE	IV	
16	不整圓丸長方形	3.6, 3.8, 4.4, 4.3	16.1m ²	N-22°-E	NE	IV	
19	不整圓丸方形	3.3, 3.1, 3.3, 3.1	9.6m ²	N	NE	IV	
20	不整圓丸長方形	3.6, 3.6, 4.4, 4.5	16.2m ²	N	NE	IV	
9	不整圓丸方形	2.4, 2.3, 2.5, 2.7	5.8m ²	N	N	IV	
13	不整圓丸長方形	3.6, 3.5, 5.4, 5.5	19.8m ²	N-6°-W	NW	IV	
S 1	圓丸方形	5.4, 5.5, 5.5, 5.4	29.7m ²	N	NE	IV	
7	不整圓丸長方形	3.1, 2.9, 3.2, 3.4	9.6m ²	N	NE	V	
8	不整方形	4.6, 4.2, 4.4, 4.4	18.5m ²	N-7°-W	NE	V	
9	不整圓丸方形	4.2, 4.2, 3.9, 4.2	17.0m ²	N-15°-W	N	V	

表-2-a

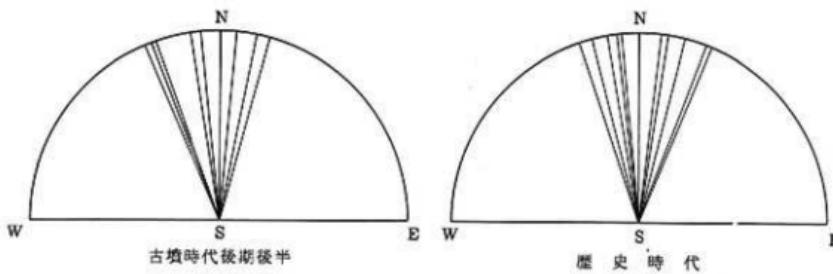


表-2-b

(III・IV・V類型)

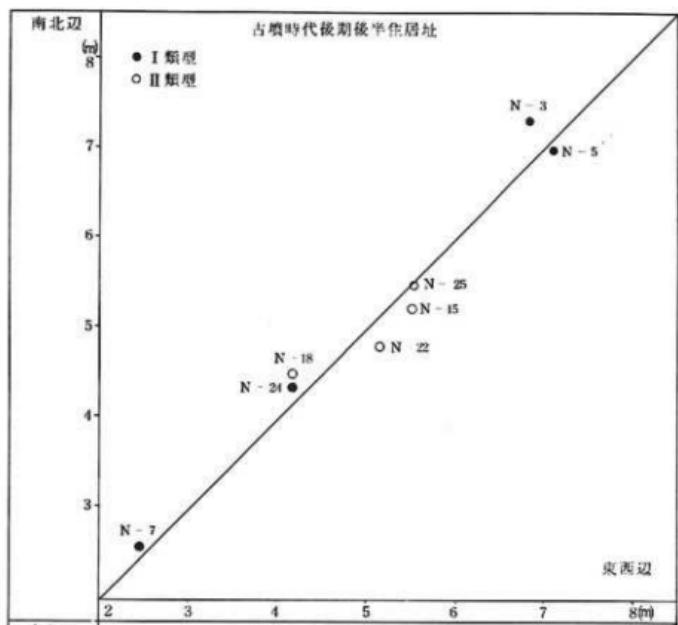


表-2-c

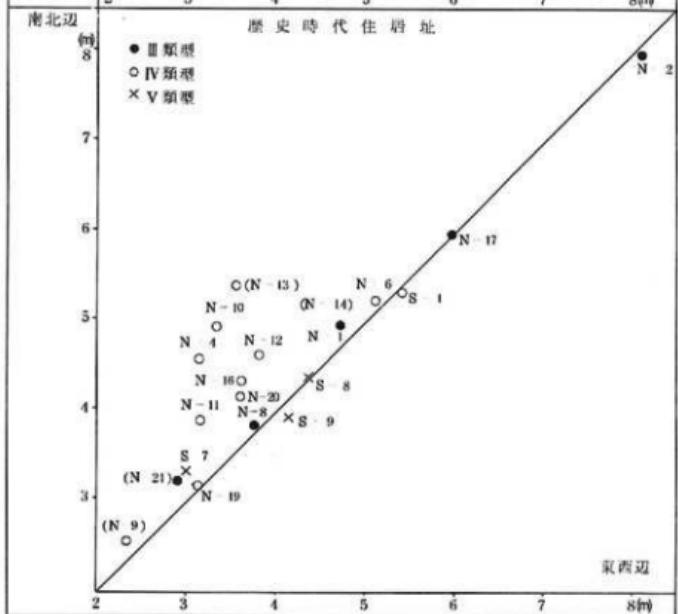


表-2-d

図 目 次

図-1	瑞穂野遺跡付近の地形図 (1 : 4,000)	77
図-2	北地区発掘区域図	78
図-3	南地区発掘区域図	78
図-4	瑞穂野遺跡周辺の遺跡分布図 (1 : 50,000)	79
図-5	北地区1号住居址実測図 (1 : 60)	80
図-6	北地区1号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	80
図-7	" (")	81
図-8	北地区2号住居址実測図 (1 : 60)	82
図-9	北地区2号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	83
図-10	" (")	84
図-11	北地区3号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	84
図-12	北地区3号住居址実測図 (1 : 60)	85
図-13	北地区4号住居址実測図 (1 : 60)	86
図-14	北地区5号住居址実測図 (1 : 60)	87
図-15	北地区4号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	88
図-16	北地区5号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	88
図-17	" (")	89
図-18	北地区6号住居址実測図 (1 : 60)	90
図-19	北地区6号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	91
図-20	" (")	92
図-21	" (")	93
図-22	北地区7号住居址実測図 (1 : 60)	94
図-23	北地区8号住居址実測図 (1 : 60)	94
図-24	北地区7号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	95
図-25	北地区8号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	96
図-26	北地区9号住居址実測図 (1 : 60)	96
図-27	北地区10号住居址実測図 (1 : 60)	97
図-28	北地区10号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	97
図-29	北地区11号住居址実測図 (1 : 60)	98
図-30	北地区12号住居址実測図 (1 : 60)	98
図-31	北地区11号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	99
図-32	北地区12号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	100
図-33	北地区13号住居址実測図 (1 : 60)	100
図-34	北地区14号住居址実測図 (1 : 60)	101
図-35	北地区14号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	101
図-36	北地区15号住居址実測図 (1 : 60)	102
図-37	北地区15号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	103
図-38	北地区16号住居址実測図 (1 : 60)	104
図-39	北地区16号住居カマド実測図 (1 : 20)	104
図-40	北地区16号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	105
図-41	北地区17号住居址実測図 (1 : 60)	106

図-42	北地区17号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	107
図-43	北地区18号住居址実測図 (1 : 60)	107
図-44	北地区18号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	108
図-45	北地区19号住居址実測図 (1 : 60)	108
図-46	北地区19号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	109
図-47	北地区20号住居址実測図 (1 : 60)	110
図-48	北地区20号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	110
図-49	北地区21号住居址実測図 (1 : 60)	110
図-50	北地区21号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	111
図-51	北地区22号住居址実測図 (1 : 60)	111
図-52	北地区22号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	112
図-53	北地区23号住居址実測図 (1 : 60)	113
図-54	北地区24号住居址実測図 (1 : 60)	114
図-55	北地区24号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	115
図-56	北地区25号住居址実測図 (1 : 60)	116
図-57	北地区25号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	117
図-58	北地区26号住居址実測図 (1 : 60)	118
図-59	北地区26号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	118
図-60	北地区井戸跡実測図 (1 : 60)	119
図-61	南地区1号住居址実測図 (1 : 60)	119
図-62	南地区1号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	120
図-63	南地区2号住居址・4号円形有段造構実測図 (1 : 60)	121
図-64	南地区2号住居址出土遺物拓本・実測図	121
図-65	南地区2号住居址出土遺物拓本	122
図-66	南地区4号円形有段構出土遺物実測図 (1 : 3)	122
図-67	" (")	122
図-68	南地区3・4号住居址実測図 (1 : 60)	123
図-69	南地区3号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	123
図-70	南地区5・6号住居址実測図 (1 : 60)	124
図-71	南地区5号住居址出土遺物実測図	125
図-72	南地区6号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	125
図-73	南地区7号住居址実測図 (1 : 60)	126
図-74	南地区7号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	126
図-75	南地区8号住居址実測図 (1 : 60)	127
図-76	南地区8号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	127
図-77	南地区9号住居址実測図 (1 : 60)	128
図-78	南地区1号円形有段造構実測図 (1 : 60)	128
図-79	南地区1号円形有段造構出土遺物実測図 (1 : 3')	129
図-80	南地区2号円形有段造構実測図 (1 : 60)	129
図-81	南地区3号円形有段造構実測図 (1 : 60)	130
図-82	南地区3号円形有段造構出土遺物実測図 (1 : 3)	130
図-83	先土器時代剝片	131
図-84	縄文式土器	131



図1 瑞穂野道路付近の地形図

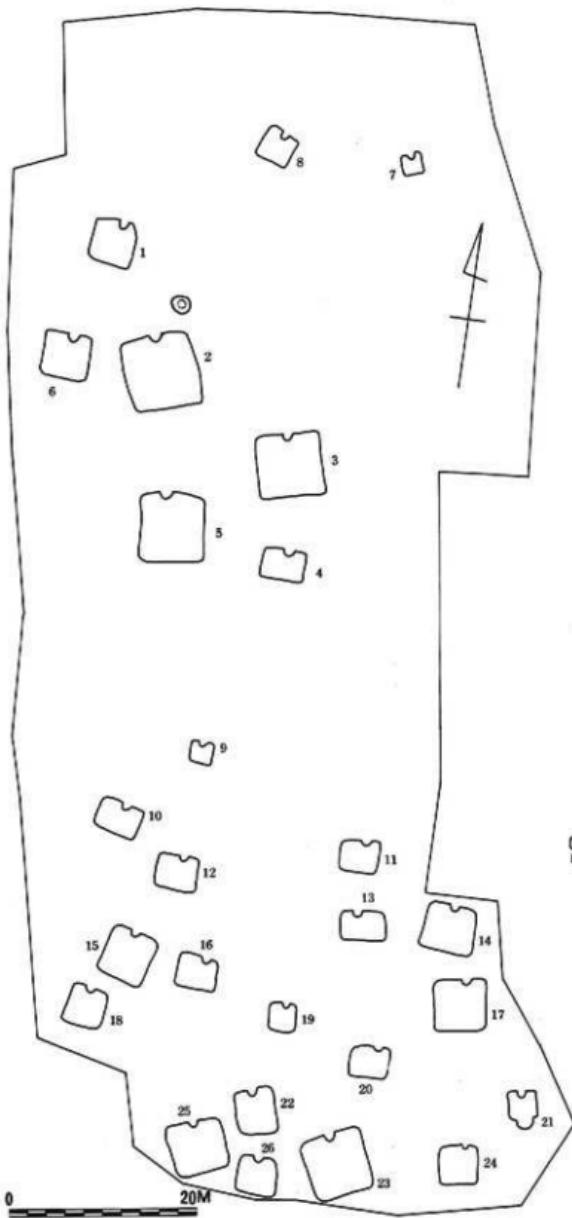


図2 北地区発掘区域図

- ・数字は住居址の番号
- ・円有は円形有段造構

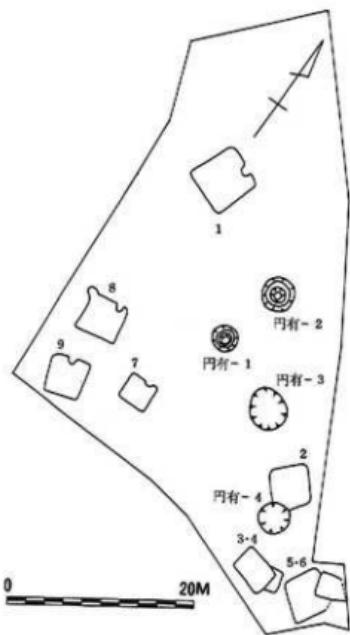


図3 南地区発掘区域図



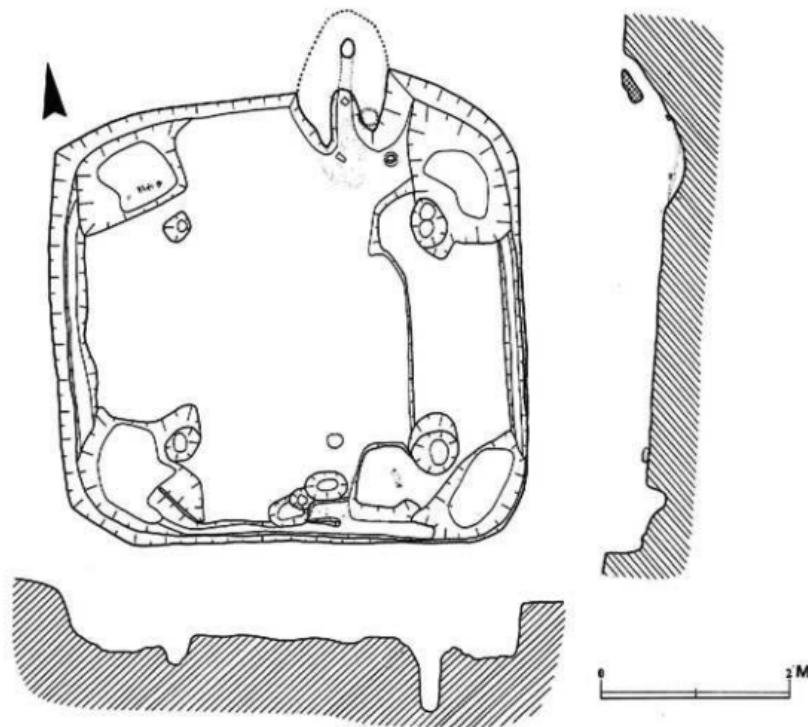


图 5 北地区 1 号住居址

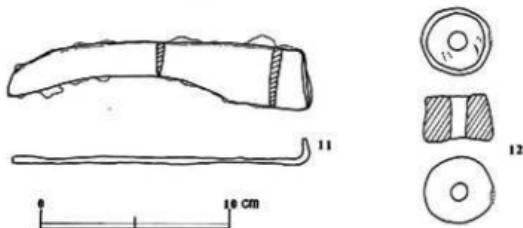
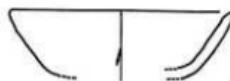
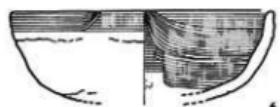
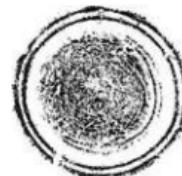
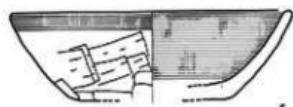
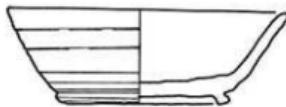
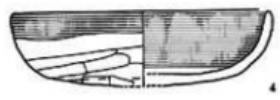
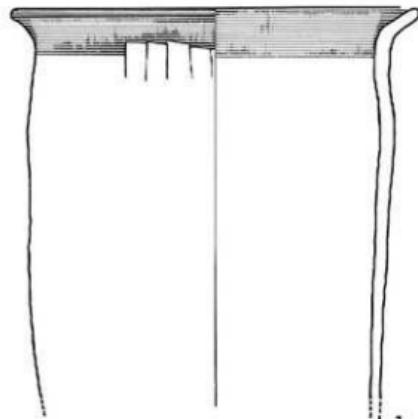
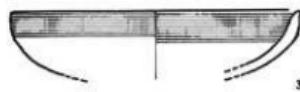
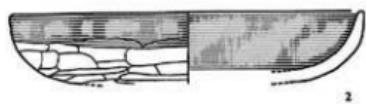
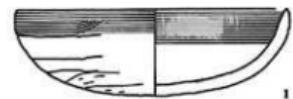


图 6 北地区 1 号住居址出土遗物



18 CM

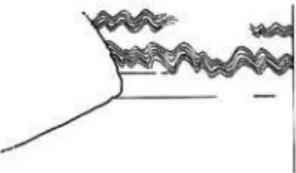


图7 北地区1号住居址出土遗物

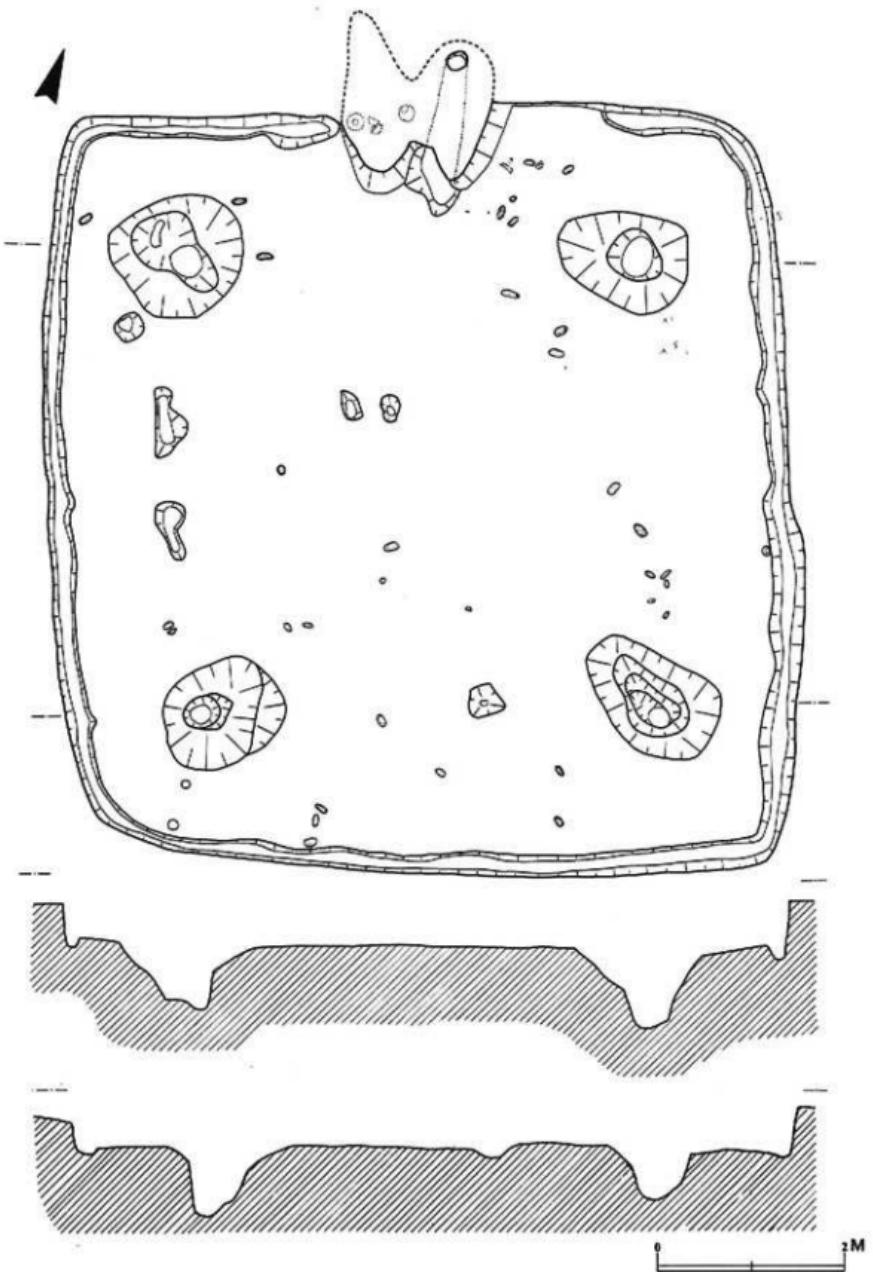


图 8 北地区 2 号住居址

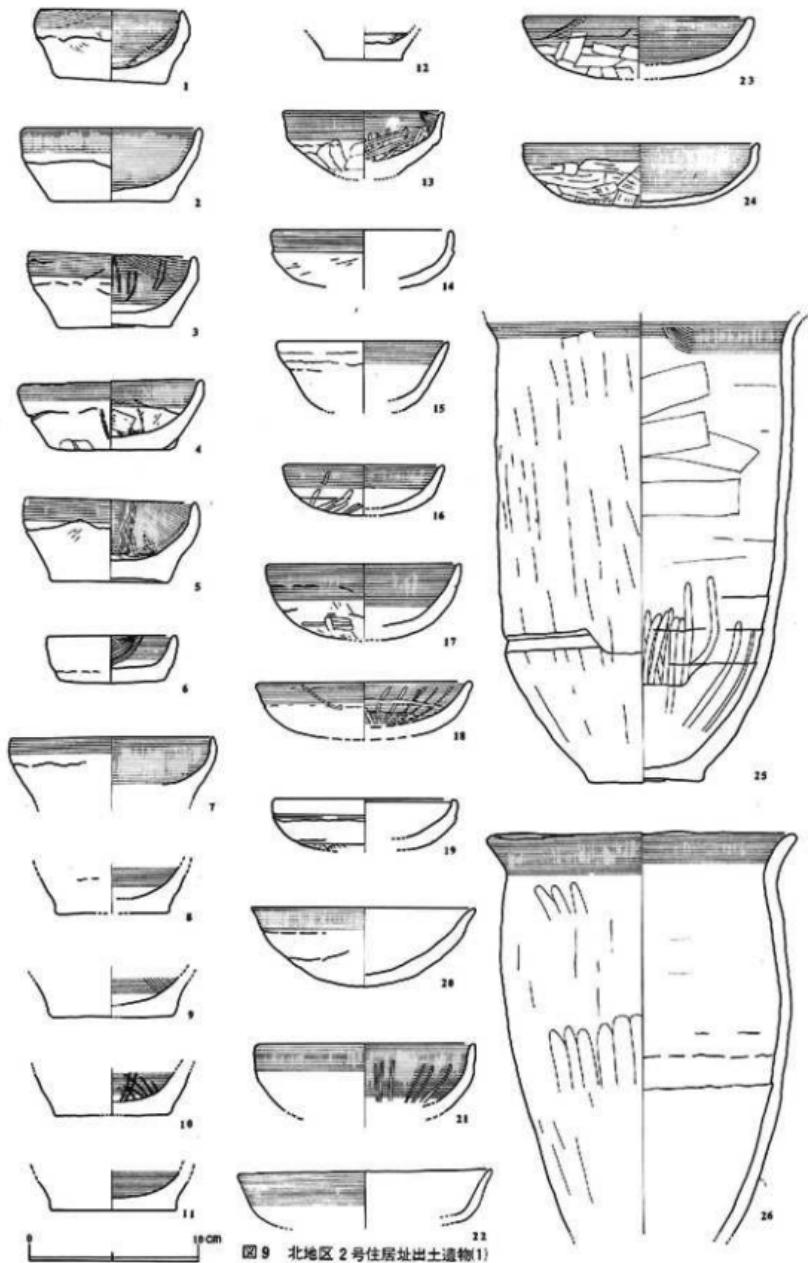


图9 北地区2号住居址出土遗物(1)

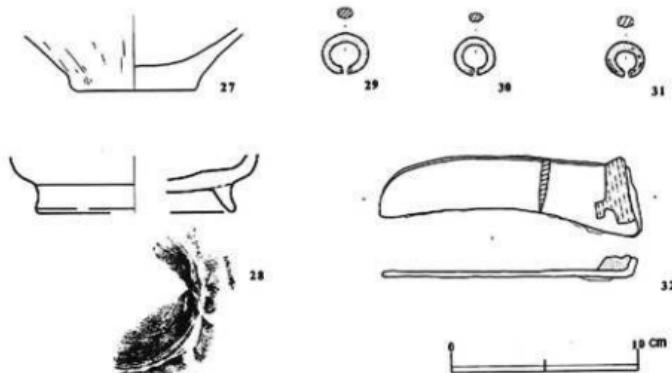


图10 北地区2号住居址出土遗物(2)

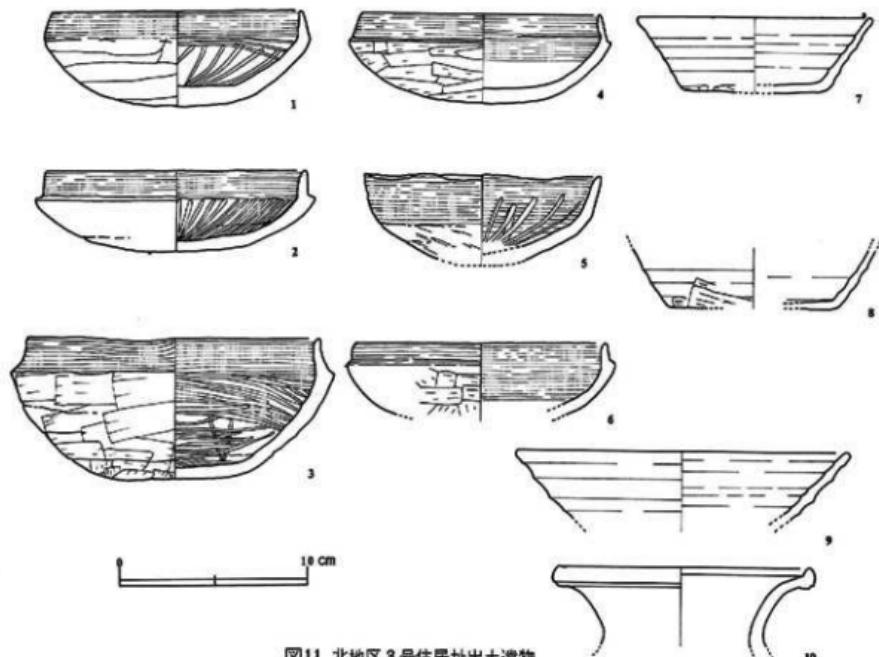


图11 北地区3号住居址出土遗物

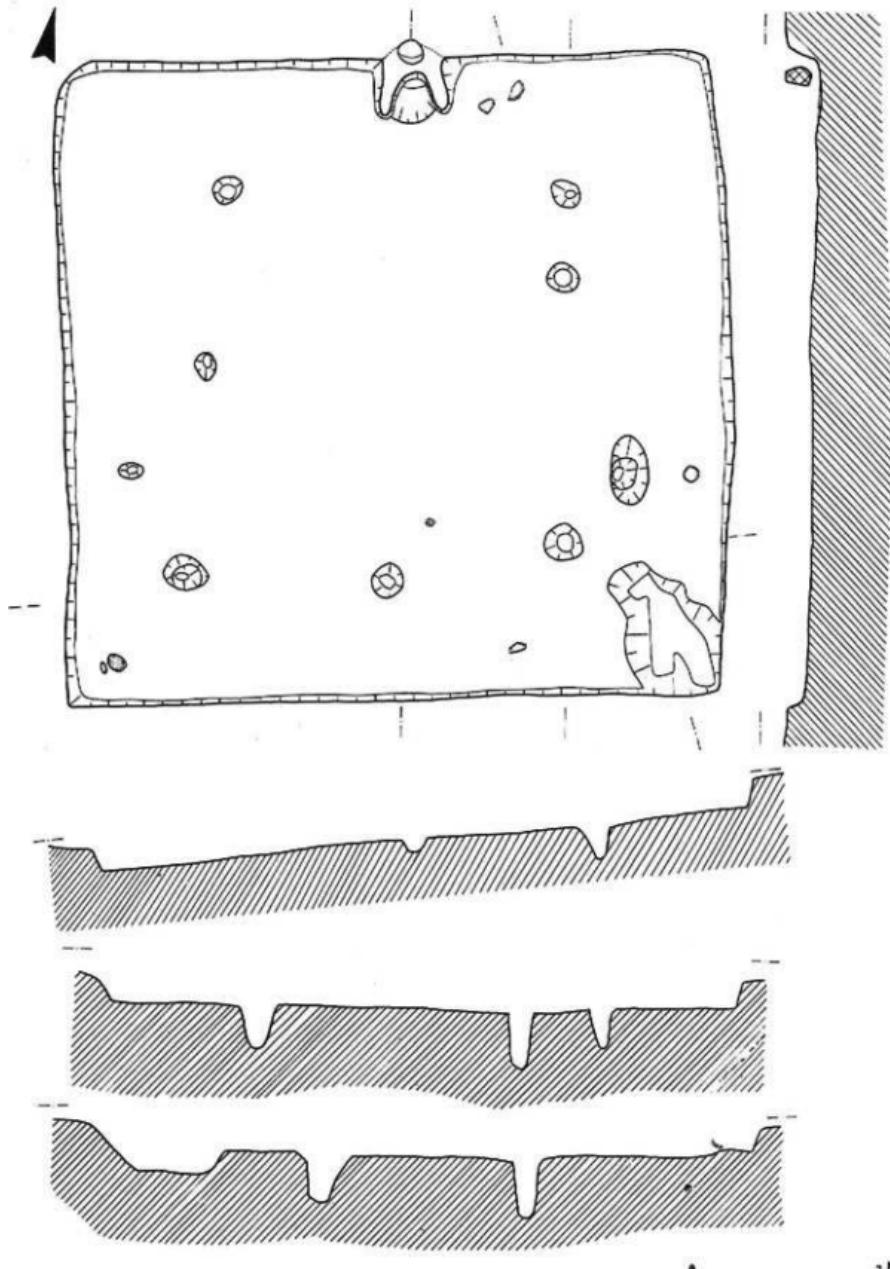


图12 北地区3号住居址

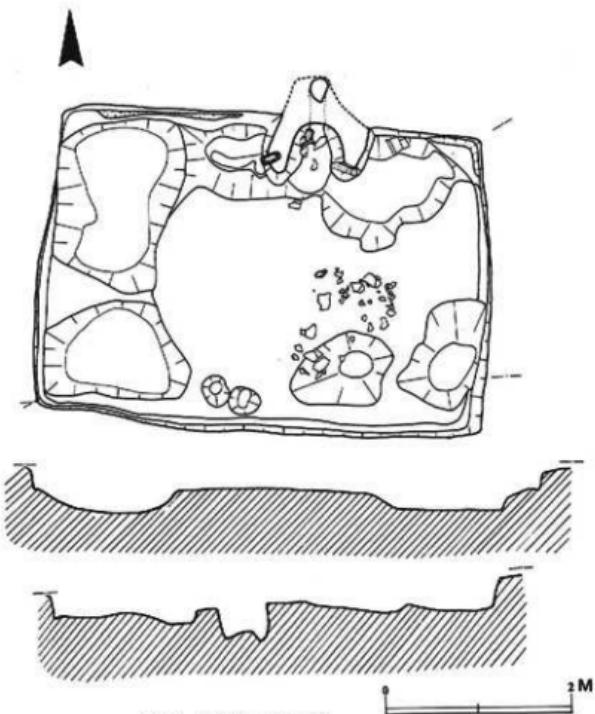


図13 北地区 4号住居址

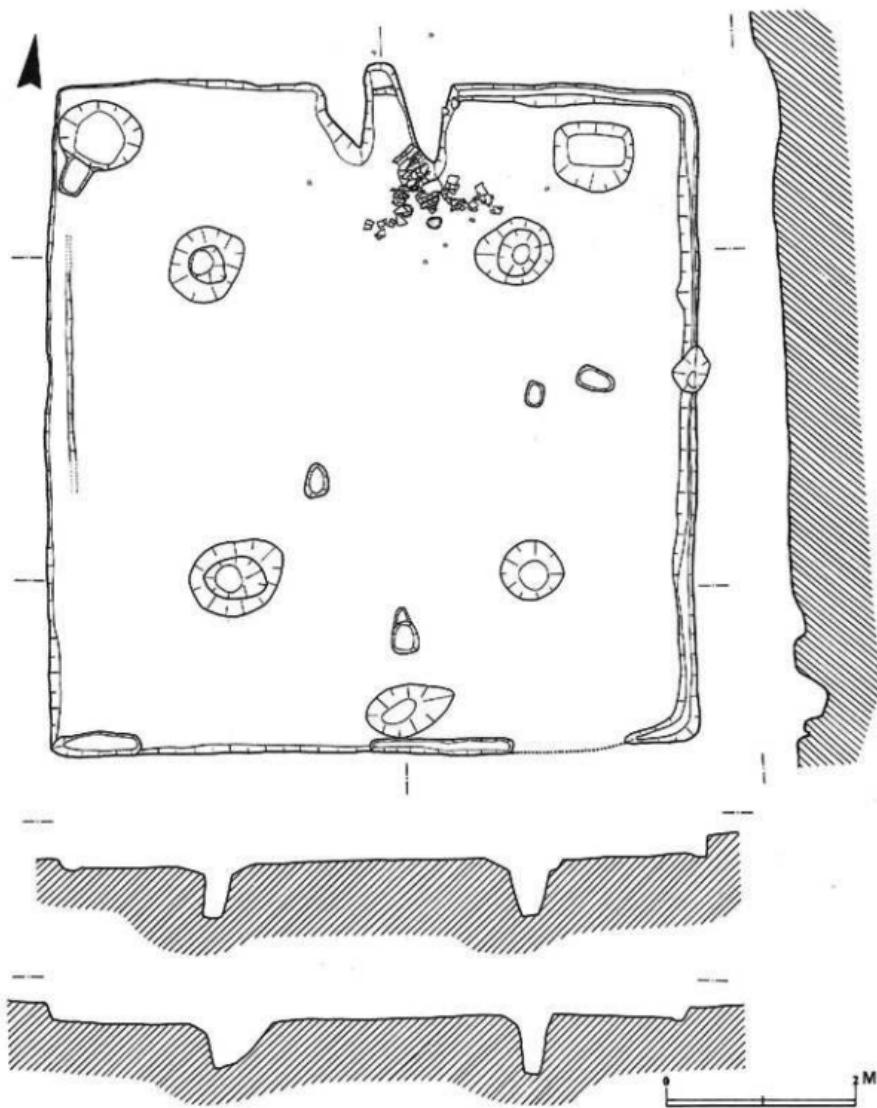


図14 北地区 5号住居址

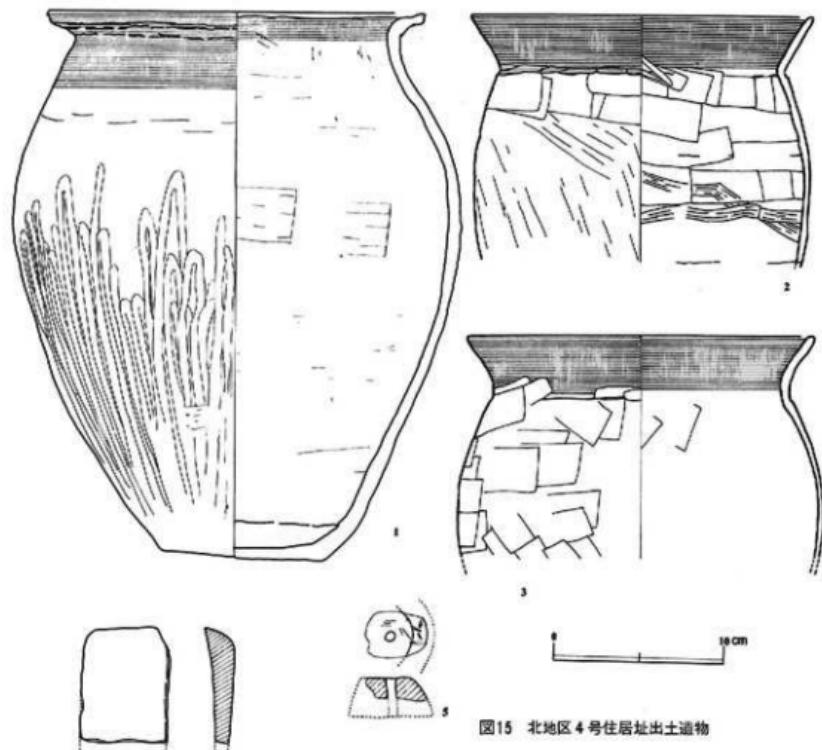


图15 北地区4号住居址出土遗物

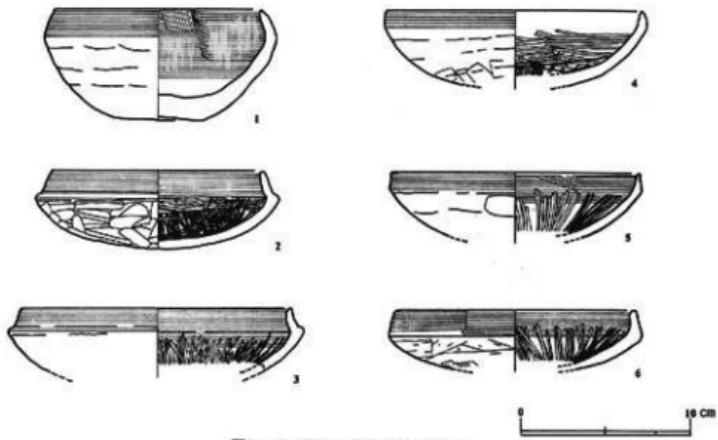


图16 北地区5号住居址出土遗物(1)

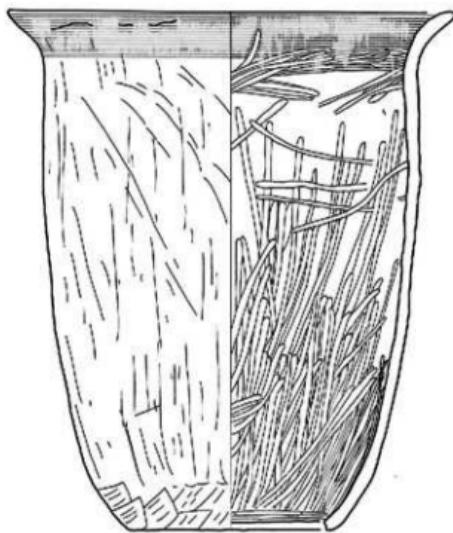
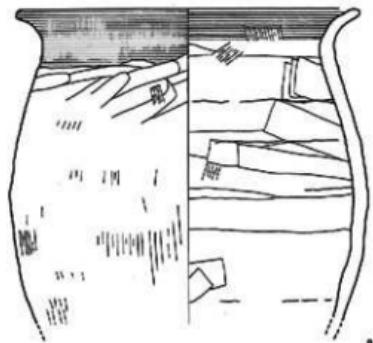
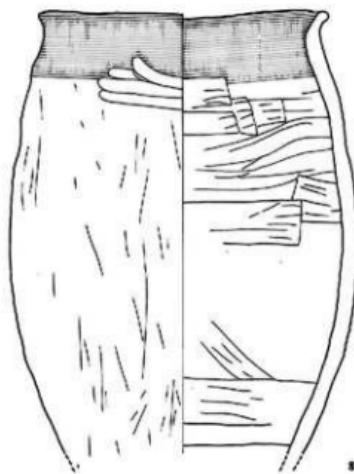
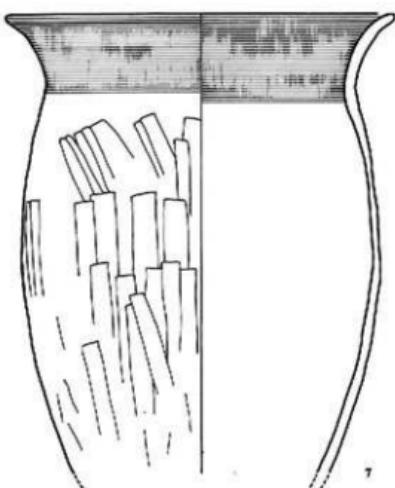


图17 北地区5号住居址出土遗物(2)

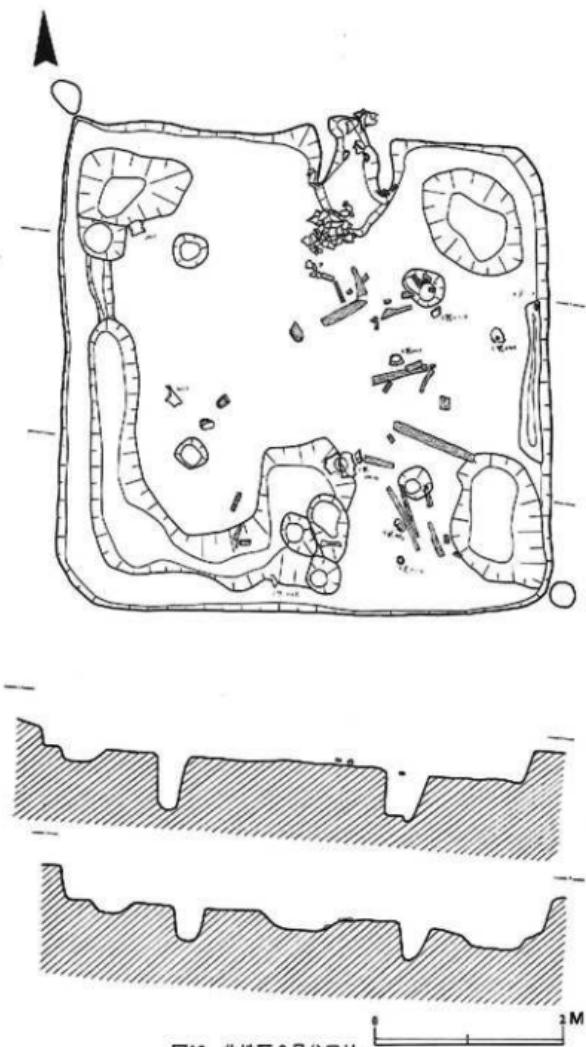


图18 北地区 6号住居址

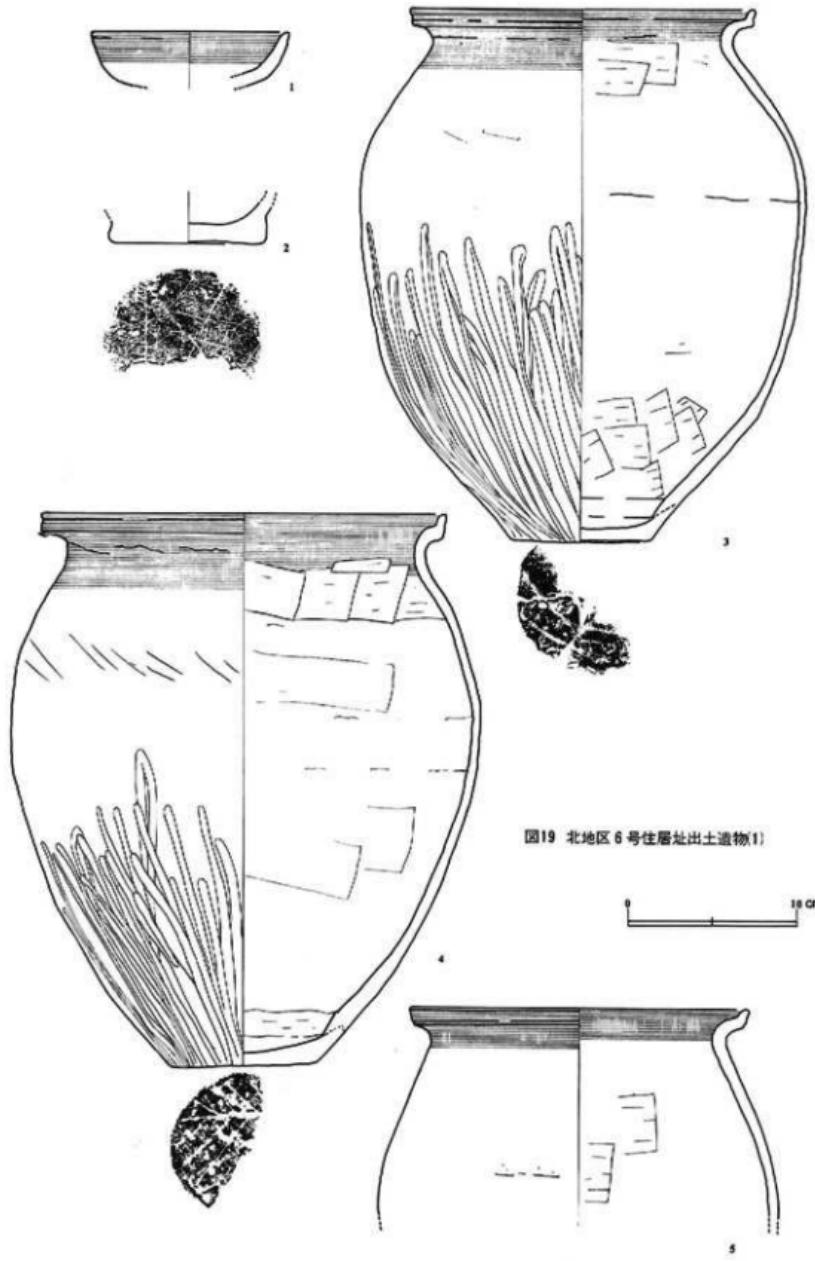


图19 北地区 6号住居址出土遗物(1)

18 CM

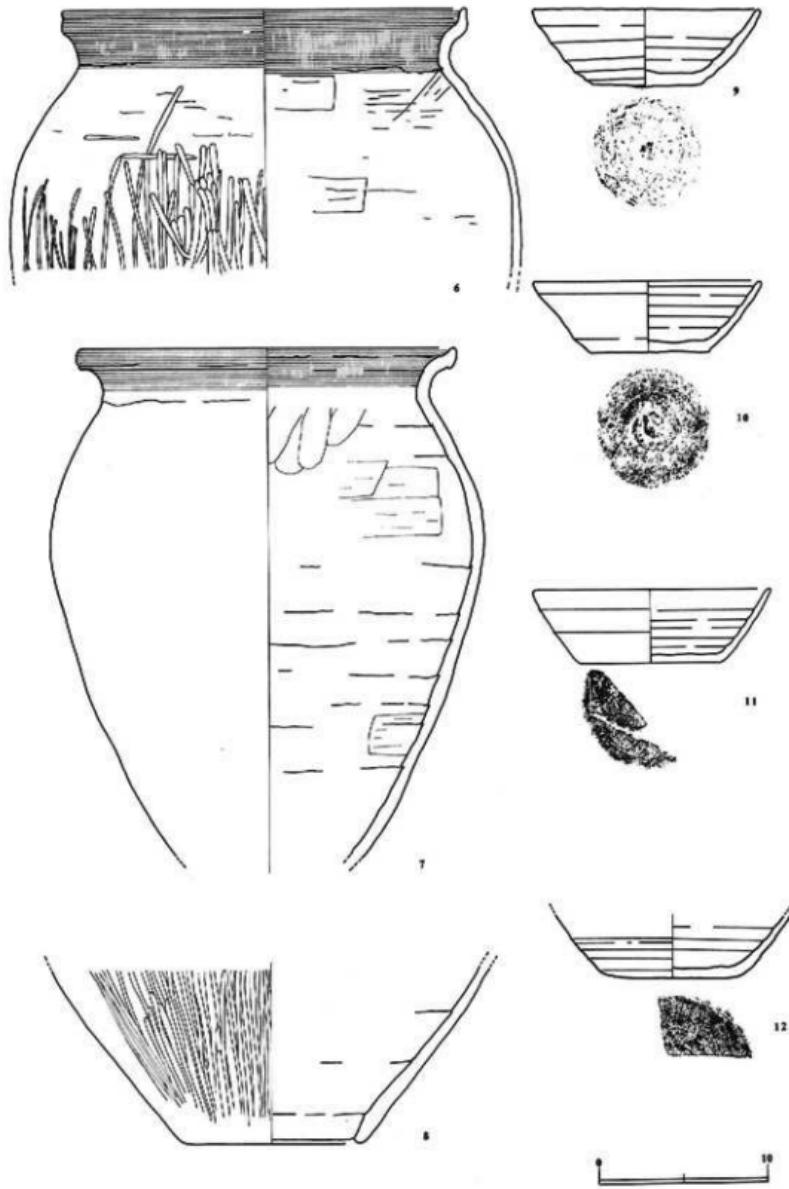


图20 北地区 6号住居址出土遗物(2)

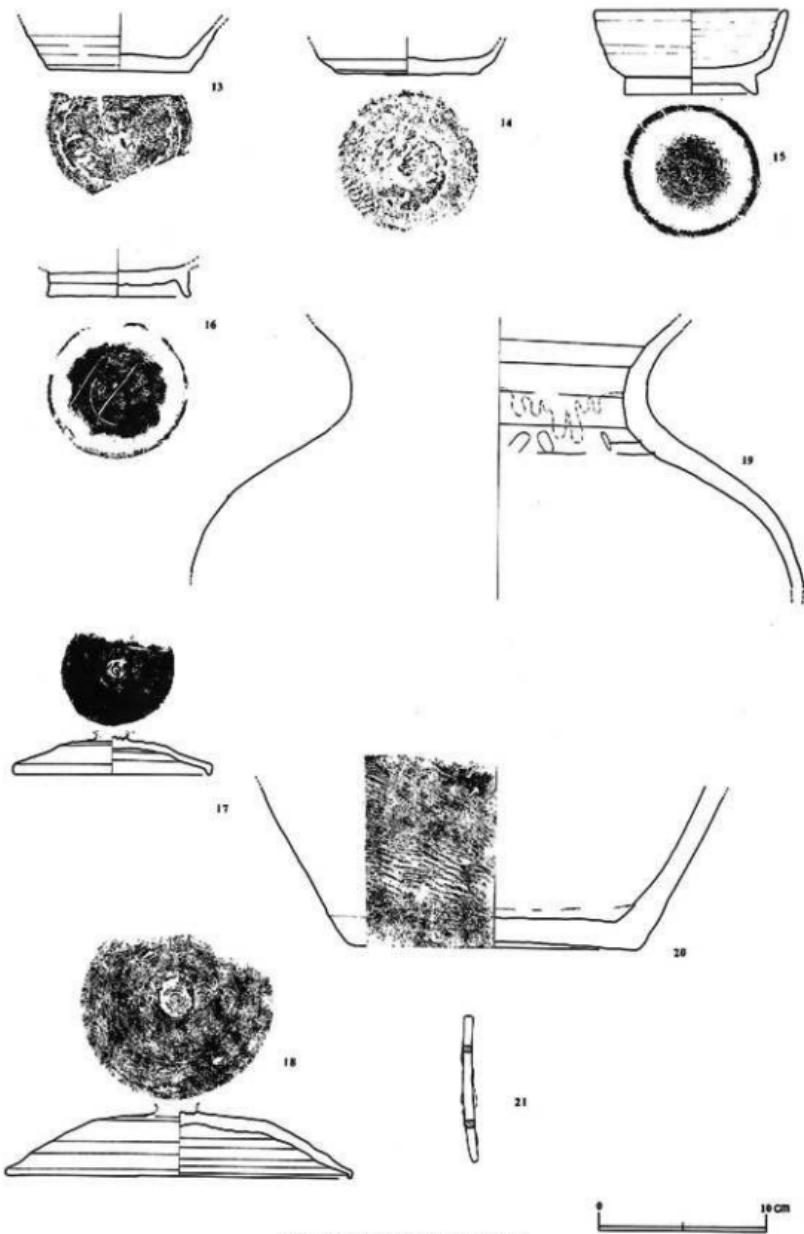


图21 北地区6号住层址出土遗物(3)

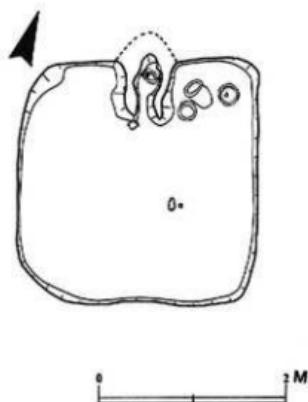


圖22 北地区7号住居址

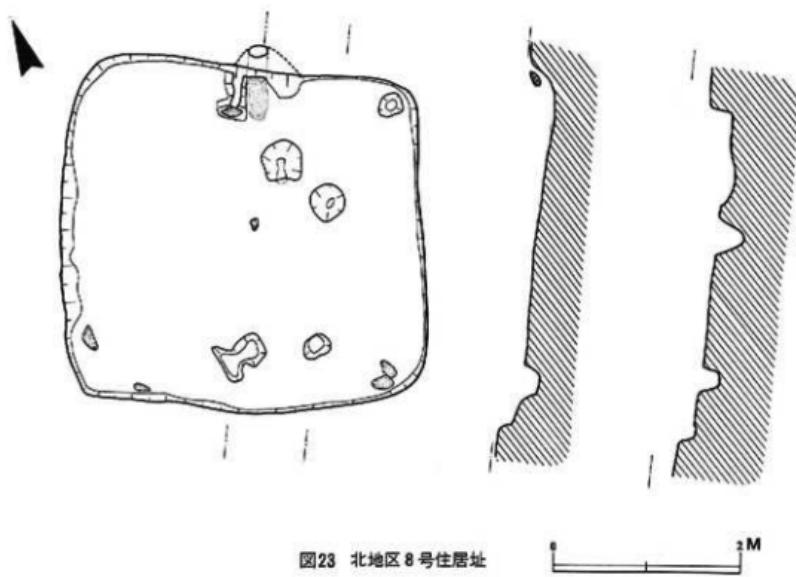


圖23 北地区8号住居址

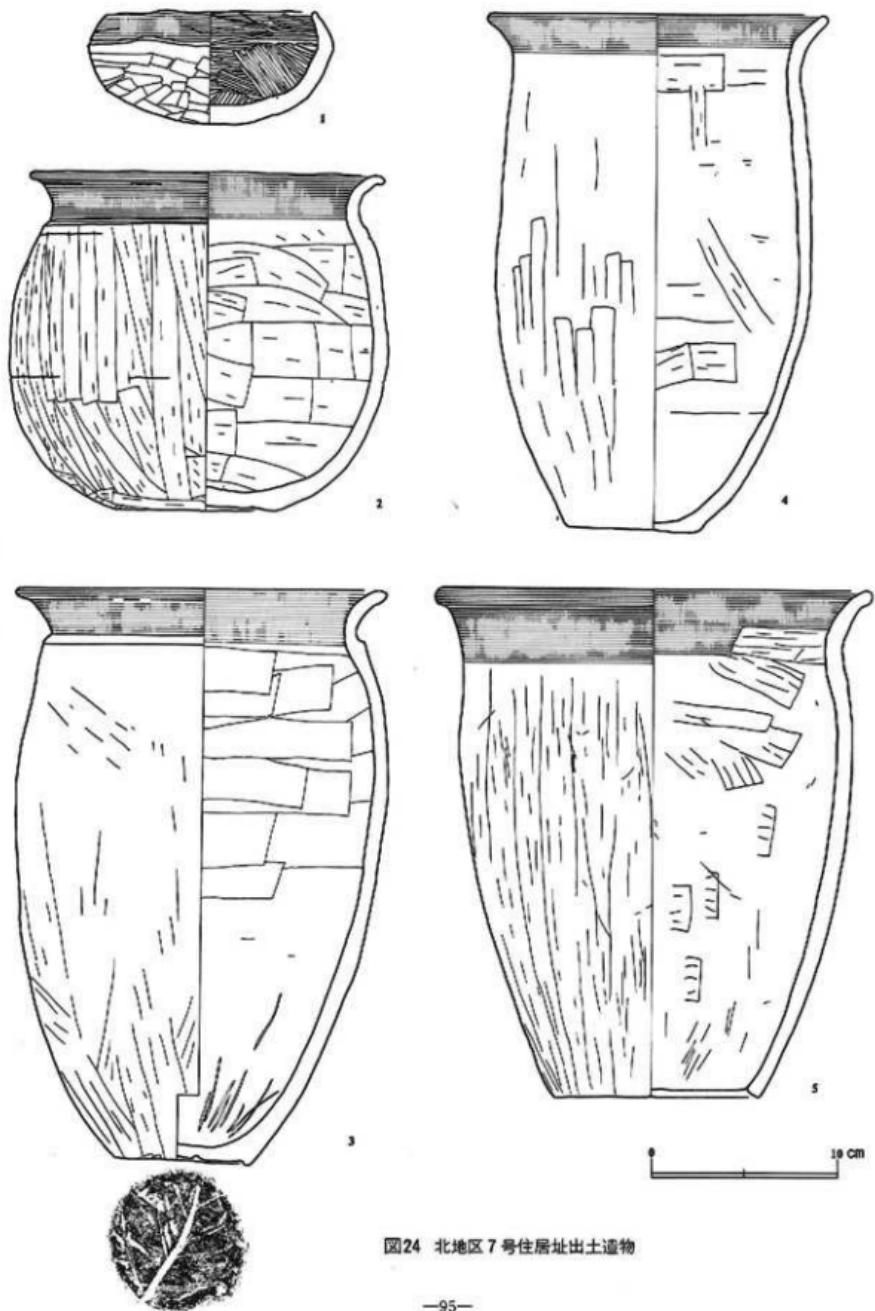


图24 北地区7号住居址出土遗物

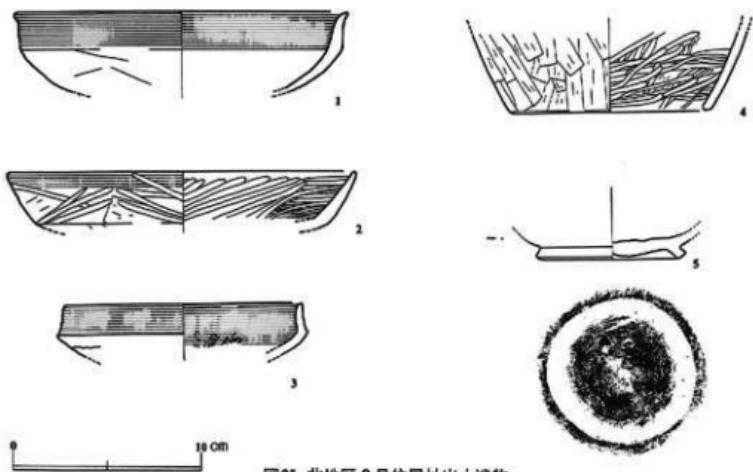


图25 北地区8号住居址出土遗物

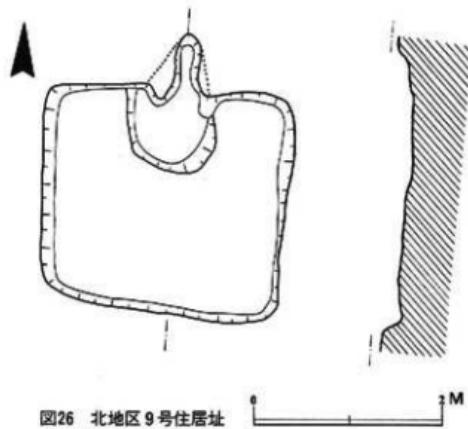


图26 北地区9号住居址

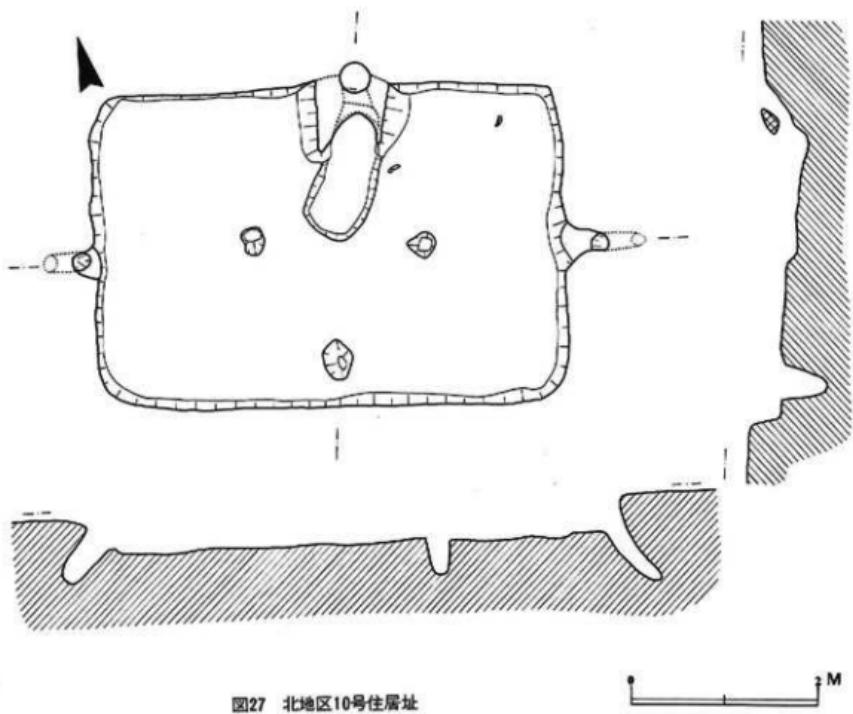


图27 北地区10号住居址

10 cm

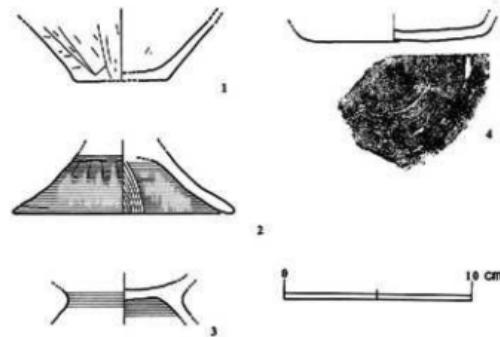


图28 北地区10号住居址出土遗物

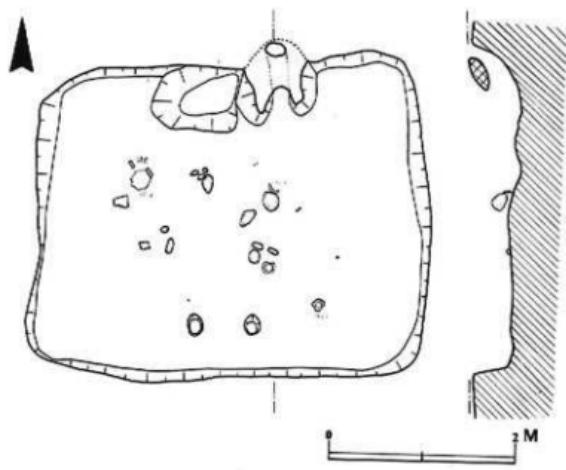


图29 北地区11号住居址

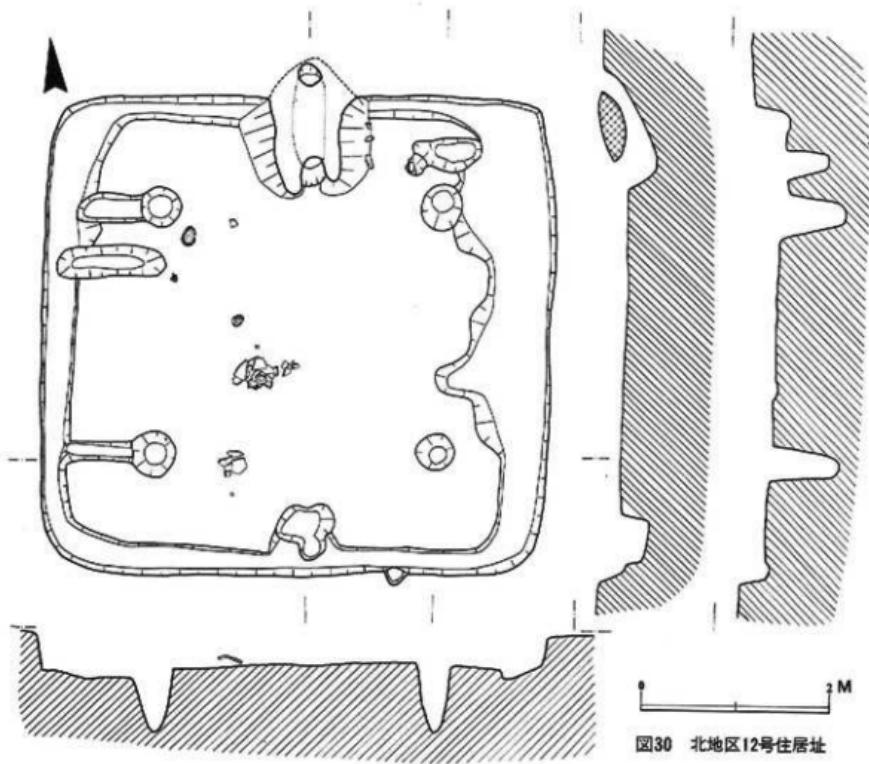


图30 北地区12号住居址

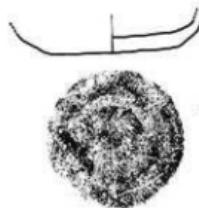
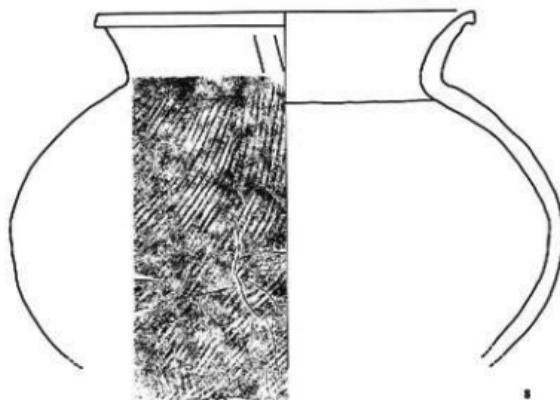
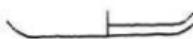
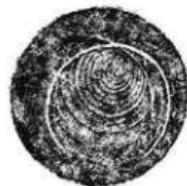
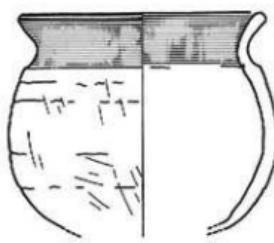
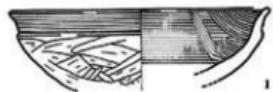


图31 北地区11号住居址出土遗物

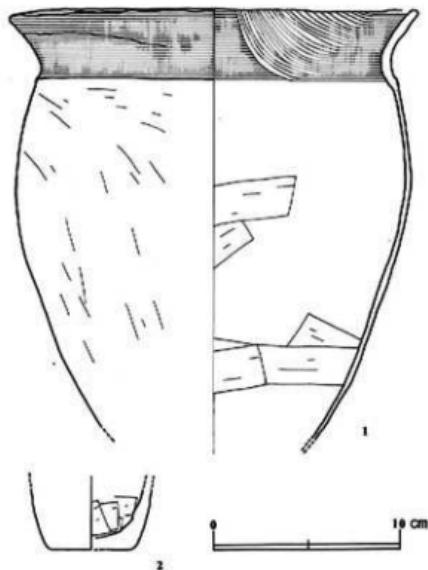


图32 北地区12号住居址出土遗物

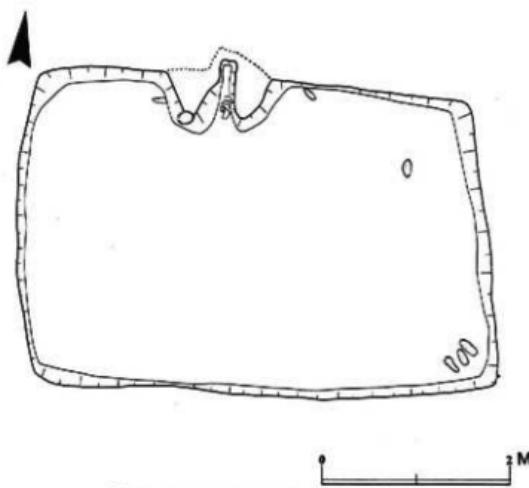


图33 北地区13号住居址

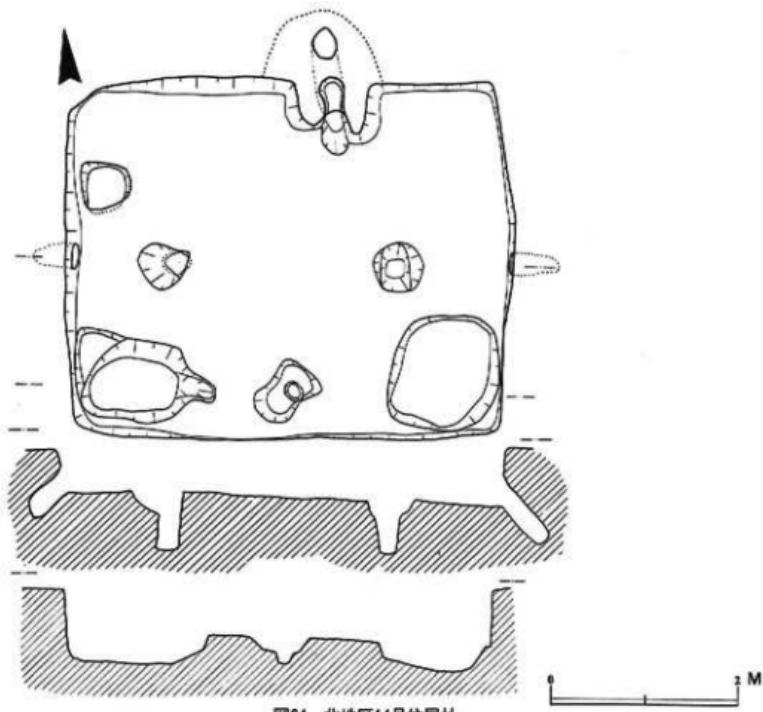


图34 北地区14号住居址

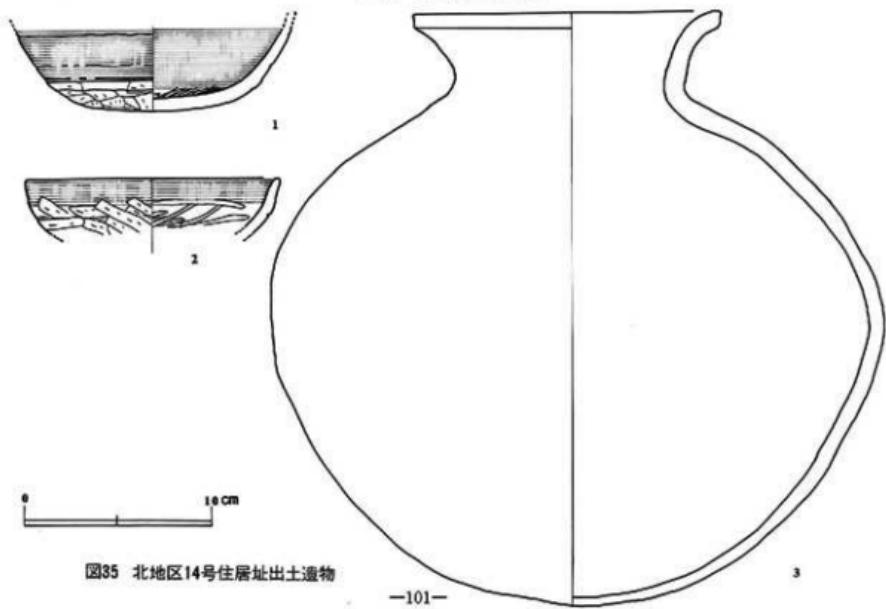


图35 北地区14号住居址出土遗物

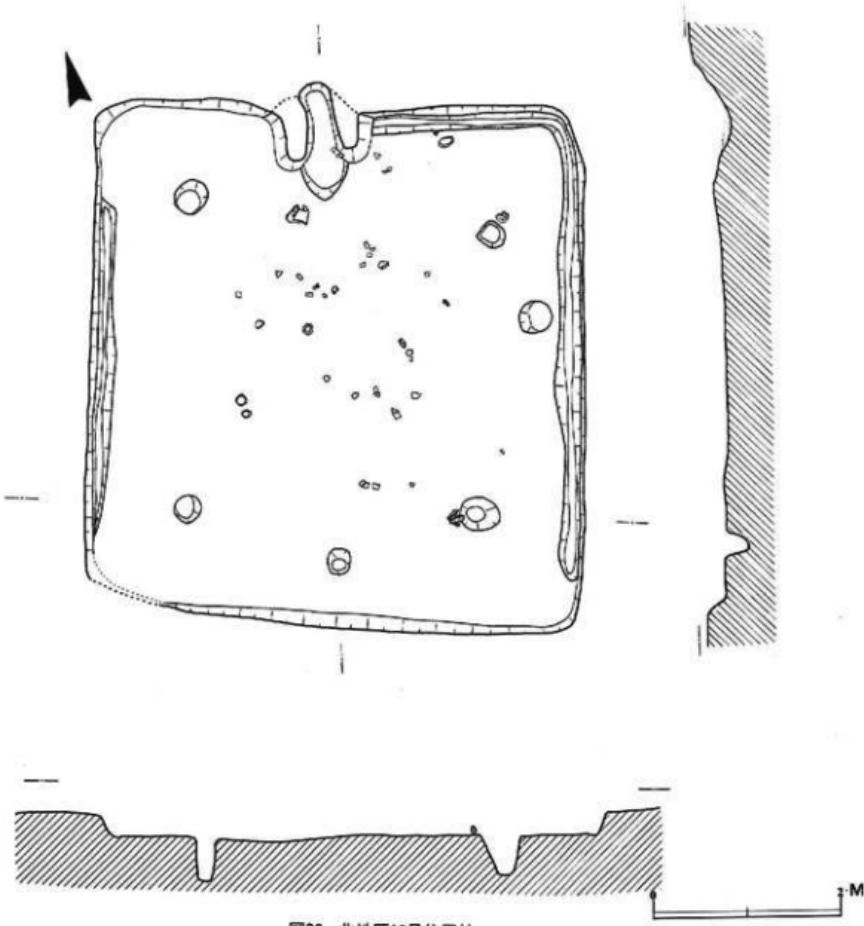


图36 北地区15号住居址

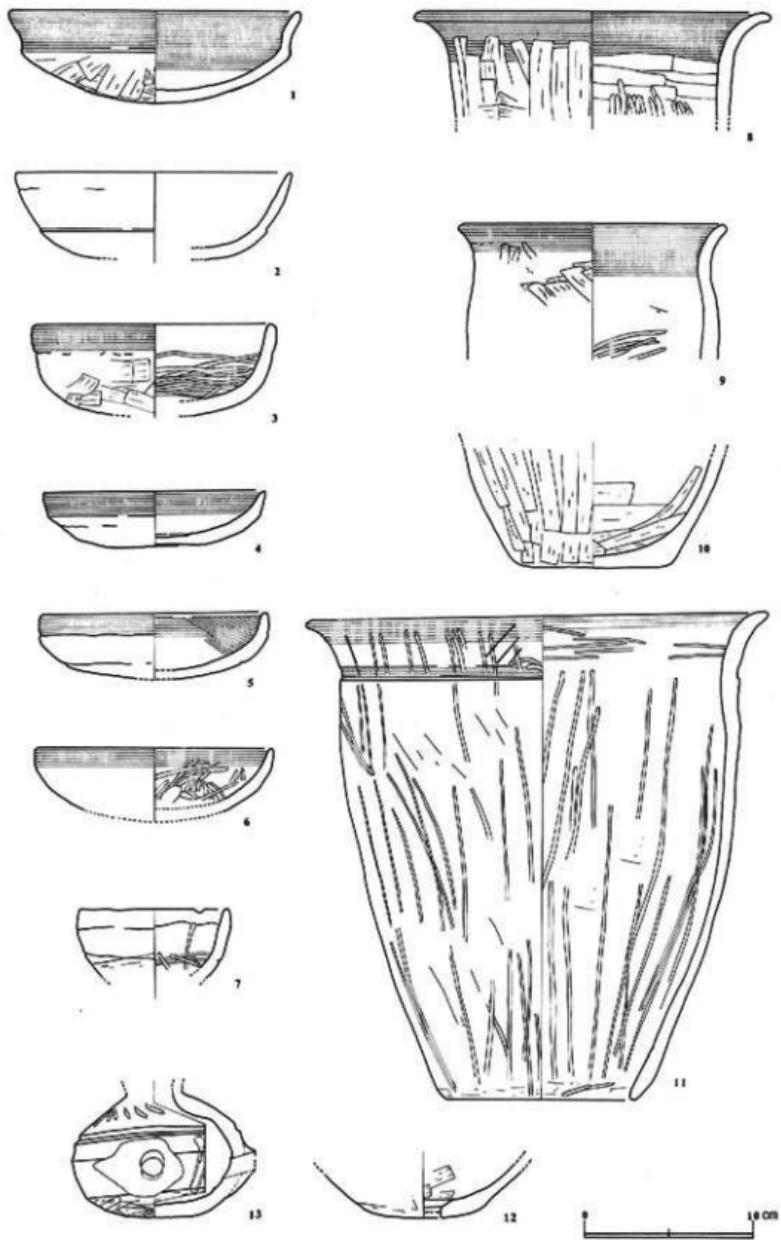


图37 北地区15号住居址出土遗物

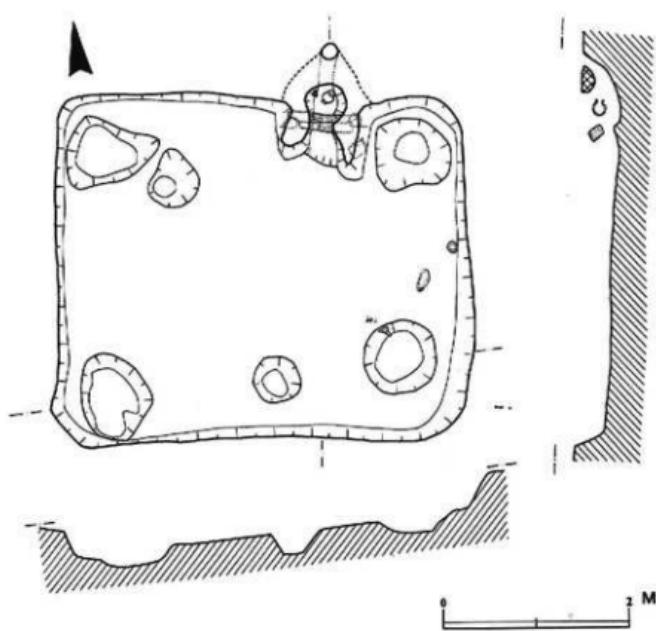


図38 北地区16号住居址

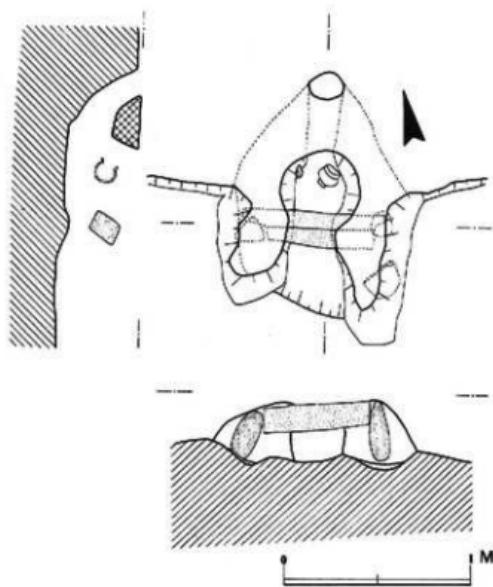


図39 北地区16号住居址カマド

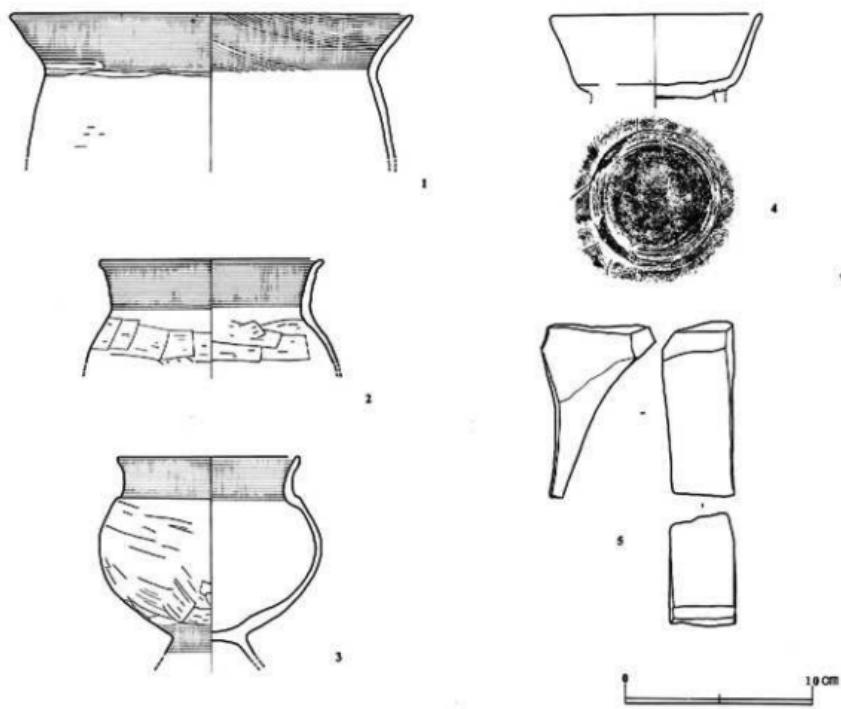


图40 北地区16号住居址出土遗物

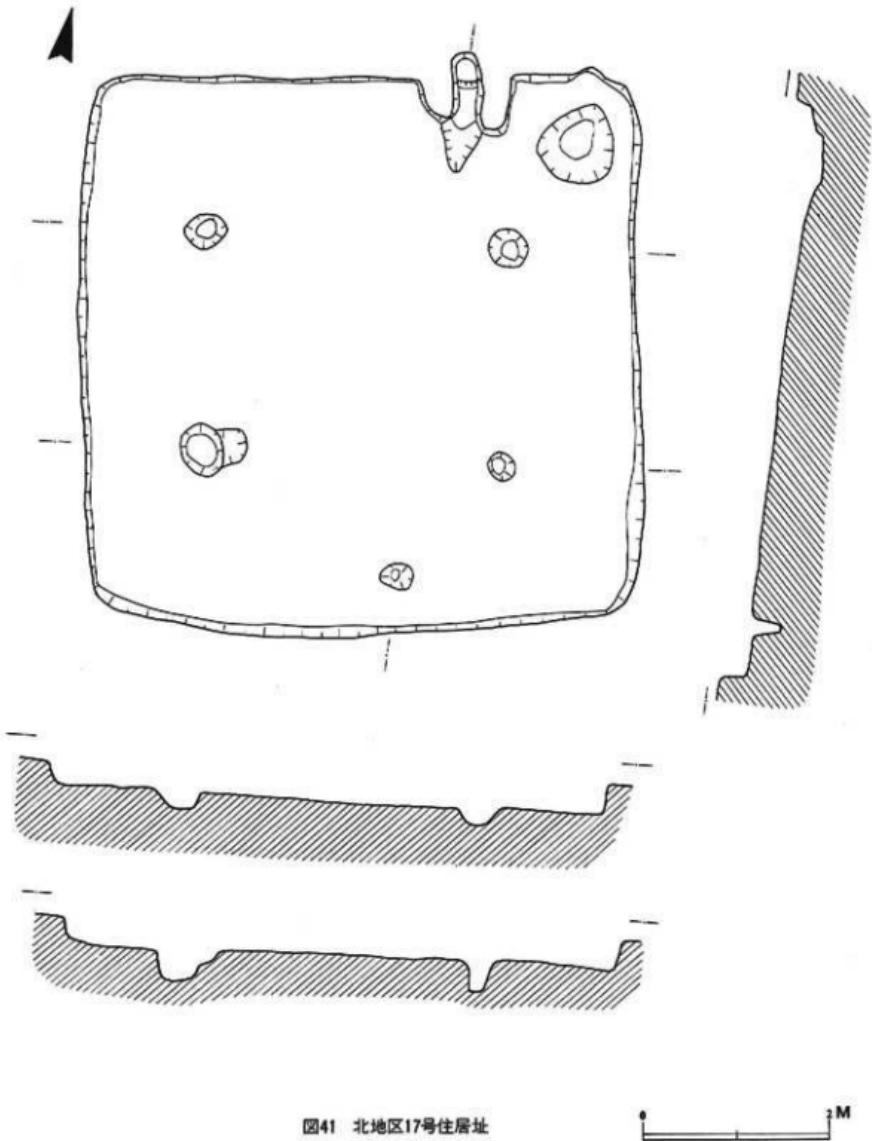


図41 北地区17号住居址

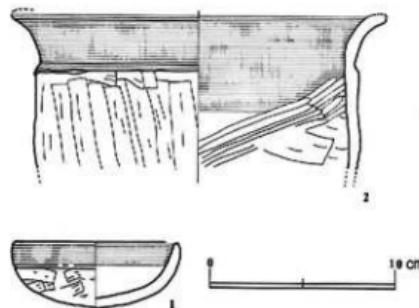


图42 北地区17号住居址出土遗物

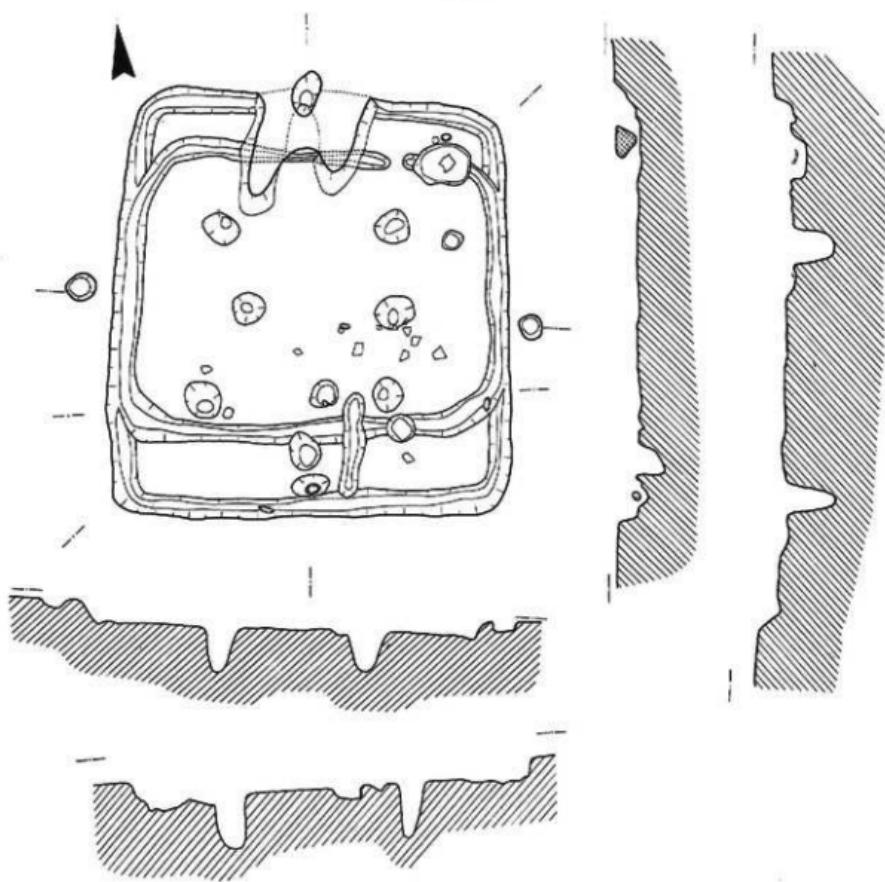


图43 北地区18号住居址

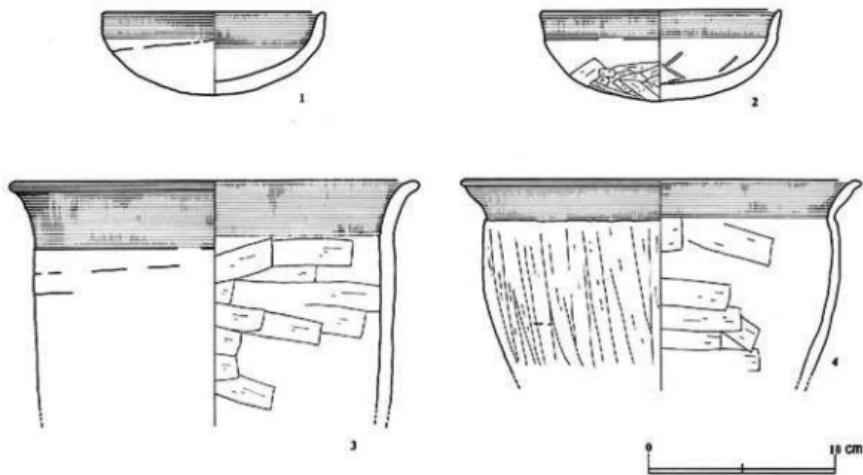


图44 北地区18号住居址出土遗物



图45 北地区19号住居址

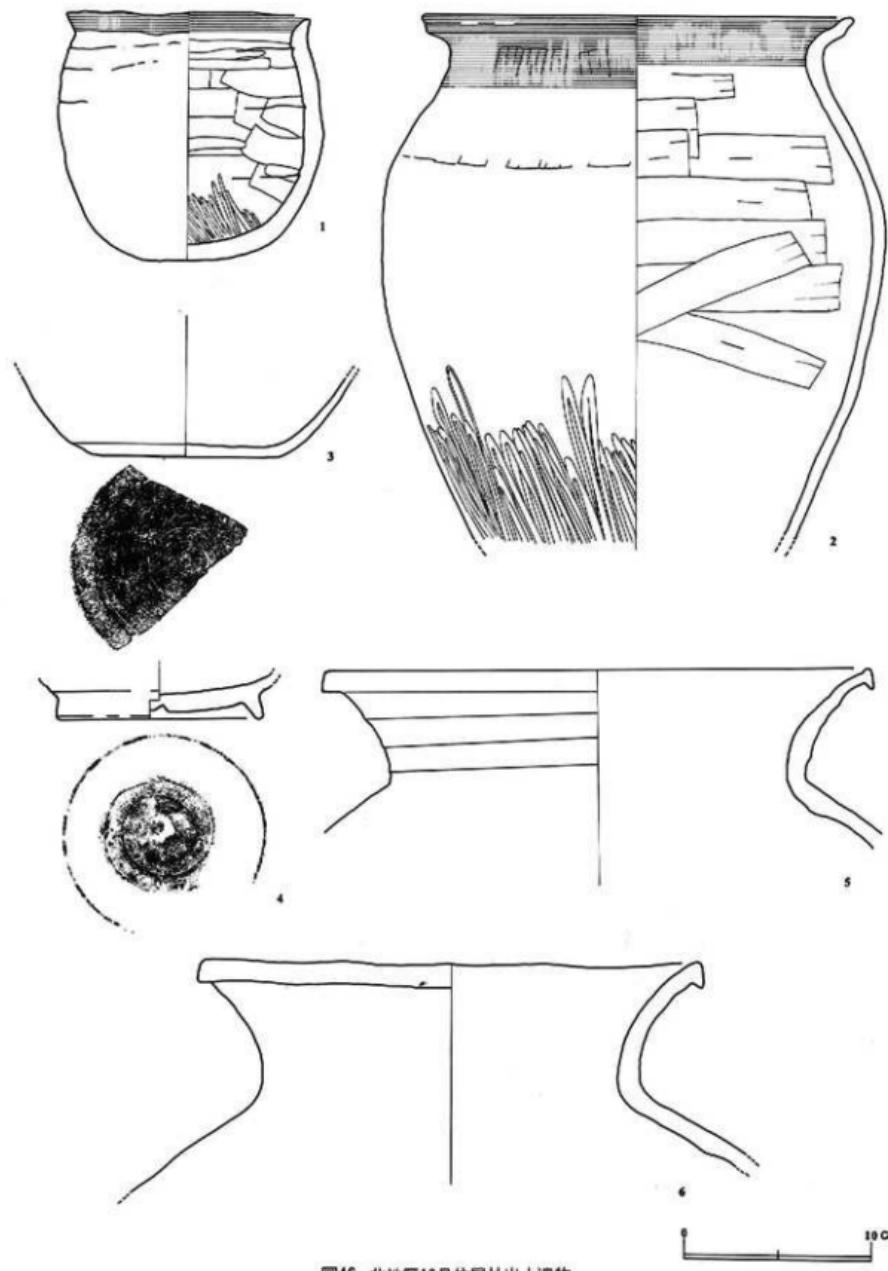


图46 北地区19号住居址出土遗物

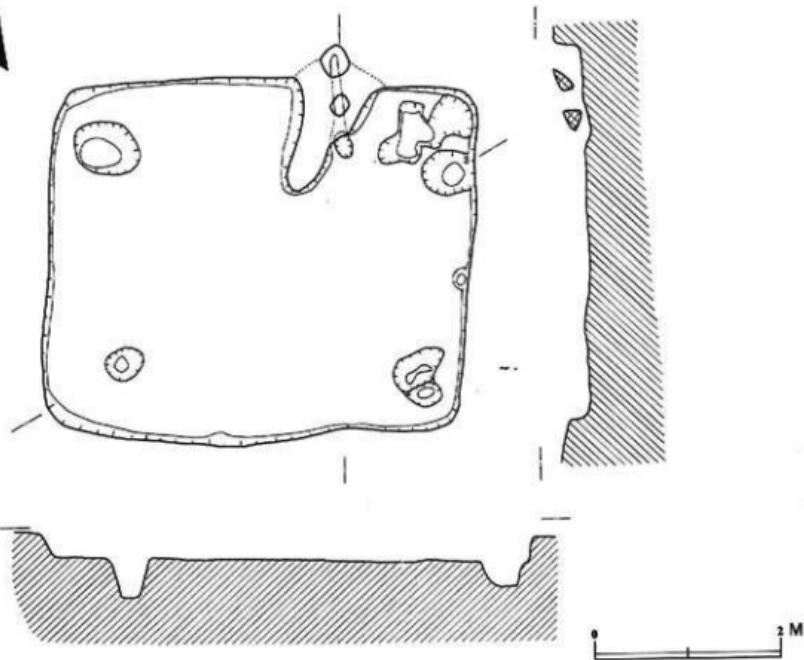


图47 北地区20号住居址

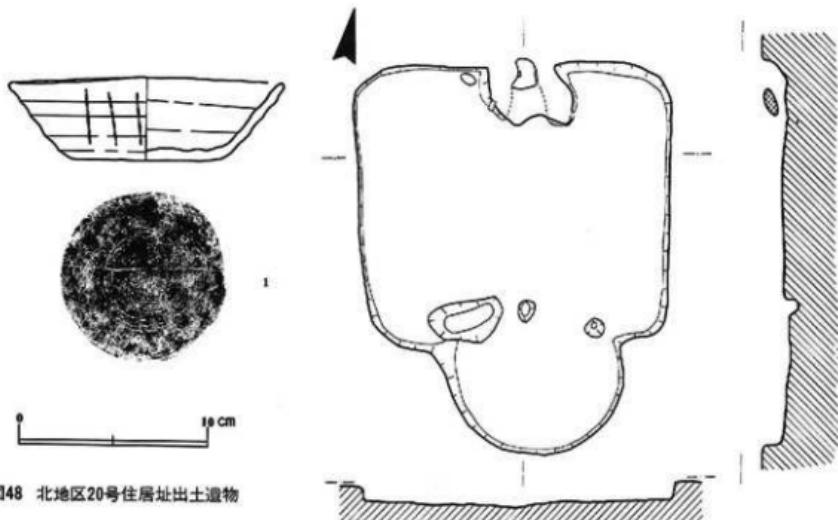


图48 北地区20号住居址出土遗物



图49 北地区21号住居址

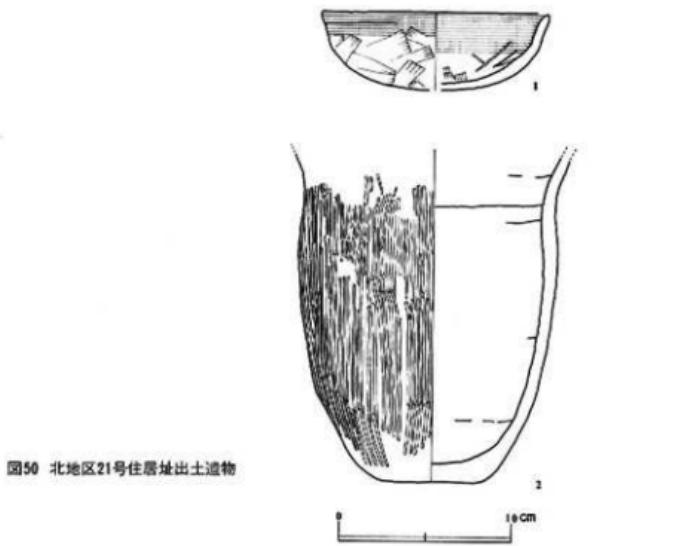


图50 北地区21号住居址出土遗物

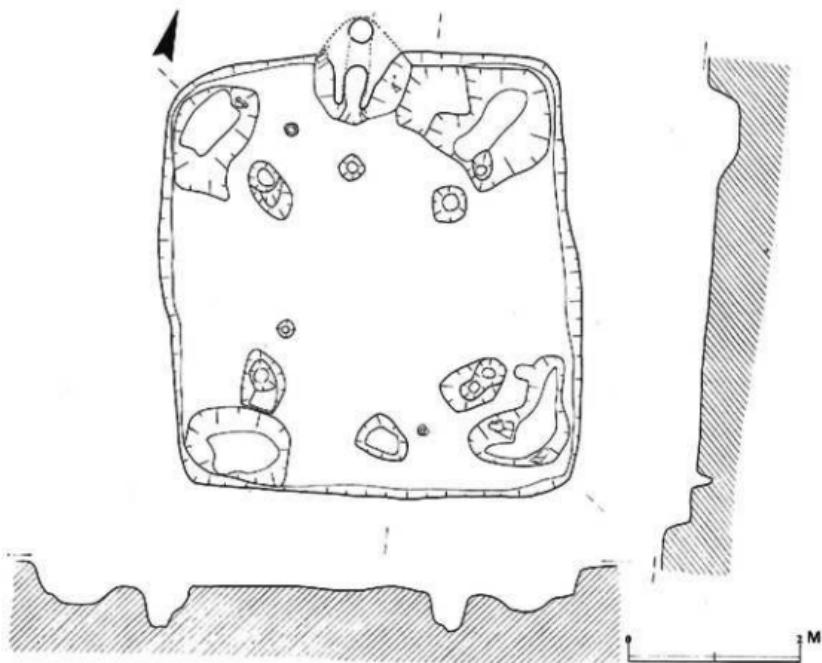


图51 北地区22号住居址

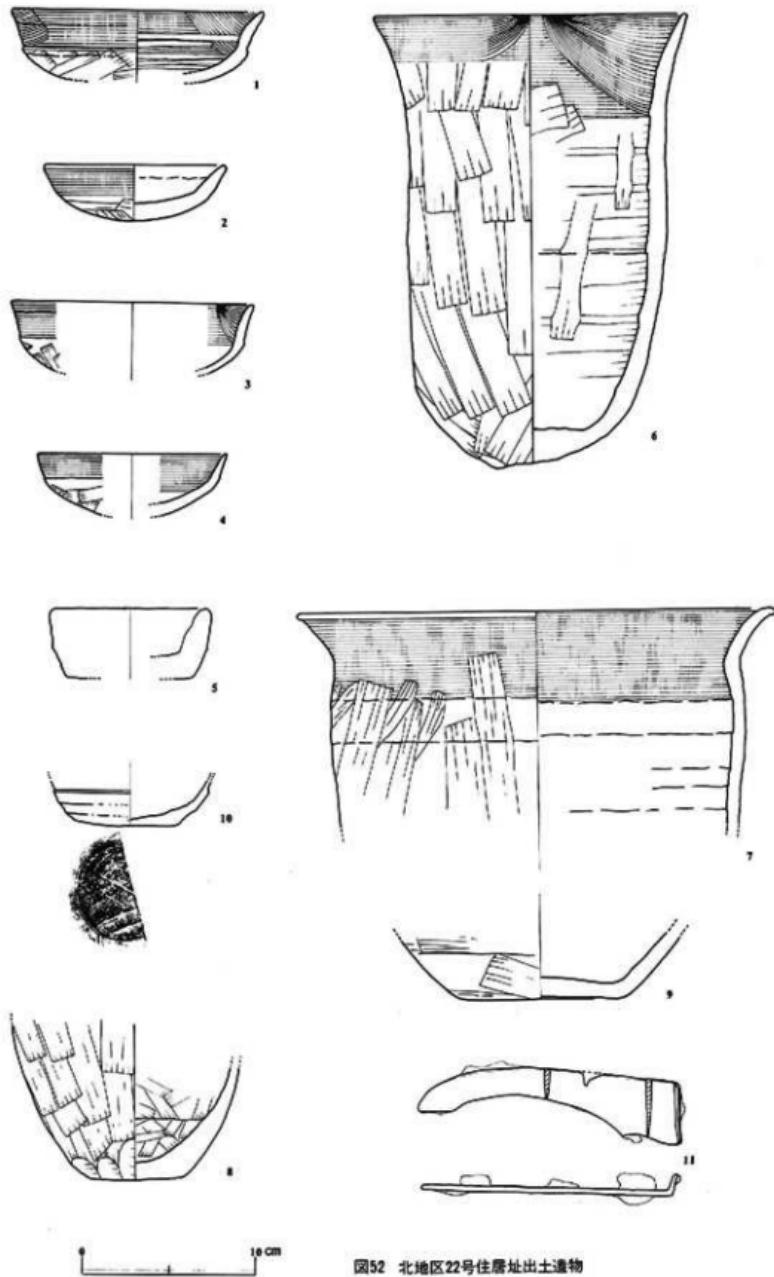


图52 北地区22号住居址出土遗物

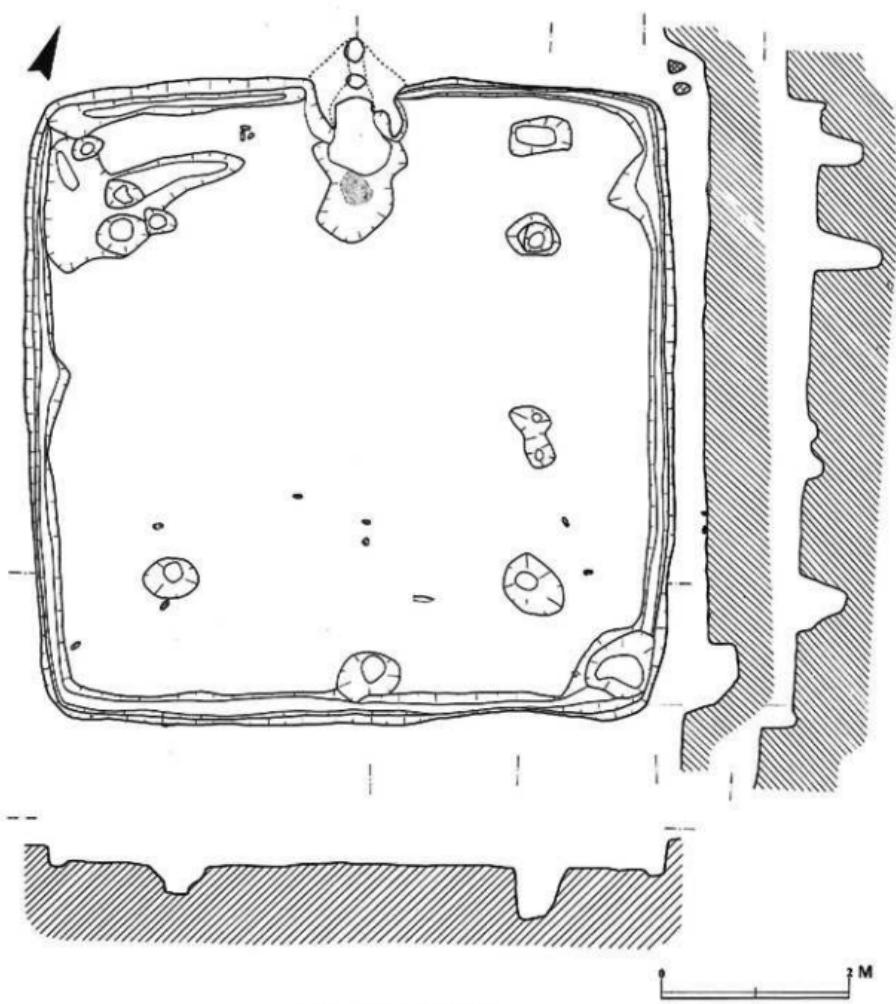


図53 北地区23号住居址

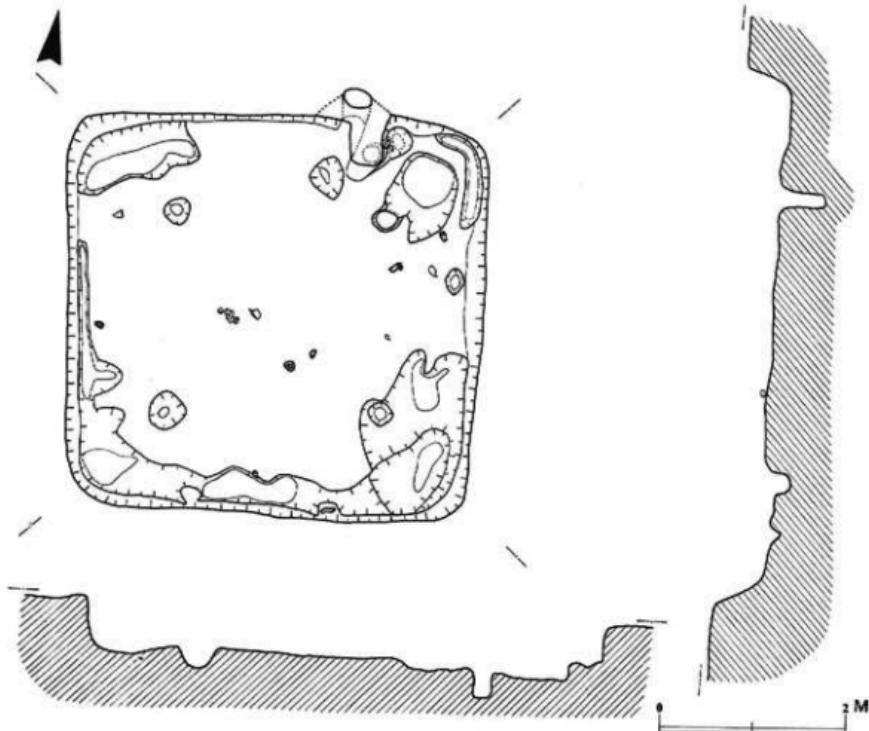


图54 北地区24号住居址

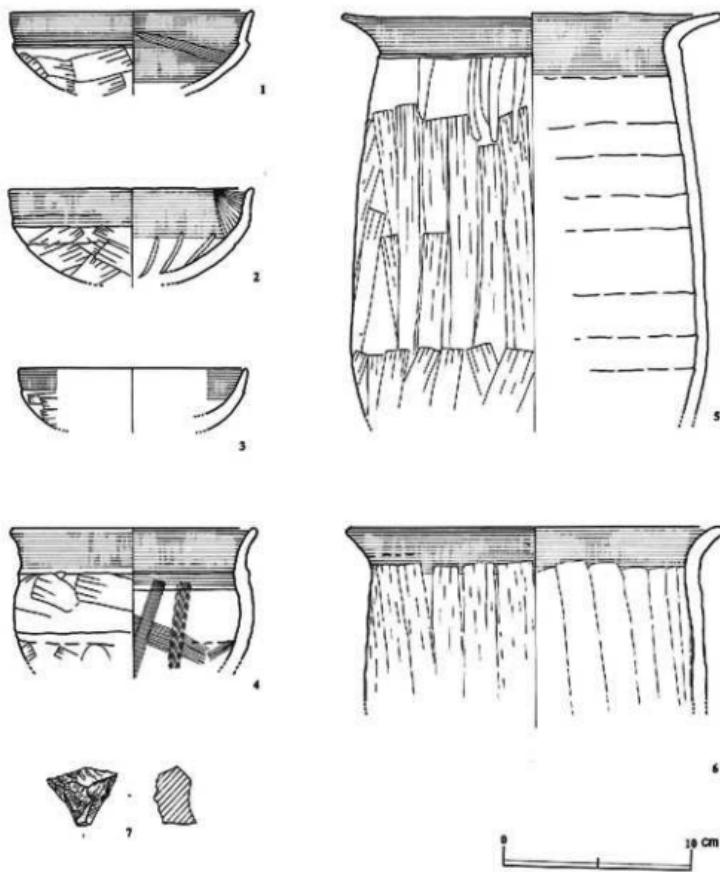


图55 北地区24号住居址出土遗物

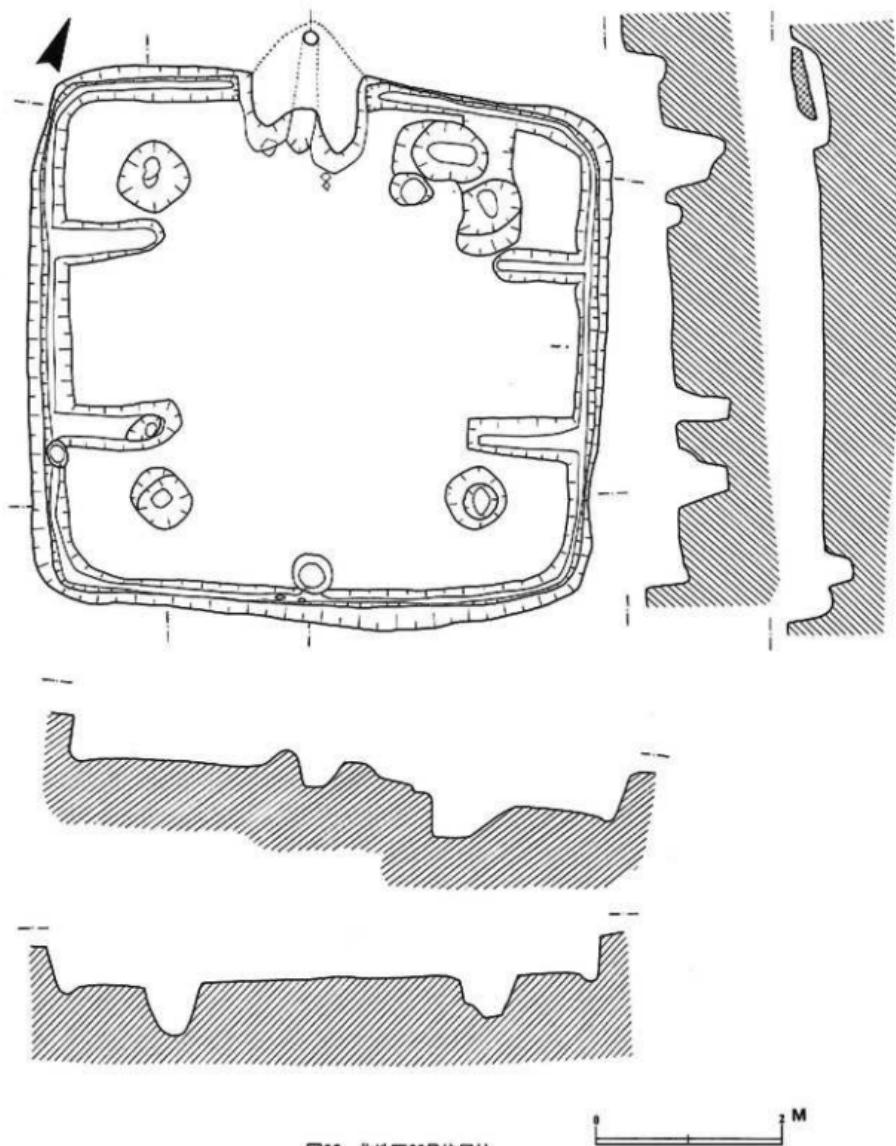


图56 北地区25号住居址

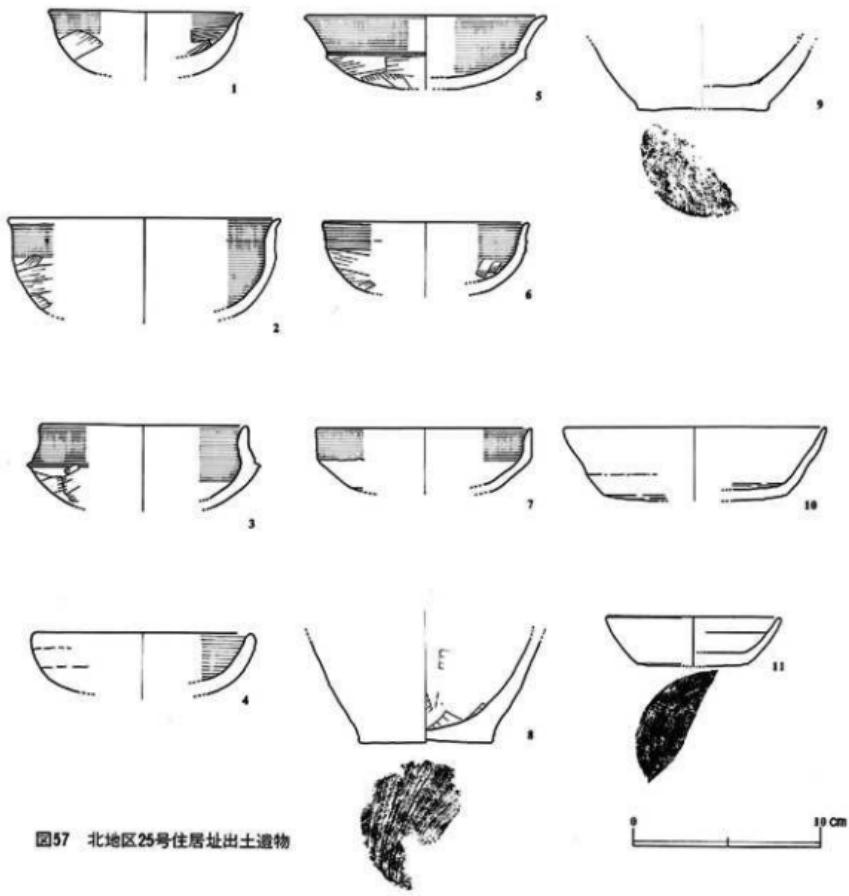


图57 北地区25号住居址出土遗物

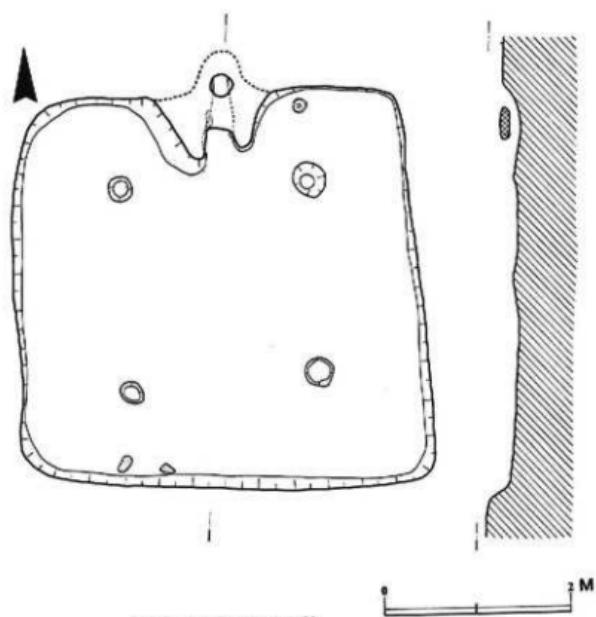


图58 北地区26号住居址

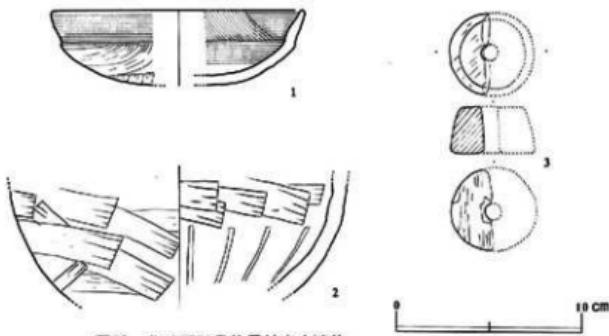


图59 北地区26号住居址出土遗物

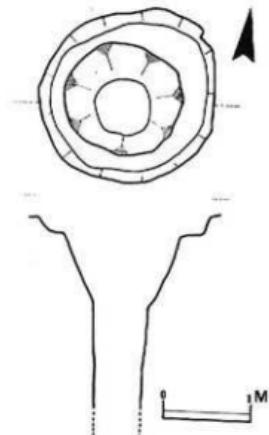


図60 北地区井戸跡

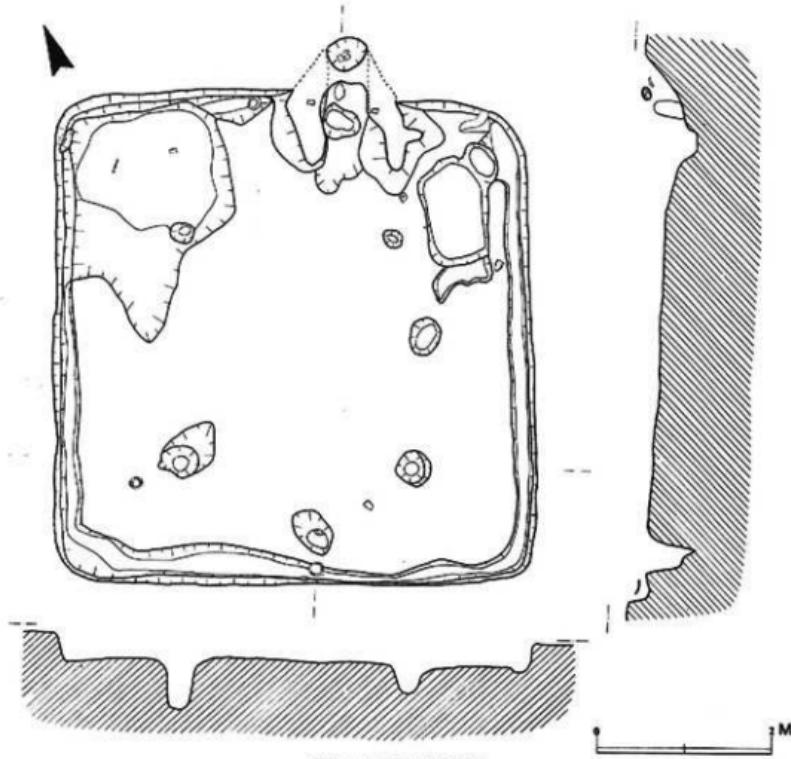


図61 南地区1号住居址

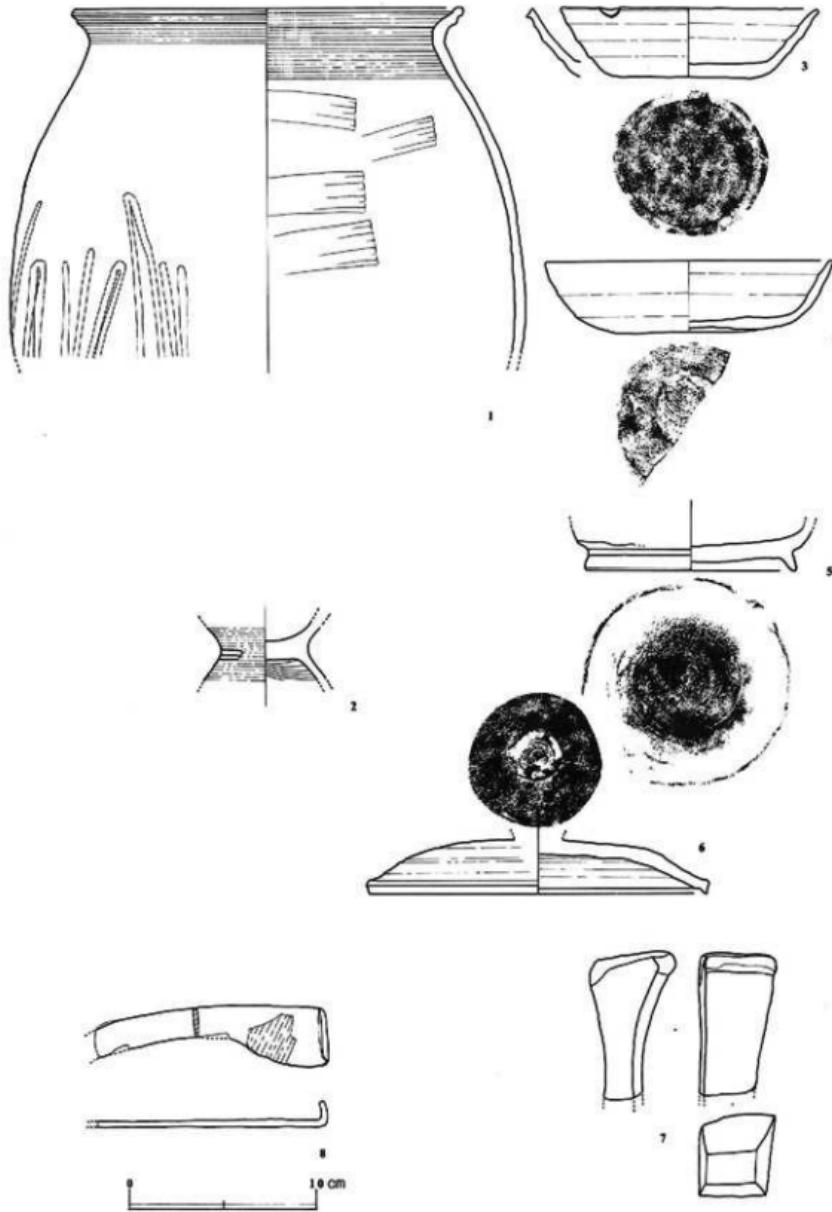


图62 南地区1号住居址出土遗物

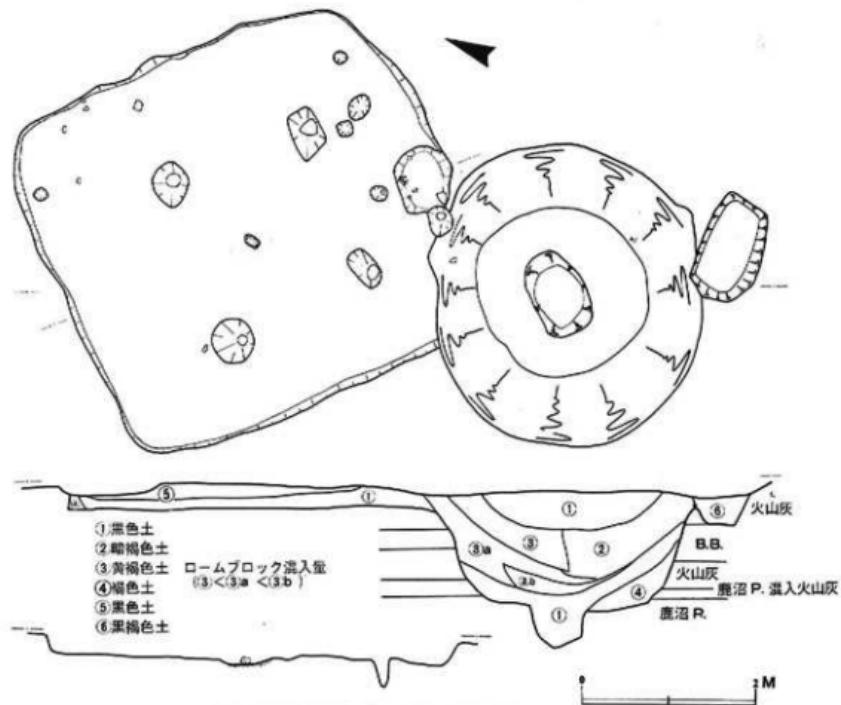


図63 南地区 2号住居址、4号円形有段通構

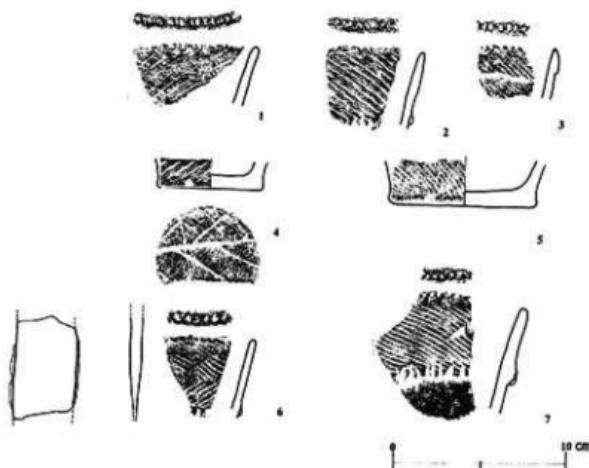


図64 南地区 2号住居址出土遺物

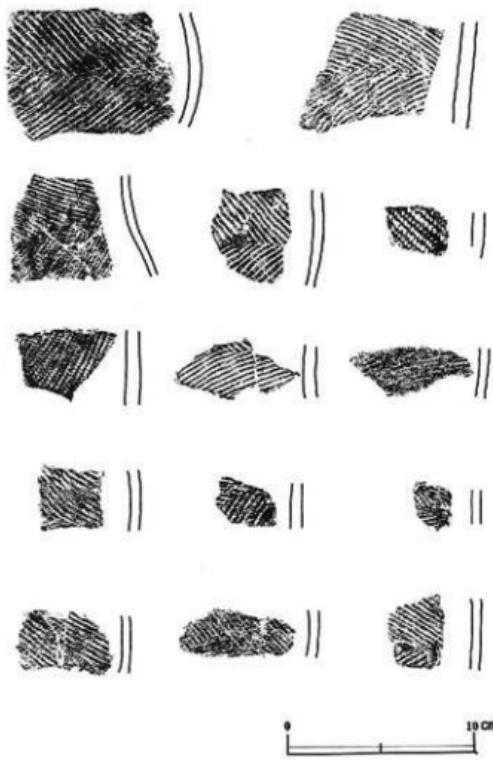


图65 南地区 2号住居址出土遗物

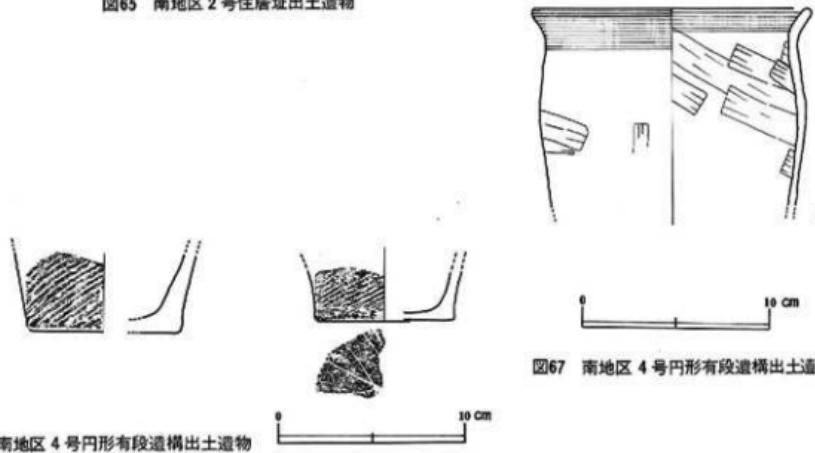


图66 南地区 4号圆形有段造模出土遗物

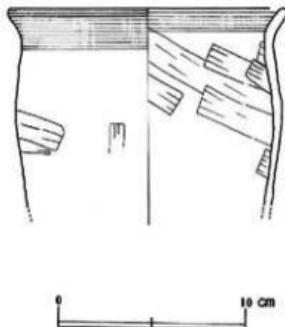


图67 南地区 4号圆形有段造模出土遗物

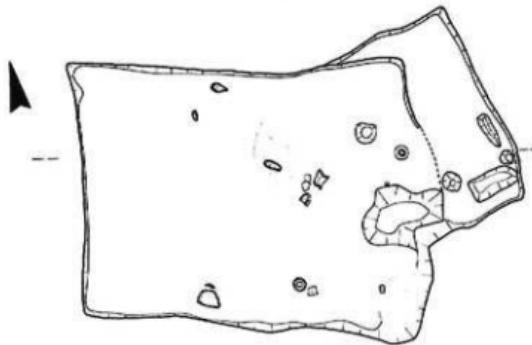


図68 南地区3号・4号住居址

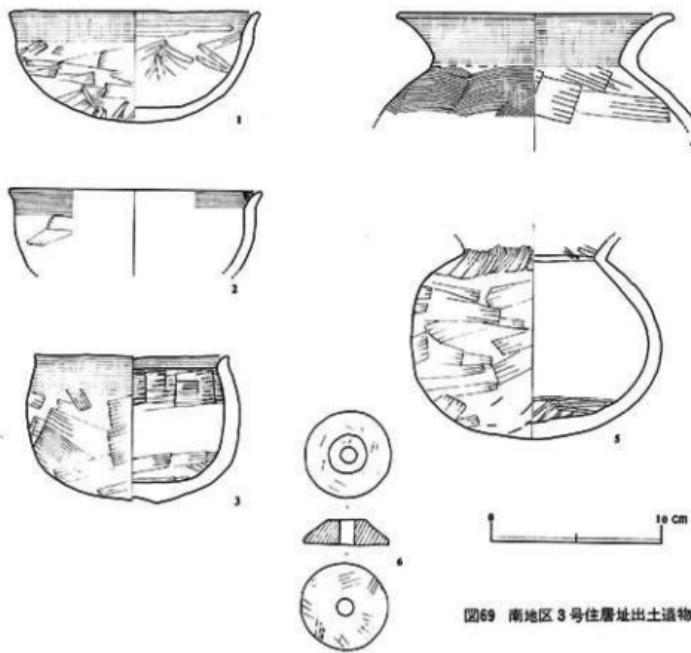


図69 南地区3号住居址出土遺物

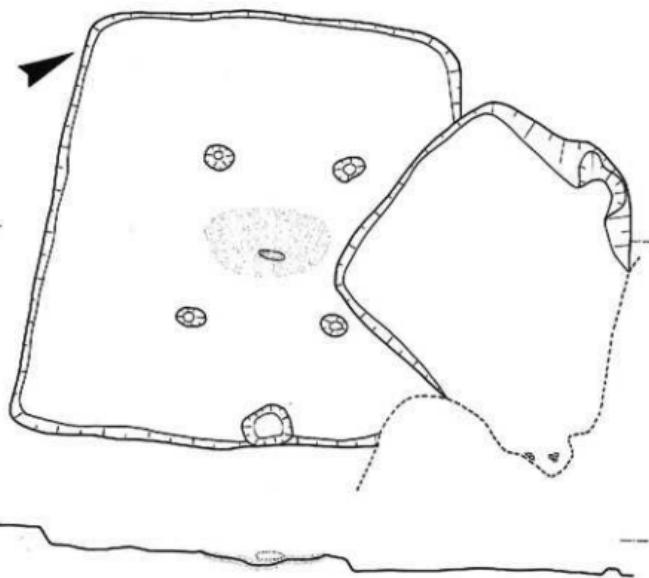


图70 南地区 5号·6号住居址



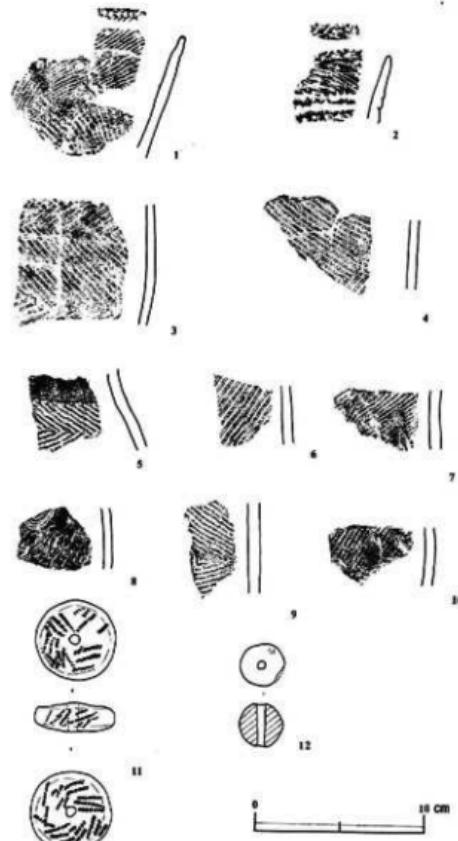


图71 南地区5号住居址出土遗物

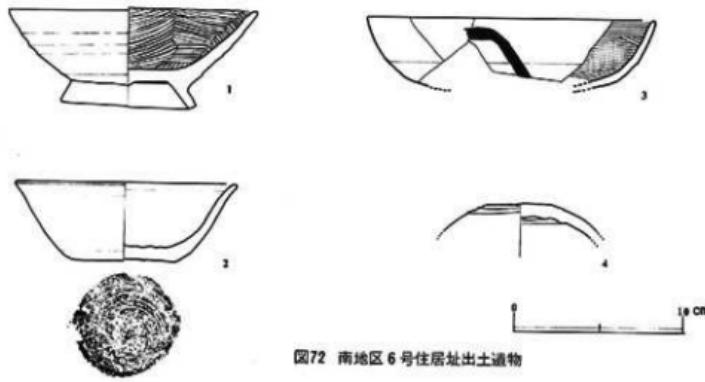


图72 南地区6号住居址出土遗物

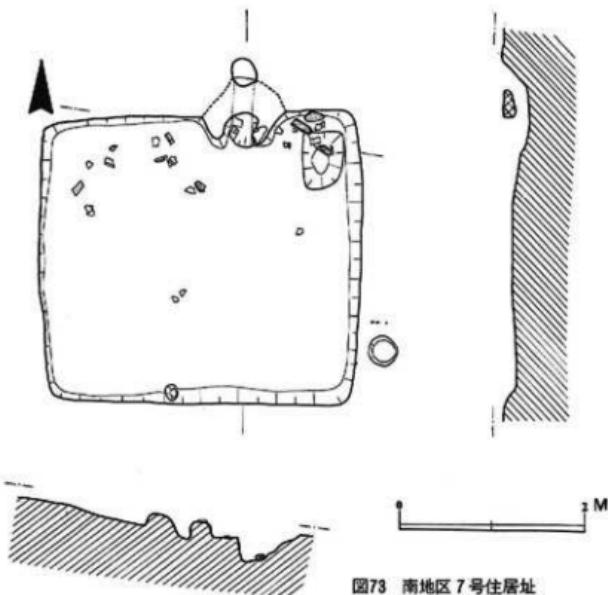


图73 南地区7号住居址

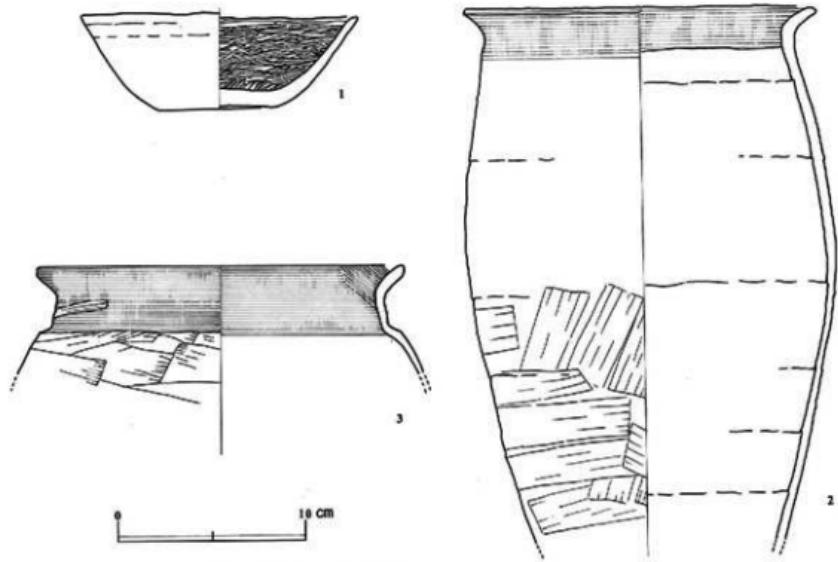


图74 南地区7号住居址出土遗物

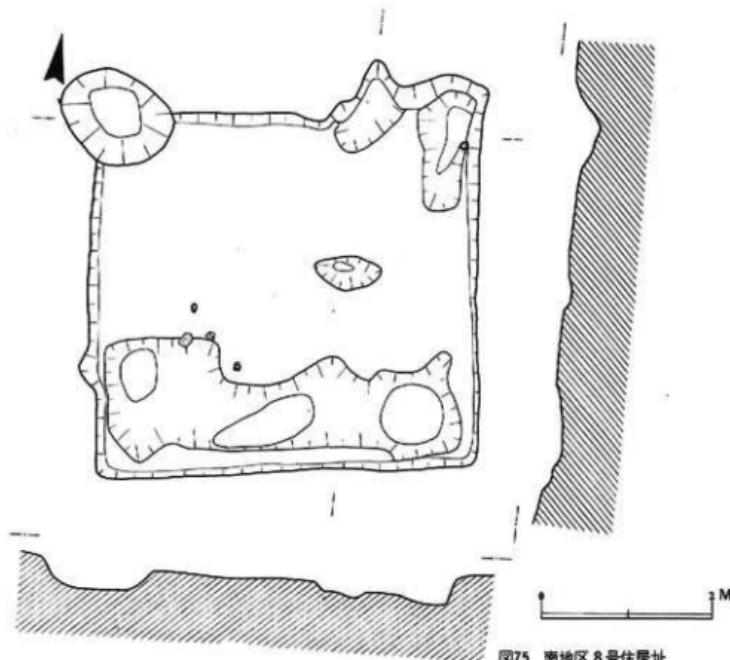


图75 南地区 8号住居址

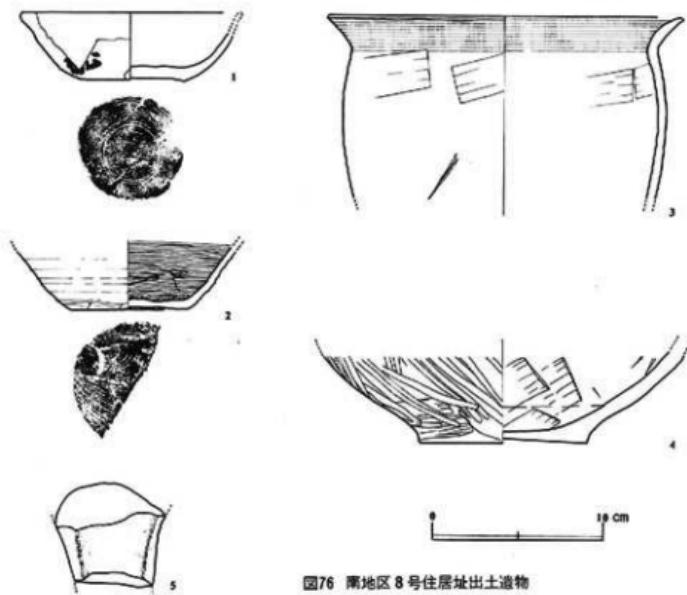


图76 南地区 8号住居址出土造物

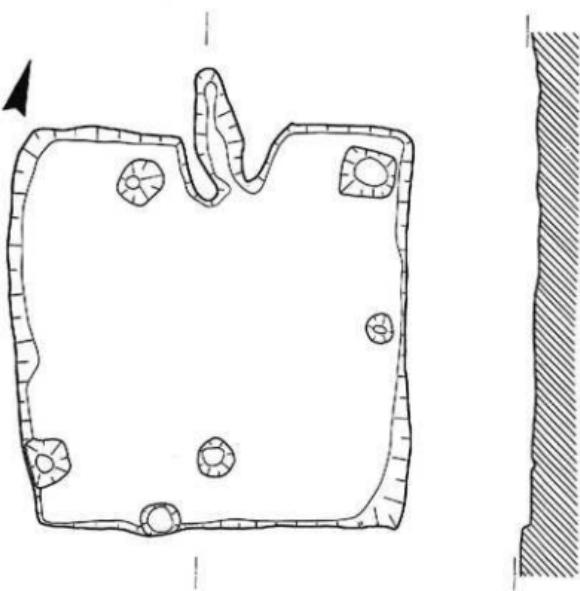


図77 南地区9号住居址

0 2 M

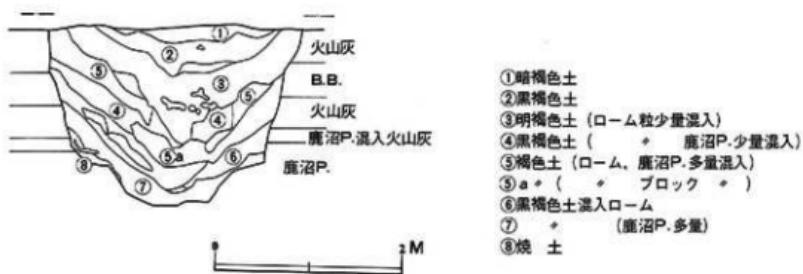
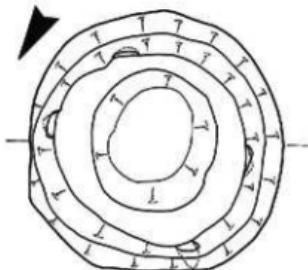


図78 南地区1号円形有段遺構

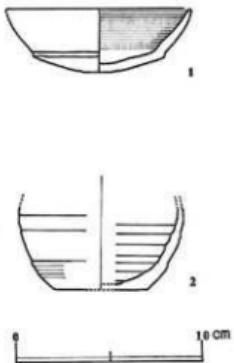


図79 南地区 1号円形有段遺構出土遺物

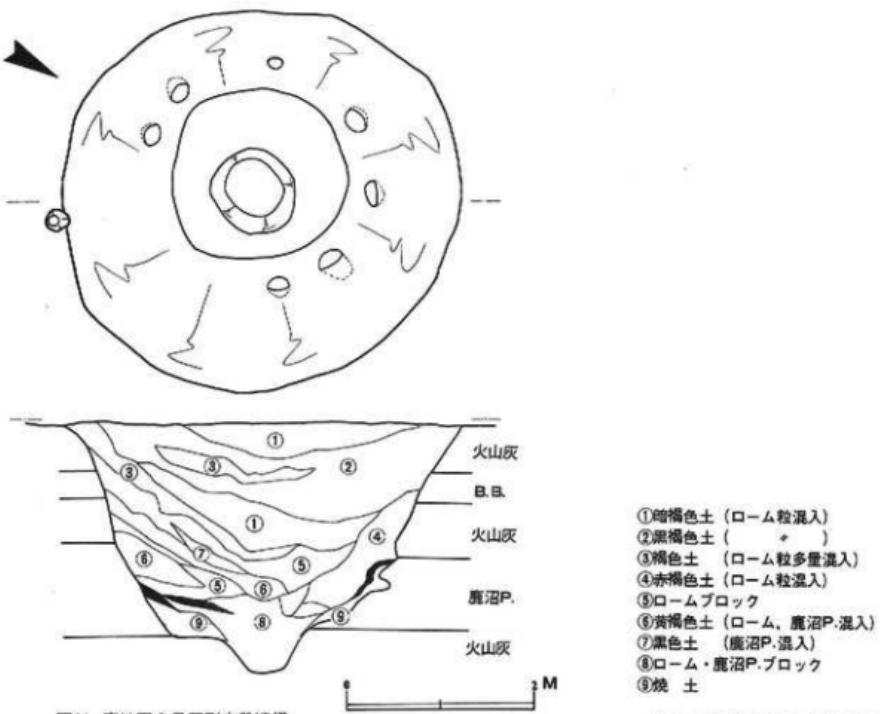


図80 南地区 2号円形有段遺構

黒塗部 岩火物が多量に混入した層

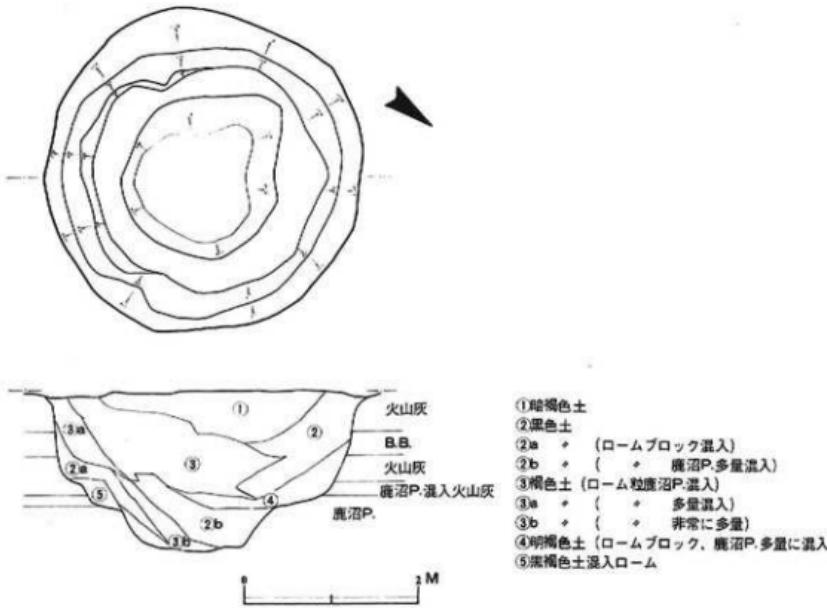


図81 南地区 3号円形有段構

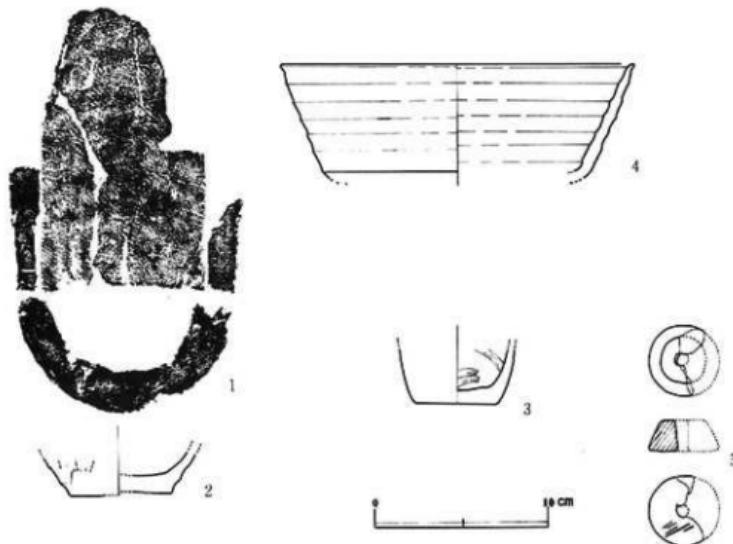


図82 南地区 3号円形有段構出土遺物

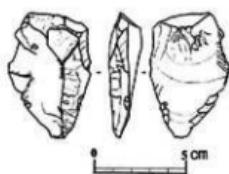


図83 先土器時代剝片

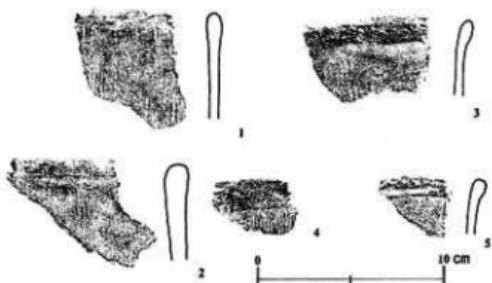


図84 織文式土器

図版目次

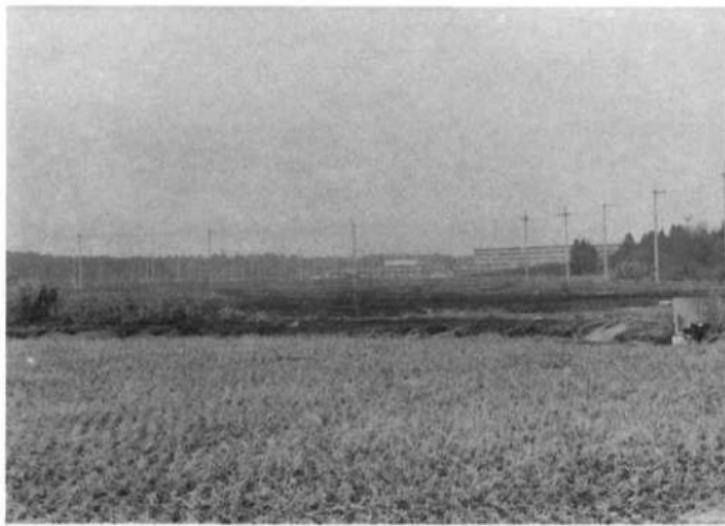
図版-1	南地区から北地区を臨む、北地区遺景	135
2	北地区近景、南地区現状	136
3	南地区発掘風景、北地区1号住居址	137
4	北地区1号址カマド、遺物出土状況	138
5	北地区井戸址、北地区2号住居址	139
6	北地区2号住居址カマド・セクション	140
	“ 遺物出土状況	141
7	“ “	141
8	北-3住居址 “	142
	“ 遺物出土状況	142
9	北-4住居址	143
	“ 遺物出土状況	143
10	北-5住居址	144
	“ 遺物出土状況	144
11	北-6住居址	145
	“ 遺物出土状況	145
12	北-7住居址	146
	“ 遺物出土状況	146
13	北-8住居址	147
北-9住居址		147
14	北-10住居址	148
北-11住居址		148
15	北-12住居址	149
北-13住居址		149
16	北-14住居址	150
	“ 遺物出土状況	150
17	北-15住居址	151
北-16住居址		151
18	北-16住居址	152
	“ 遺物出土状況	152
19	北-17住居址	153
北-18住居址		153
20	北-19住居址	154
	“ 遺物出土状況	154
21	北-20住居址	155
北-21住居址		155
22	北-22住居址	156
	“ 遺物出土状況	156
23	北-23住居址	157
北-24住居址		157

図版-24	北-25住居址	158
	北-26住居址	158
25	南-1住居址	159
	南-2住と調査中の円形有段造構-4	159
26	南-3・4住居址	160
	南-3住居址・遺物出土状況	160
27	南-5・6住居址	161
	南-5住居址	161
28	南-5住居址・遺物出土状況	162
	南-6住居址・遺物出土状況	162
29	南-7住居址	163
	南-8住居址	163
30	南-9住居址	164
	円形有段造構-1	164
31	円形有段造構-2	165
	円形有段造構-3	165
32	円形有段造構-4	166
	円形有段造構-4壁(剝片)	166
33	土師器環形土器(1)	167
34	" (2)	168
35	土師器甕形土器(1)	169
36	" (2)	170
37	" (3)	171
38	" (4)	172
39	" (5)	173
40	" (6)	174
41	須恵器(1)	175
42	(2)	176
43	" (3)	177
44	弥生式土器	178
45	弥生式土器、縄文式土器	179
46	紡錘車	180
47	金環、砥石等	181
48	鉄製品	182

図版1.



1) 南地区から北地区



2) 北地区遠景



1) 北地区



2) 南地区現状（南より）



1) 南地区発掘風景（北より）



2) 北地区1号住居址（南より）



1) 北地区 1号住居層カマド



2) 1号住居址紡錘車出土状態



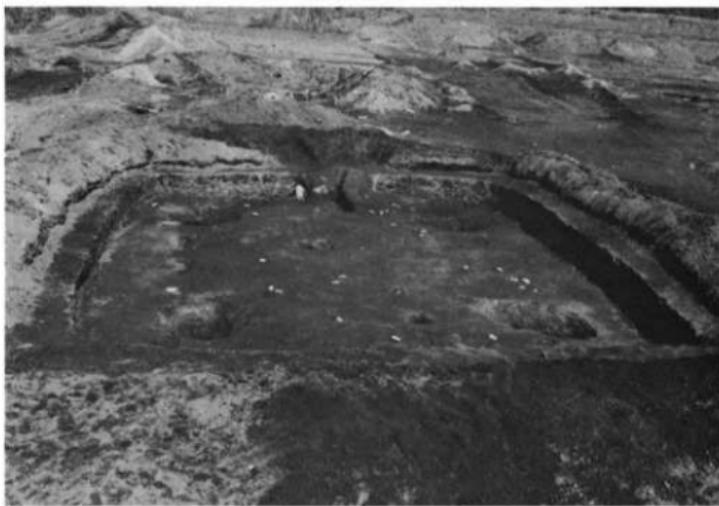
1) 北地区 2号住居址 カマドセクション



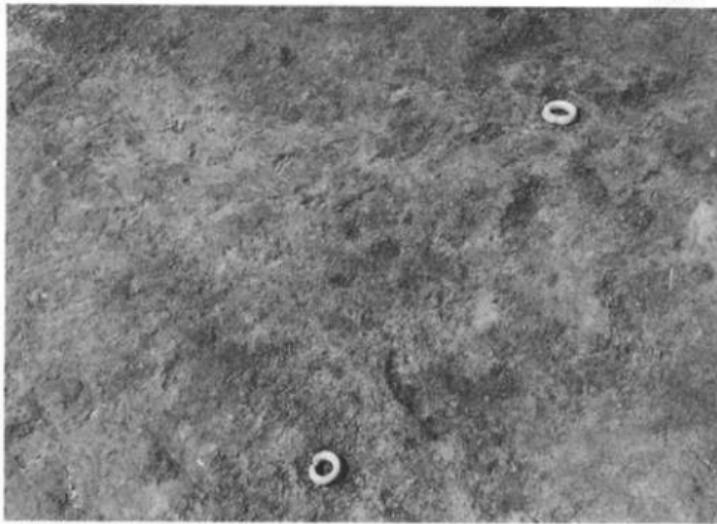
2) 北地区 2号住居址 遺物出土状況（鎌）



1) 北地区井戸址



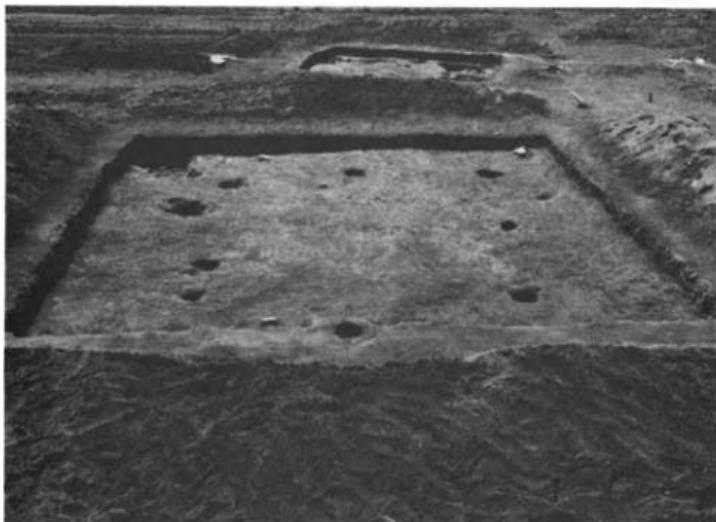
2) 北地区 2号住居址（南より）



1) 北地区 2号住居址遺物出土状況（金環）



2) 北地区 2号住居址遺物出土状況



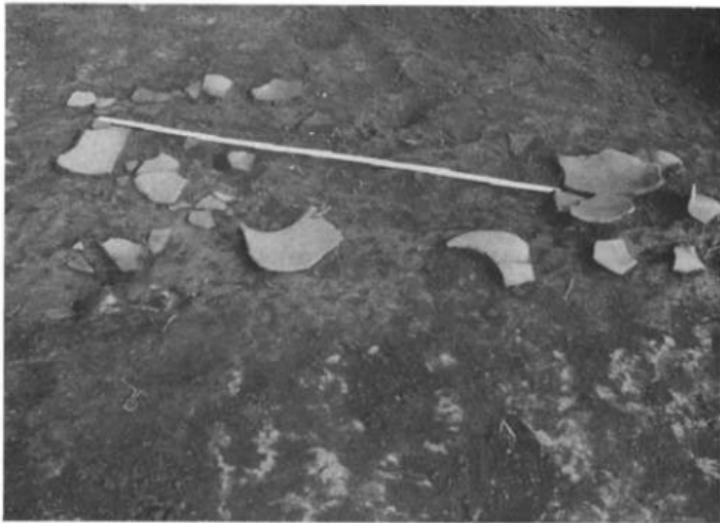
1) 北地区 3号住居址（北より 4号址を臨む）



2) 北地区 3号住居址遺物出土状況（环、3枚重ね）



1) 北地区 4号住居址（南より、3号住居址を臨む）



2) 北地区 4号住居址遺物出土状況（甕）



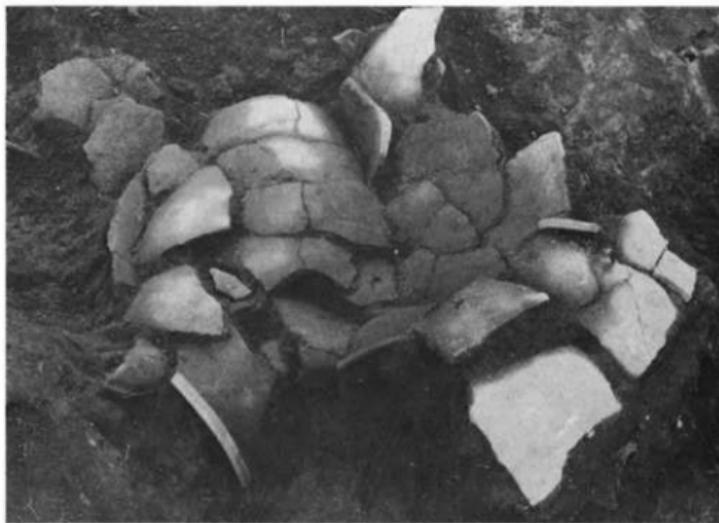
1) 北地区 5号住居址（南より）



2) 北地区 5号住居址遺物出土状況



1) 北地区 6号住居址（南より）



2) 北地区 6号住居址遺物出土状況（甕）



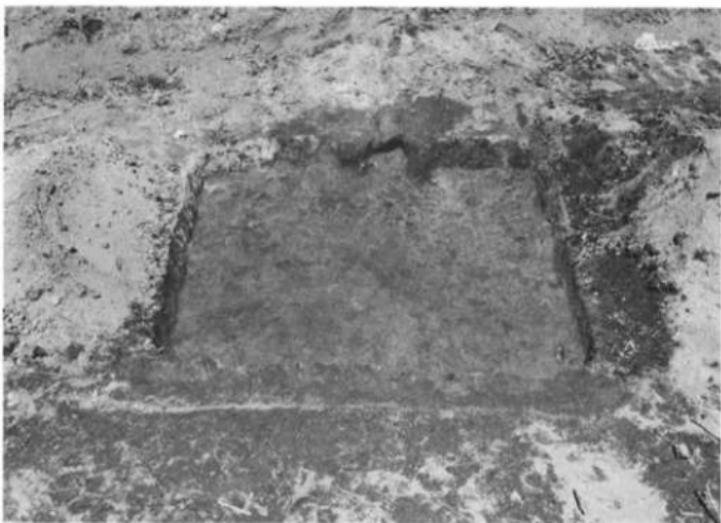
1) 北地区 7号住居址（南より）



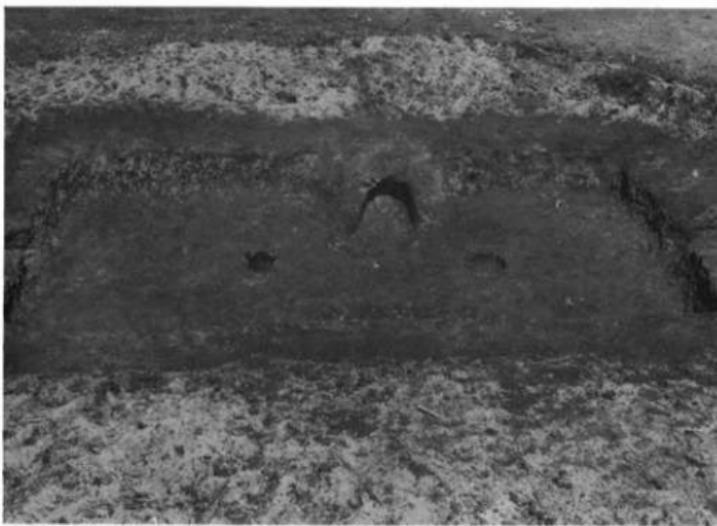
2) 北地区 7号住居址遺物出土状態（カマド東より出土）



1) 北地区 8号住居址（南より）



2) 北地区 9号住居址（南より）



1) 北地区10号住居址（南より）



2) 北地区11号住居址（東より）



1) 北地区12号住居址（南より）



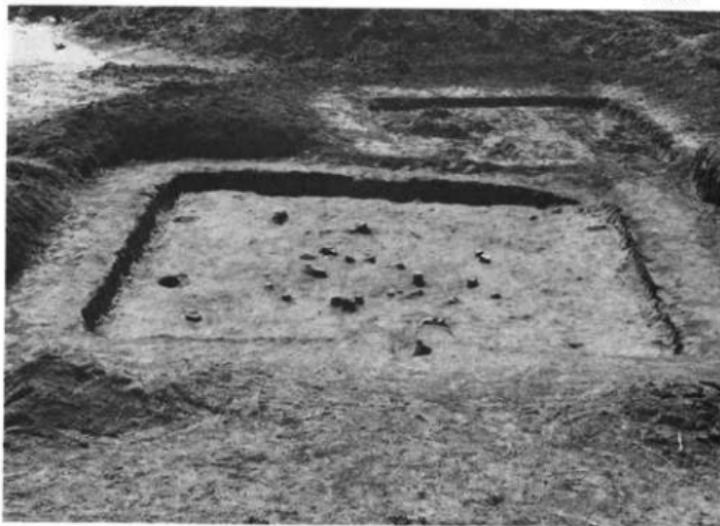
2) 北地区13号住居址（北より）



1) 北地区14号住居址（西より）



2) 北地区14号住居址 須恵器壺



1) 北地区15号住居址（北より18号址を臨む）



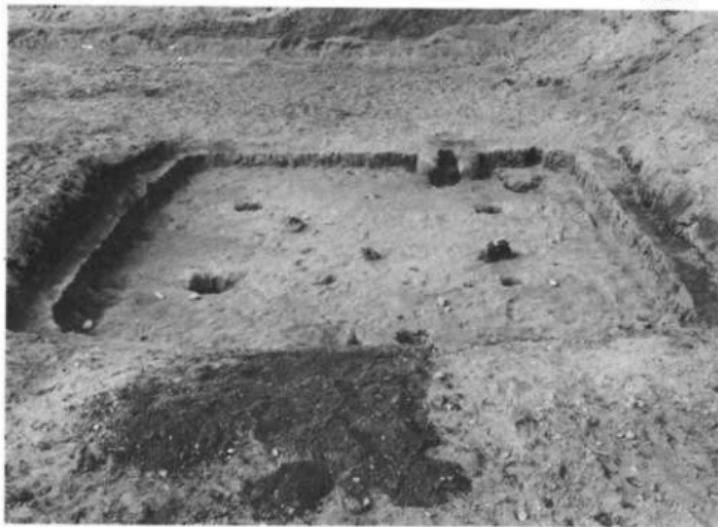
2) 北地区16号住居址



1) 北地区16号住居址カマド



2) 北地区16号住居址砾石出土状況



1) 北地区17号住居址（南より）



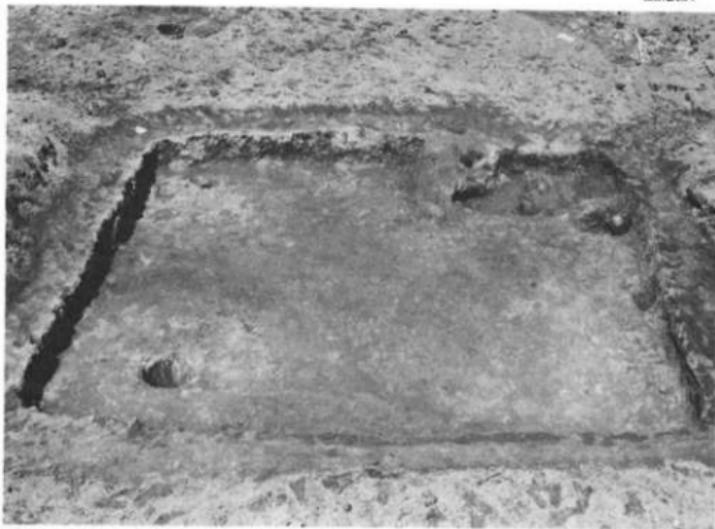
2) 北地区18号住居址（東より）



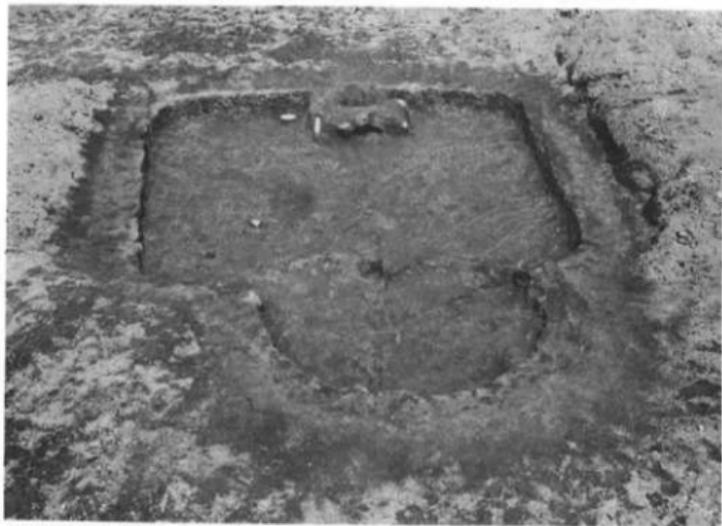
1) 北地区19号住居址(南より)



2) 北地区19号住居址遺物出土状況(カマドそば)



1) 北地区20号住居址（南より）



2) 北地区21号住居址（南より）



1) 北地区22号住居址（北より）



2) 北地区22号住居址遺物出土状況（鎌）



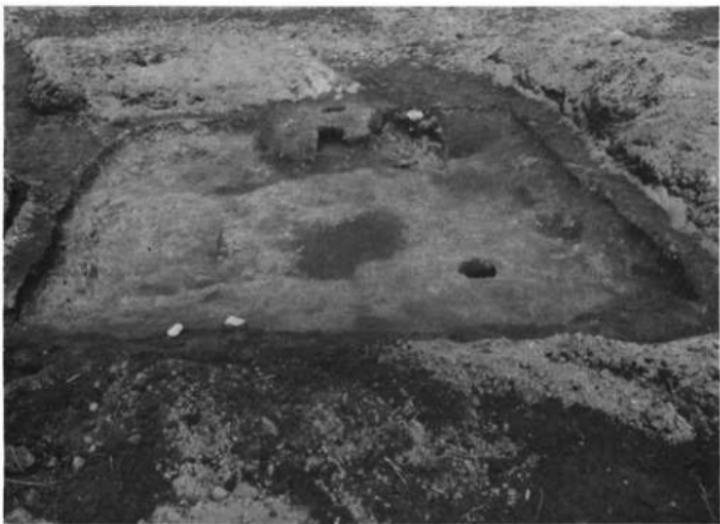
1) 北地区23号住居址（南より）



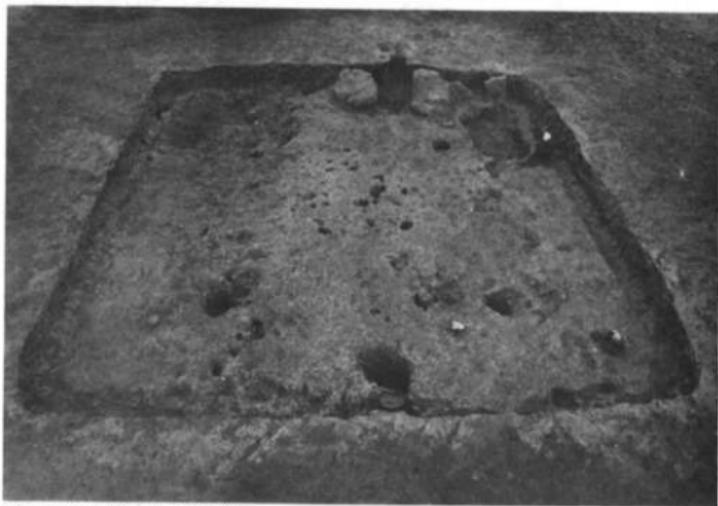
2) 北地区24号住居址（南東より）



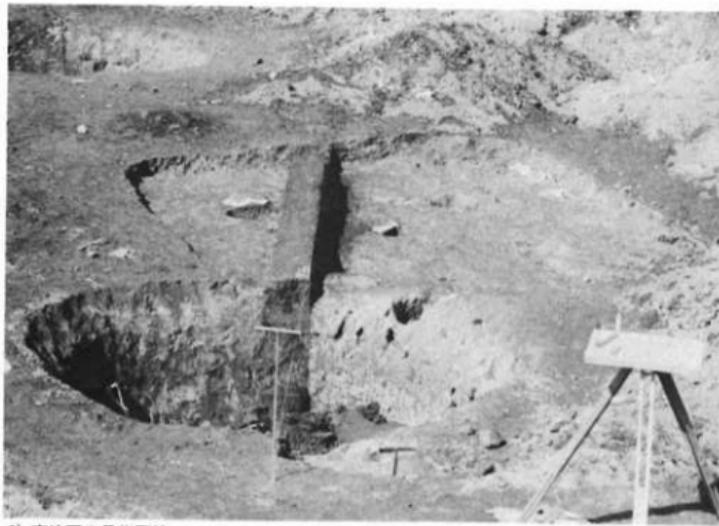
1) 北地区25号住居址（南より）



2) 北地区26号住居址（南より）



1) 南地区 1号住居址 (南より)



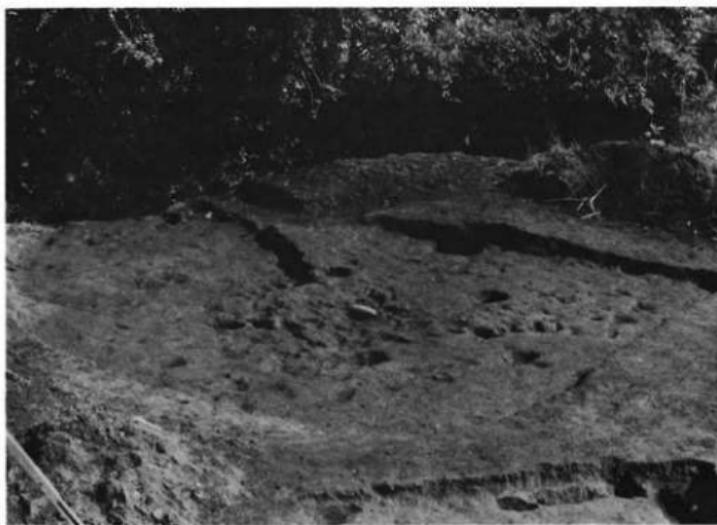
2) 南地区 2号住居址と調査中の4号円形有段遺構



1) 南地区3,4号住居址（西より）



2) 南地区3号住居址遺物出土状況（壺、紡垂車）



1) 南地区5,6号住居址（北西より）



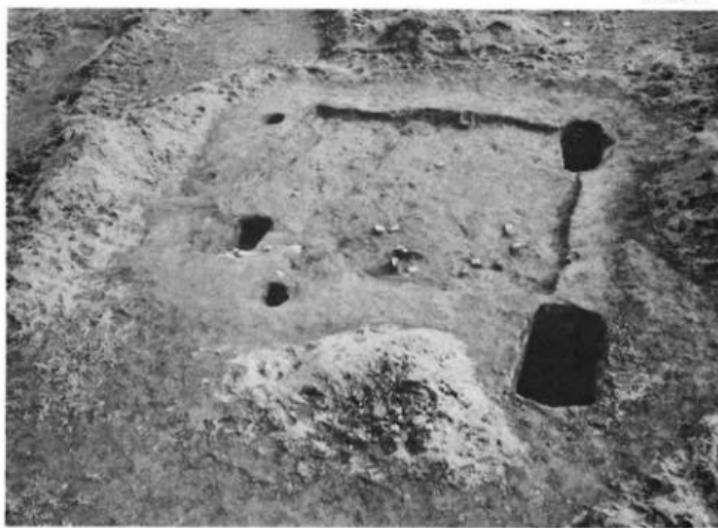
2) 南地区 5 号住居址（南より）



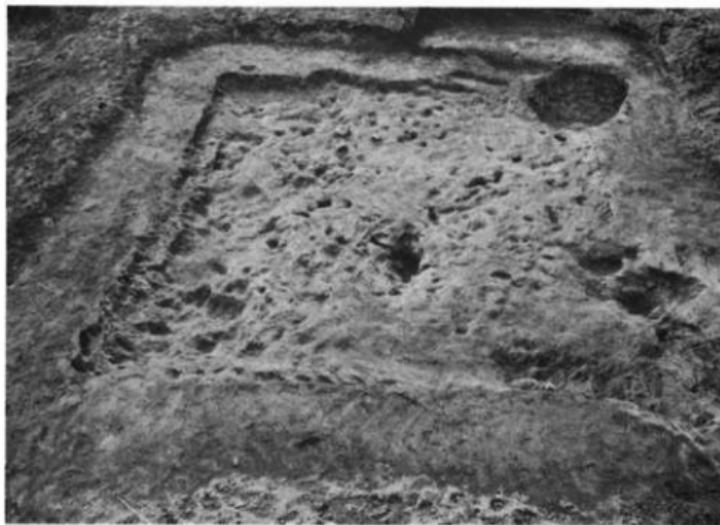
1) 南地区 5号住居址遺物出土状況（紡錘軸）



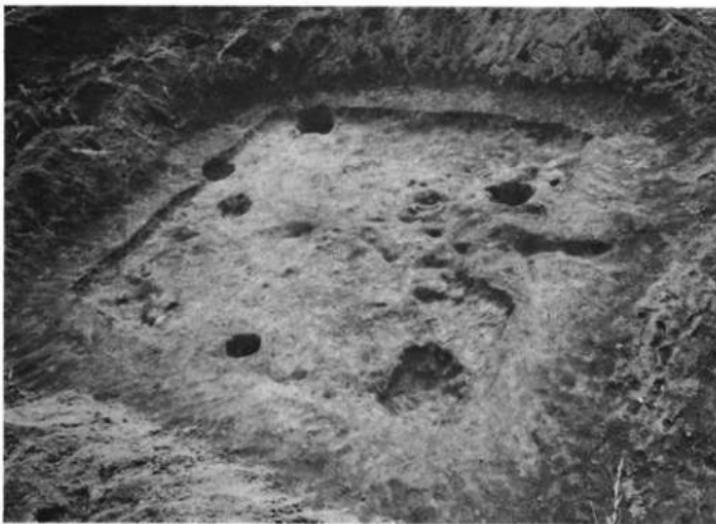
2) 南地区 6号住居址遺物出土状況（杯）



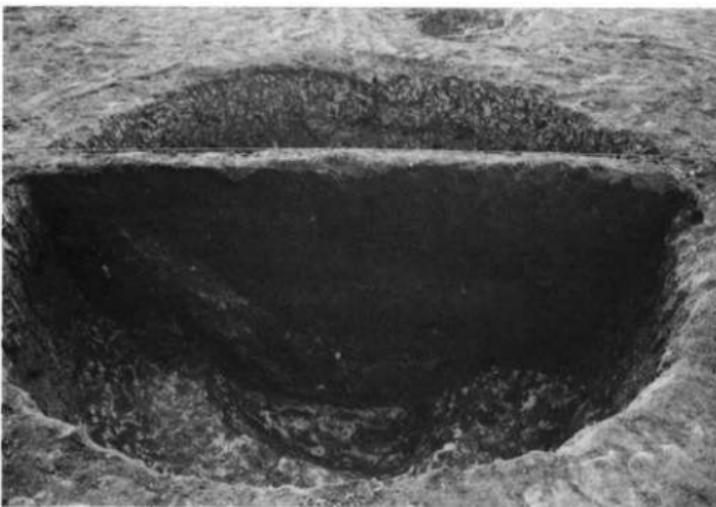
1) 南地区 7号住居址（北より）



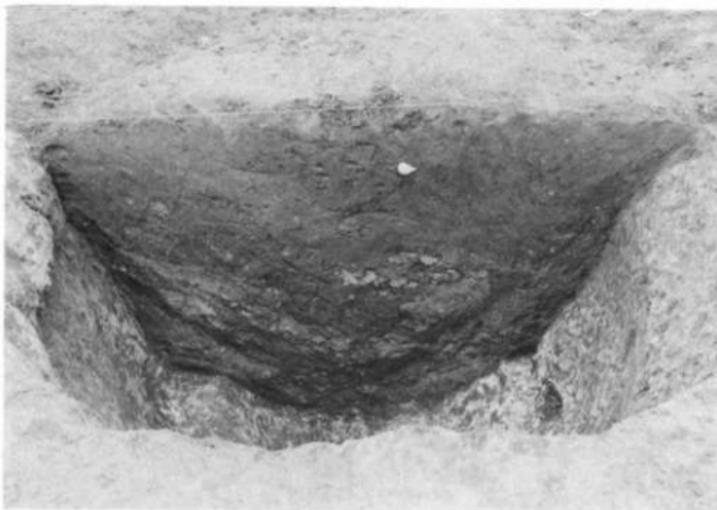
2) 南地区 8号住居址（東より）



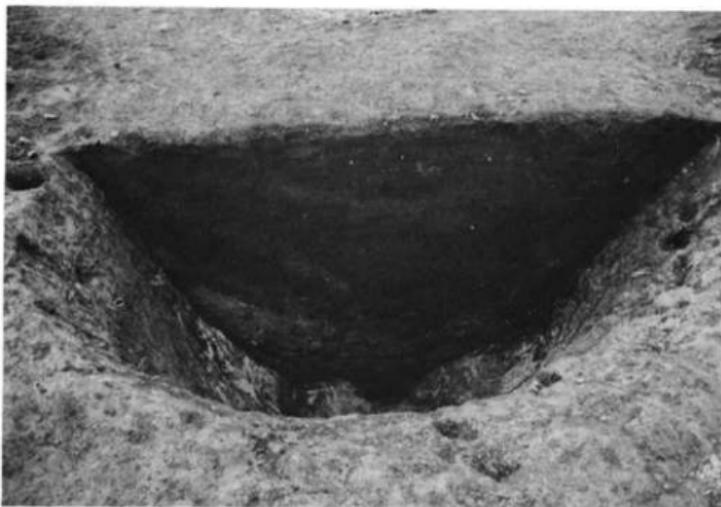
1) 南地区 9号住居址（北東より）



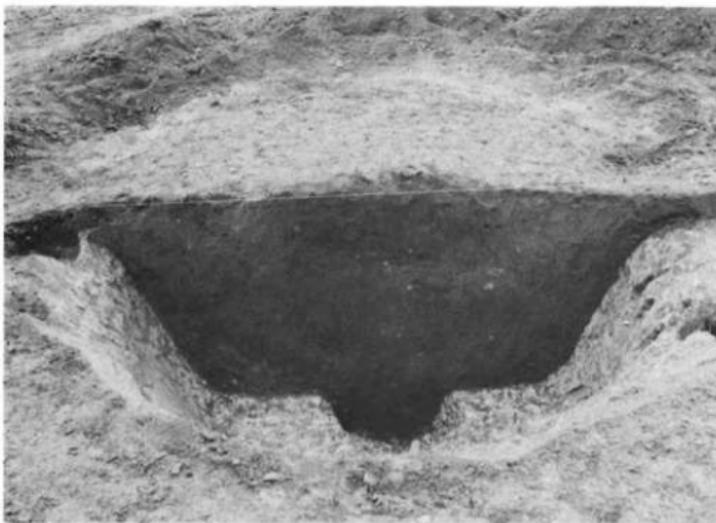
2) 南地区 1号円形有段造構



1) 南地区 2号円形有段遺構



2) 南地区 3号円形有段遺構



1) 南地区 4号円形有段造構



2) 4号円形有段造構壁中より出土した剝片



1-2



1-1



2-23



2-5



2-1



2-2



2-3



2-4



3-1



3-2



3-3



3-4



5-1



5-3



5-2



14-2



15-2



7-1



17-1



18-2



15-1

圖版33 土師器杯形土器(1)



21-1



22-1



24-1



24-2



南3-3



南3-7



1



1



1



南6-2



1



南7-1



1



南8-1



南6-3



円有1



南8-1

図版34 土師器杯形土器(2)



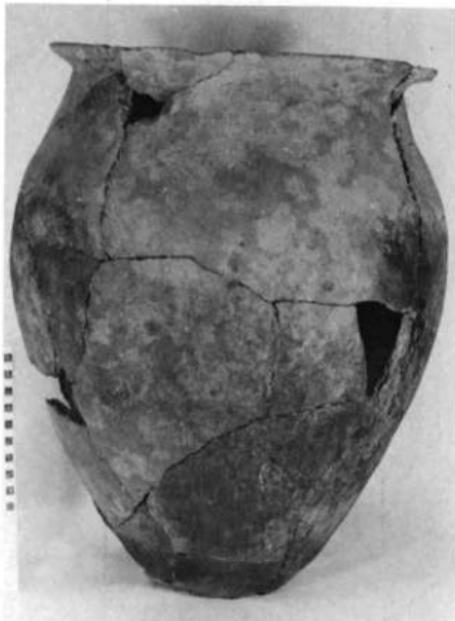
2-7



2-26



2-25



4-1

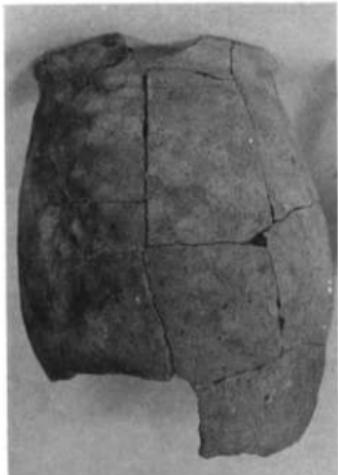
圖版35 土師器磨形土器(1)



4-2



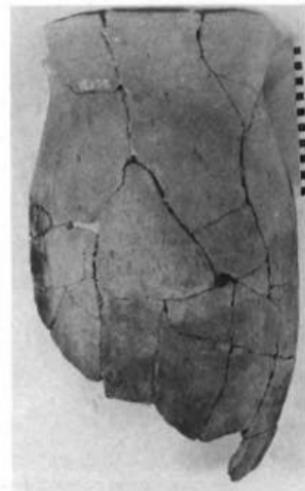
4-3



5-8



5-9

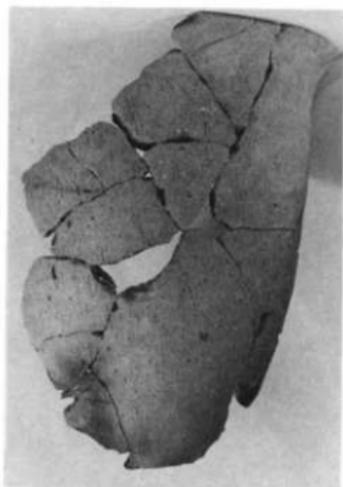


5-7



5-10

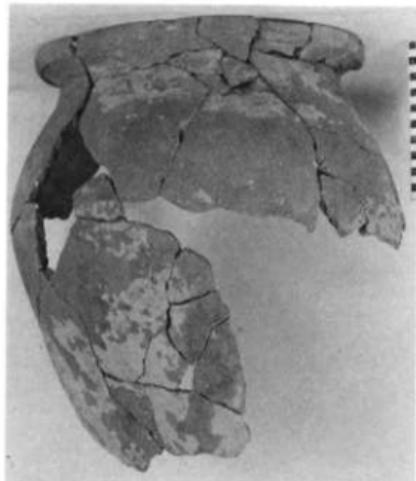
圖版36 土師器變形土器(2)



5-11



6-3



6-7

図版37 土師器変形土器(3)



6-4



7-2



7-3



7-4

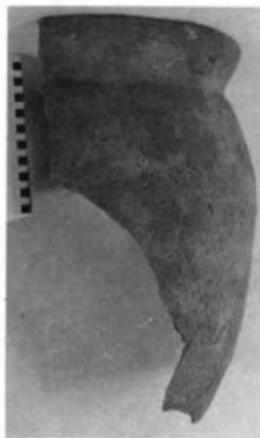


11-2



7-5

図版38 土師器変形土器(4)



12-1



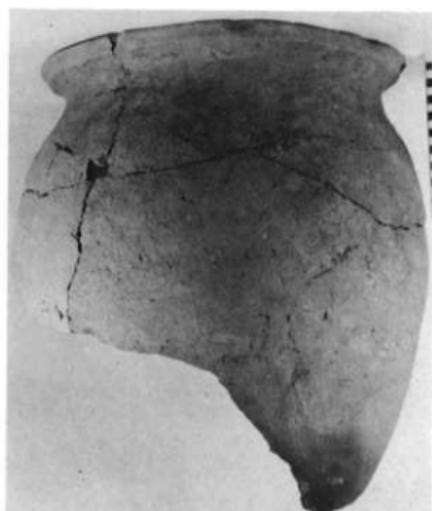
16-3



18-4



19-1



19-2

圖版39 土師器變形土器(5)



21-2



22-6



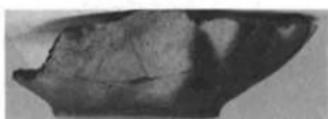
24-5



南1-1



26-2



南8-4



南3-5



南3-4

圖版40



3-7



1-8



6-11



6-9



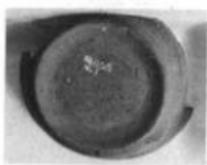
1



6-17



1



6-15



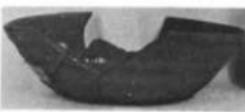
6-18



6-10



1



1



11-4

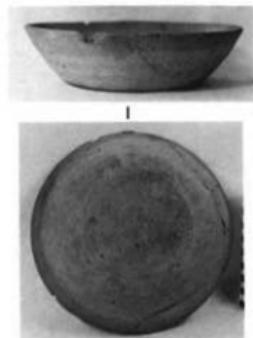
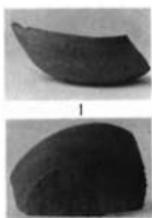


16-4



20-1

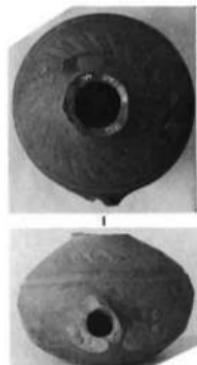
圖版41 須惠器(1)



25-10

南I-3

15-13



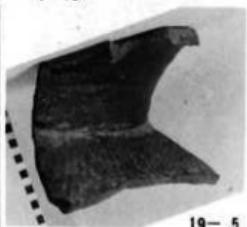
図版42 須恵器(2)



14-3



1-10

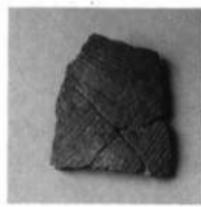
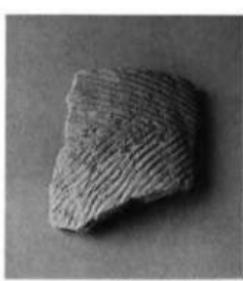
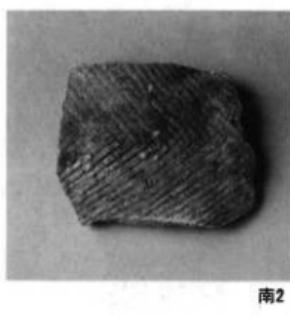
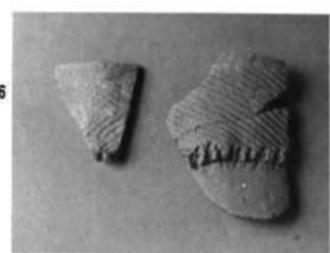


19-5



円有2-2

図版43 須恵器(3)



図版44 陶生式土器



南5-2

南5-3

南5-3



南5-6

南5-5



南5



南5



南5-3

4, 5



南1



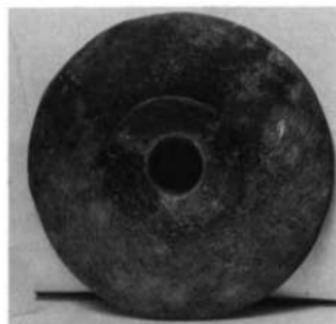
南2

圖版45 繩文、彌生式土器



I-12

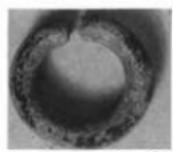
26-3



南3-6

南5-11

図版46 紡錘車



2-30



2-31



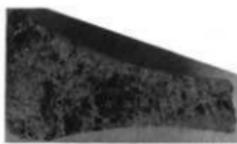
南5-12



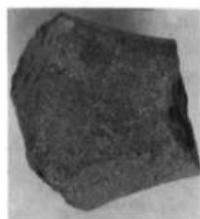
円有-4



16-5



南1-7



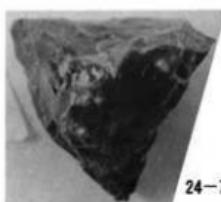
南8-5



24-7

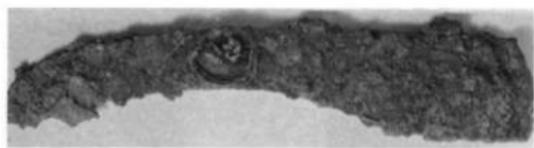


円有-4

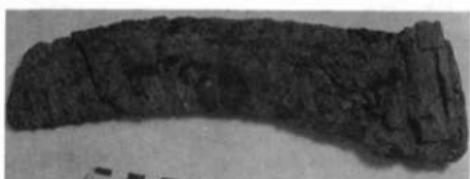


24-7

図版47金環、砥石等



1-11



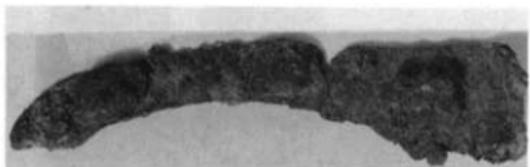
2-32



6-21



11-9



22-11



南-2



南1-8

図版48 鉄製品

V あとがき

瑞穂野遺跡の発掘調査は、昭和48年夏季と秋季の二度実施された。数えれば、はや五年の月日を経た。発掘調査に参加した学生は、皆既に学窓を出、社会人として活躍している。思えば五年という歳月は長いものに相違ない。この五年の間、報告書刊行に関して種々の方面から励ましや叱責があった。それに拘らず、刊行の遅延は、私たちの浅学を併せ、今悔悟の念が絶えない。これには幾つかの理由が考えられる。そのひとつに、発掘調査及びその後の整理作業における計画性の無さがあった。またひとつに、発掘調査から報告書刊行に至る一連のものに対する認識の甘さが挙げられる。更に最も重大なのは、考古学そのものに対する認識の甘さゆえだったかもしれない。報告書を公にするあたり、自戒の気持をもって謙虚に批判を仰ぎたいと思う。

筆者らは本報告書を以って事足りりとは決して考えていない。調査及び整理の上で提起された問題についてまだ充分に検討したとは言えないからである。その具体例を挙げてみれば、「南地区より検出された性格不明の円形有段遺構についての検討」、「北地区より検出された長方形住居址の柱穴の位置から予想される上屋についての考察」、「南地区3号住居址に隣接して、栃木県の土師住居におけるカマドの出現時期」等についての問題が残ってしまった。これらについては、本報告書刊行のための資金額から派生した頁数の制約、原稿提出の期限のため、ここでは割愛せざるを得なかった。これらについては、後日何らかの形で提示したいと考えている。これも、私たちの計画性の乏しさに起因するものと思われるのである。

あとがきに似合わず、繰り言に終始してしまったようだ。ともあれ、今発刊にこぎつけたことは確かに喜ばしいことには違いない。

最後に、報告書作成に至るまで、終始変わらぬ励ましを下さった諸先輩方、筆者らのわがままに絶大な援助と寛容をもって答えた宇都宮市教委、宇都宮市土地区画整理組合の方々、更にお忙しいのに拘らず、拙い原稿・図面等を閲覧して頂き御教示をたまわった宇都宮大学助教授久保哲三先生、そして現宇都宮大学考古学研究会員の諸氏に対し、ここにあらためて深い感謝の意を表す次第である。とくに発掘調査中、暖い目で筆者ら学生の活動を見守って下さった宇都宮大学名誉教授辰巳四郎先生の御心遣い、その後の御心労に対し衷心よりおわびいたします。

(昭和53年2月28日)